中央公論

本號目次



A MOUNTAIN POOL
(ERNEST PARTON)

N. 169

中央公論

第十八年
第參號



極東の將來と國民性格の陶冶

印度の統御難を説く白人は曰く「印度の現状は恰も火藥を全土に埋沒し只一條の導火を待つが如し、誰か一人の燐寸を點するあらば忽ち全版圖の大爆發を來たさん」と。

黄色難を叫ぶ彼等の一派は又曰く「支那は今や巨人の睡より覺めつゝあるが如し、其充實せる富力と其旺盛なる蕃殖力を以て一度び日本の如く活動せんか、白人の恐るべきもの天下豈之に過ぎたるものあらんや」と。

果して印度人が他の統御を受けずして自治を宣言するの時代迫れる歟。果して支那人か完全なる獨立國の體面を備ふるの機會近ける歟。黄色難禍色難、彼等は只自己を刺撃し警醒するの材料として之を叫ぶも、公平なる觀察を下し來れば、先天的亡國性に富める彼の印度人と、國民（チーション）としての資格を全く缺乏せる彼の支那人が、近き將來に於て復雜なる政治機關を應用し、秩序有る文明社會を自ら建設し得可しとは誰か之を信ずるものあらんや。勿論彼等もかゝる境遇に到達するの時機有るべし。然れども其獨立を宣言し、其國家を新造するまでには、先づ彼等が人間としての性格を改良せざるべからず、社會組織の根本を革新せざるべからず。此事豈五年十年の短日月にして望むべきことならんや。所詮印度は猶一世紀或は其以上亡國たるの資格を續けざるべからず。支那は一度び他國の分割を受けて、然る後二代三代の子孫が捲土重來の時節を待たざるべからず。蓋しこれ世界識者の悉く一致するところ

の断案にして、奈何に最負目を以て見る吾人日本人と雖、一度兩國に遊んで實地を觀察したるものは首肯せざるを得ざるところなりとす。

曾て印度は世界の寶庫と稱せられたり、當時歐洲の各國は印度を中心として其利益を爭ひ、遂にジョンブルをして最後の勝利者たらしめき。前世紀の後半より此世界の寶庫たる名稱は、印度より轉じて支那に移れり。而して列强の爪牙は一齊に極東に向へり。第一の寶庫を開き其利益を吸收するに方つてや、憐むべし其持主たりし印度三億の生靈は、奴隷として使役せられ、今猶牛馬の如き待遇を受けて自家の膏血を白人の脚下に捧げつゝあり。第二の寶庫は將に今後に開放されんとす、憐むべき、支那四億の人民は、又々奴隷とし、牛馬とし、最も廉き賃金と、最も氣力無き機械の如き性格を以て、彼等に使役さるゝの運命を待ちつゝあるなり。

試みに現代此第二の寶庫たる支那を中心として、所謂極東に於ける列國競爭の勢力線を見よ。英は其海路より曾て香港を限りとせる根據地を楊子江頭に延ばし、更に威海衛に出てゝ露の旅順大連と拮抗し。陸路よりは阿弗利加を縱斷せる鐵道を延長し、蘇士を越へて印度に出て、緬甸より支那に入りて楊子江岸に達する二大陸縱貫鐵道の大希望を抱きつゝあり。露は其北邊より、其西邊より、席捲の餘威已に直隸に迫り。獨はカロリン群島を基石として一躍猿臂を山東省に延ばし、佛は南方より雲南兩廣へ徐々利益線の延長を力め、久しくモンロー主義に滿足したる米國すら、多年の主義を抛て非律賓にまで肉薄し來れり。犬牙錯雜、所謂列强なるものゝ血眼になつて爭へる利益線に對する活動は極東に於て實に目覺ましきものあり。

試みに極東に於ける勢力の分配を一目瞭然たらしめんが爲めに表を以て類別せんか。

極東に於ける列强勢力の分配表

▲英　國

區分	名稱	面積(方里)	人口
領地	海峽殖民地	一、五四二	五十八萬
	北ボルネオ	三一、一〇六	二十萬
	ニューギニアの一部	九〇、五四〇	三十五萬
	ラブアン	三〇	八千四百
	フイニックス諸島	一六	六〇
	香港(租借地をも含む)	四〇〇	三十八萬
	フロッジー諸島(二百餘島)	七、七四〇	十二萬
保護地	馬來半島(五州)	四〇、〇〇〇	八十八萬
	サラワック	四一、〇〇〇	五十萬
	ボルネー	一五、〇〇〇	四萬五千
	ソロモン諸島(二十餘島)	八、三五七	未詳
	サンタクローズ諸島(七島)	未詳	同
	ギルバート諸島(十六島)	一六六	三萬五千
	エリース諸島(九島)	一四	二千四百
	フレンドリー諸島(三群)	三七四	二萬
	ユニオン諸島(五島)	七	一千
勢力地	楊子江域(北緯二十度至三十四度 東經八十度至百廿二度)	未詳	未詳
	舟山群島	同	六萬
租借地	威海衛	二七〇	十二萬

▲佛國

區分	名稱	面積	人口
領地	交趾支那	二二、〇〇〇	二百三十萬
	東京	四六、四〇〇	七百萬
	暹羅の一部	六、〇〇〇	未詳
	ニューカレドニア島	七、七〇〇	五萬三千
	ローヤルティー郡島	八〇〇	一萬五千
保護地	安南	五二、一〇〇	六百四十萬
	東蒲塞	三七、四〇〇	百五十萬
	老撾	九八、〇〇〇	四十七萬
	ウオリス島	四〇	四千五百
	ホールン島	未詳	千五百
勢力地	海南島	未詳	未詳
	兩廣及雲南省(佛國境に接する地方)	同	同
租借地	廣州灣	三八六	二十萬

此外英佛兩國の保護地として
ニューヘブリデス諸島(四十餘島)有り面積不詳人口十四萬

▲露國

		面積	人口
領地	黒龍州	一七五、五四八	十四萬
	沿海州	七四三、一八八	二十七萬
	樺太	二九、六七一	二萬八千
勢力地	滿州	三六二、三一〇	一千餘萬
	廟島列島	不詳	不詳
	長城以北	同	同
	巨濟島（對岸陸地を含む）	同	二萬五千
	蒙古	一、二八八、〇〇〇	二百萬
	西藏	六五一、五〇〇	六百萬
租借地	關東州	不詳	不詳
	長山列島	同	同

▲獨國

		面積	人口
領地	サモア諸島	一、〇〇〇	二萬九千
保護地	ニユーギニアの一部	七〇、〇〇〇	十一萬
	ビスマアク諸島（十五大島）	二〇、〇〇〇	十八萬
	ソロモン諸島（英以外の諸島）	四、二〇〇	四萬五千
	マリアナ諸島（十四島）	二五〇	二千
	カロリン諸島ペリユー諸島	五六〇	四萬
	マーシャル諸島（三十群島）（西班牙より一八九九年八百三十七萬五千圓にて購入カロリンの三十七島群ペリユーの十餘島）	一五〇	一萬四千
勢力地	山東省（英の威海衛を除き全部）	五五、五〇〇	三千六百萬
租借地	膠州灣	二、七〇〇	百二十六萬

▲米國

領地	非律賓諸島（二千餘島）	一一、四〇〇	八百萬
	グアム島	二、〇〇〇	九千
	サモア諸島（獨領以外）	七九	五千八百

▲葡國

領地	澳州	四	七萬九千
	チモル島一部	七、四五八	三十萬

▲蘭國

領地	蘭領印度（ニユーギニー、ボルネオ等）	七三六、四〇〇	三千四百萬

▲日本

勢力地	福建省	四一、三〇〇	二千二百萬

極東の現狀此の如きに際し、我國民は内に一國の獨立

を完ふし、外に利益線の擴張を絶やさゞるの責任を遂行せざるべからず。且つ亞細亞の教師として同州各國民の啓發を力めざるべからず。白人がクリステンドム共同の敵と云ひ或は劣等人種と云ふ偏狹なる思想の二大障壁に向ても之が了解者の任に當らざるべからず。其責任の大、顧みて今更の如く二十世紀の此の難關を通過し得る資格の有無を自ら危むの念無き能はざるなり。人は言ふ、此如き狀勢なるが故に軍備の充實を第一に急かざるべからずと。又言ふ此の如き有樣なるが故に財政の整理を刻下の急務とせざるべからずと。然り軍備も必要なり、財政も急務なり、然れども軍備よりも財政よりも、吾人が常に言ふ國民性格の陶冶なるものは何よりも國勢發展の上に於て先決問題たらずんばあらず。英國の海軍と領地を擧げて朝鮮に與へたりとも、朝鮮は依然として半亡國なるべし。露國の軍備と米國の富を併せて印度人に與ふるも印度は依然として亡國の民たらん。アングロサクソンの性格有て始めて英國の現狀を保つべく、スラブの性格を備へて初めて露西亞の今日を維持するを得ん。

我日本人は果して彼等と雁行し彼等を凌駕し得るの資格を養ひつゝありや否や。

記して茲に至る、吾人は忽ち現時代に於ける世界二個の極端國民に想ひ到らずんばあらず。一は亡國性の極端、一は興國性の極端、其長短利弊を取捨して大に鑑みるところあらんか、國民が自家性格の缺點に對する反省の實や、擧かるところあるべし。

日本人の鑑むべき兩極端國

何をか二個の極端國と云ふとは他無し、亞細亞に於ける印度と、北亞米利加に於ける合衆國是なり。一は舊世界に於ける最舊邦、長へに四五千年の歷史を有し、世界最古の文明國にして、一は新世界の新興國、僅に三四百年の歷史を有し、世界最新の文明國なり。既に歷史に於て先づ世界の兩極端を示せる二國は、萬般の國情相反し、コントラストの妙を極むる他に此の如きを見るべからざるものあ

り。試みに其數條を擧げん。

一　印度人は世界第一依賴心多き人種なり、最も乞食根性の發達せる人種なり、米國人は世界第一自助の念强き人種なり、獨立の心高き人種なり、依賴心の極端と獨立心の極端、一は無慘なる亡國民となり、一は羨むべき全盛の與國たり。

一　宗敎の弊害多きこと印度の如きものあらず、これより生ずる意志の束縛と、これより來る迷信の害毒とは全く他國人想像の外にあり。三億の生民に對して三億三千の神有るが如き、豈我八百万神の比ならんや。彼國土の一草一木、皆迷信の種子とならざるものなく、彼國人の擧手投足、悉く宗敎の束縛を受けざるものなし。彼等が亡國性の一半は慥に宗敎中毒より來れり。米國は之に反して信敎の自由最も完全なる國なり、思想の束縛を全く受けざるの人民なり、信仰及び思想の壓制と自由、慥に世界の兩極端なり。

一　階級制度の餘弊は宗敎と同じく印度を亡ぼせる一大要素なり、種族高下の觀念强き印度人の如きは世界に類無し。印度國民の社會的進步は此カストの惡制度に依て絕望となれり。而して一方に自己の材能に依らざる先天的階級の高下なるものが皆無なると米國の如きも亦他に類例を見ず。首陀吠舍等劣等の階級に生れたるものは、奈何に生活程度高きも、奈何に伎能の勝れたるあるも、婆羅門族に對して、終世口を開く能はず、衣に觸るゝ能はずと云ふが如き印度流と、今日街頭の靴磨も、其才能さへ有らば明日は大統領の椅子をも爭ひ得べしとの米國流と、又奇なる兩極端の現象に非ずや。

一　印度人は只未來の觀念のみ有り、米國人には只現在の思想のみ有り。吉凶禍福一に天地主宰の梵天のみを妄信するは印度人也、座作進退全智全能の黃金のみに依賴するは米國人也、一は精神的文明の弊害のみを受け、一は物質的文明の極端に走る。而も之に依て印度人は世界に於ける最も實

務に疎き人種となり、全國の商業を擧げて少數の波斯人に蹂躙せられつゝあり。米國は之に依りて商業的併吞（コンマーシャルインベーシヨン）の名に於て世界列國を膝下に拜跪せしめつゝあり。

一　印度人は世界最貧の人民なり、米國人は世界最富の人民なり。ロード、カルゾンは報告して曰く、英領印度の人民平均して一人一年に費やすところ十八ルーピーに過ぎずと、十八ルーピーは我十二圓内外なり、彼國民生活程度は一ヶ月一圓に過ぎず。これを米國人が七千五百萬の人口に五十億萬圓の貯金高を有し、生活の程度世界第一と稱せられ、國庫は餘剩金の處分に困難すと云ふに比して果して奈何、則ち印度と米國は貧富兩極端の人民なり。

一　一は最も神秘的なる國民なり、一は最も科學的なる國民なり。懶惰にして怯懦、寢て果報を待つは印度人なり、勤勉にして冒險、勞働を神聖とせるは米國人なり。偏狭にして自國以外を知らず、嫉妬深くして只同志討を事とする印度人の如きものあらず、寛宏にして世界的常識に富み、共同一致の念に富める米國人の如きも又稀れなり。印度人は只虛學を崇び、只空想に耽り、口に爭ふのみにて手に實行するを知らざるの人民なり、米國人は力めて實學を奬勵して、百事實際的なる人民なり。

一　米國にスピリチヤリズム其他神秘的なる宗教の行はるは、餘りに一方に極端なるが爲に起れる小さ反動なり。印度にブラマソマジ、アリヤソマジ等の運動起れるも亦之と同じ、而してビベカナンダの如き印度教徒が、米國に於てニユーヨルクシカゴ等に信徒を有せると、ヲルコットの如き米國人が印度に移りて宗派心の打破と階級制度の打破に力を致せるが如き、實に兩極端國の奇妙なる對照と云ふべし。

見て茲に至り、讀者諸君は果して奈何の感かある。吾人素より黄金萬能宗の信者に非ず、亞米利加流義にも

幾多の短所弊害有るを認むるものなり。然りと雖我國民の性格が、百事亞米利加流義に近きよりも、却て印度流義に酷似するあるを見る時は、誰か慄然として反省の念に打たれざらんや。

其依頼心多き事に於て、其迷信の弊害多きことに於て、其階級制度の餘弊多きことに於て、其實務に疎き事に於て、金儲けの拙なる、世界的常識に缺けたる、內輪喧嘩の多き、虛學を貴ぶものゝ多き、只空論のみ盛んなる、只猜忌のみ發達せる、偏狹なる、懶惰なる、陰險なるいつれか印度的亡國性の發現ならざらんや。

日本は其位置印度と米國の中間に在り。印度的亡國の感化、亞米利加流與國の影響、恰も寒暖二潮流の合して濃霧を起すが如く我國民を驅て五里霧中に彷徨せしめ、其方向に迷はしめんとす。其政治家たると、其敎育家たると、其宗敎家たるとを問はず。苟も國民性格の陶冶に責任ある者は深く其弊の在るところを察し、極力亡國的性格の除去に力を致さすんは、豈列强と雁行し得ざるのみならん。豈亞細亞の敎師たるを得ざるのみならん、今に一國の獨立すらも滿足ならざるに至り、朝鮮たり支那たるの運命を自家の頭上に來たすの時有らんなり。吾人の之を言ふ實に昨今の時事、國民亡國的行動の發露が益す頻繁なるに感ずるところあればなり。

（楓　堂）

注意すべき刻下の問題

文學博士　井上哲次郎

(一)敎育家の收賄事件

昨冬以來世間の耳目を驚かして來たのは敎育家の收賄事件でありますが、是は我邦の敎育界に取つては一大災厄と言ふべきことであります、我々の記憶して居る所で考ゑて見ますといふと、是まで此の如き甚だしき災厄が敎育界に起つたことは無いやうであります、之に付ては其原因の存する所を明かにし又善後の策をも講ぜねければならぬと思ふのであります、此の如きことが起つた以上は最早過去の事は問ふに及ばない、是はモウ致方ないからして唯々善後の策を講ずれば足れ

りと思ふ人があるかも分りませぬ、けれ共善後の策を講ずるには矢張り其原因をも明かにして置かねければならぬ、原因を除かずしてどうして善後の策が講ぜられませうか、是は迚も覺束ないことであらうと思ふ、但其原因と言ひましても決して單純なることては無くして實際に於ては種々錯雜して居るものと思はれますからして、俄かに其精細なる事を論ずることは容易てはありませぬ。

併なから是は社會全體の腐敗より來つたものであらうと思はれる、固より社會全體が悉く腐敗して居るなどゝいふ意味てはありませぬが、日本の社會の腐敗せる所が教育界以外にあつて其外波が此處に及んで來たのてはあるまいか、殊に政治家の收賄などゝいふことが屢々近年新聞紙上に見えて居るところに依つて考へて見まするに、どれ程までそれが事實てあるかは知らないけれ共、隨分右樣の事實があつたことてあらうと思はれる、若し是が事實てあつたとしますれば今回の教育家の收賄事件などゝいふものは比較的に些々たるものであるです、唯々教育家といふ者は兒童の教育を擔任して居る者て社會に於て最清潔でなければならぬ筈のものてあるのに、收賄事件などゝいふ忌々しい事を惹起したといふ所に、其重大なる責任が存して居るのてあります、それで假令收賄事件としては政治家のそれに較べて些々たりとは言ふものゝ、決して此儘に恕すべきことて無い、是は終極の所まて撲滅して行くべきことてあらうと思ふ、さうすれば雨降つて地固まるで、あとの教育界の形勢は大に健全なる情態になつて來るてあらうと思はれます。

察する所、教育家の收賄事件は、初め政治家が手本を出したのてはあるまいか、政治家の收賄事件といふことが近年嘖々として耳を撲つて來るその餘波が、遂に此處に至つたかと思はれる、教育家の胸中を察して見るに收賄などゝいふことは滔々たる世間の情態である、是は實に今日となつて見れば公然の秘密て政治界の如き到るところに行はれて居る、其他にも收賄が行はれて居る所が少くない、我々教育家のみ斯樣に清潔なる情態を維持して居るといふことは馬鹿正直てはあるまいか、餘りに是は迂濶に陷つて居るのである、ナニ是は今の世の中の一般の情態であるからして深く咎むるに足らないことてあらうといふやうな工合に、政治界の手本に倣ふて、遂に此の如き淺間しき情態に陷つたのてあらうと思はれる、固より是は推察てありますけれ

共其推察は當らずと雖も遠からずといふものでありませう。

それならば其政治界の收賄を始とし滔々として世間の風俗が唯々私利私益を收めることに走るやうになつたといふのは如何なる原因に基くことでありませうか、是は一躰に西洋の風俗が輸入せらるゝに當りまして、非常な有益なる科學が興りましたけれ共之れと同時に又拜金宗などゝいふ腥き主義も這入つて來ましてそれが隱然人心を動かしたやうであります、固より正義に伴ふたる拜金主義が決して悪いことゝは言へませぬけれ共どうも人心の弱點に乘して拜金主義が甚たしき弊害を來すやうになつたといふのは、是は必然の勢ひであると思ひます、金錢の事は矢張り女色と同じく人を不德不倫に陷れること速かなるものでありますからして、拜金主義なとに依つて之を煽ぎ立てますれば其結果の恐るべきことは期して待つべしと謂ふべきであります。

世の論者が或は收賄事件の原因を尊王愛國を本とする道德主義に基くが如くに言ふこともありますけれ共是は收賄事件と何等の關係も無いのであります、兎に角今後は清潔ならざる教育家を悉く教育界以外に排擠し終つて、而して後健全なる情態を現出するで無ければ教育の前途といふものも甚だ危いことであります。

(二)國定教科書

此の如き收賄事件が教科書の爲に起りました以上は一切小學校の教科書を國定にすること甚だ得策であります、固より民間に好き教科書があれば之を文部省が採用するも宜しうございませう、兎に角今までの如き制度を一變して國定教科書とすることは此の如き惡弊の淵源を杜絶するの方策であると思ひます、尤も我々の考ては到底先き〳〵は自由選擇にするが宜いと思ふ、即ち何人の著述したる教科書と雖も文部省が檢定したるものならば勝手に選擇して教科書として採用するとが出來るやうにしたいものであります、今迄のやうな審査會の審査を經ずして其學校其學校の校長が隨意に教科書を選擇するといふとであります、それて自由選擇の制度といふものが終極の目的でありますけれ共それに達するまでに國定教科書の時代が必要であらうと思ふです、國定教科書の時代が十年なり十五年なり續く間に今までの小學校教科書を出版して居りました書肆が皆之が爲に目的を變じて仕舞ふてありませう、そ

れて愈々自由選擇の制度を採る時には餘程敎育界の情態が今日とは違つたことになるてあらうと思ふです、唯修身書のみは果して自由選擇とすることが出來るや否や、少しく疑が無いでは無い、併し是とても民間に良書があれば決して採用していかないなどゝいふことは無い、成るべく博く良書を捜索して之を採用するといふことが必要でありますが、矢張り文部省が之を檢定するといふことが無ければならぬてあらうかと思はれます。

世の論者の中に或は文部省に於て修身書を編纂することを非とする者もありますが、是は一應御尤ものやうてあります、若しも文部省の俗吏が單に機械的に修身書を作り出すといふやうなことてあつたならば何人も賛成は出來ないのてありませう、併なから文部省に於て修身書を編纂するものが必ずしも右樣の俗吏のみであるといふことには限らぬのであります、文部省の編纂の用を務めて居れば誰でも必ず修身書を編纂するに足らざる俗吏とは限らぬ、それて文部省が修身書を編纂するに適當なる人と認める者に委任して編纂せしむることならば何も之を非とするに及ばないてあらうと思はれる、尤も修身書は其著者の名望に依つて行はれるといふことが最望ましいことでありまず、言換えて見れば人が其著者を道德の師として信仰するに依つて行はれるといふことてあります、もう之に越したることは無いのであります、其點から言ふと誰の編纂に拘らず、之を自由選擇に任せて唯、世間の人々の信仰の結果に依つて行はれるやうにする、さうすれば世人が最尊信して居る人の修身書が最廣く行はれることになる、即ち自然淘汰の結果、眞に其修身書と之を編纂したる著者との一躰不離の關係に依つて行はれることてありますから、是程確かなるとは無いのてあります、此點から見まするといふと文部省の編纂は如何と疑はれますけれ共、併なから民間に於て修身書の好きものが餘り澤山あるとも見えぬてす、澤山好き修身書が民間にありますか一つ論者は例を擧げて見たら宜からうと思ふ、殊に小學校の修身書として適切なるものが何處にありますか、文部省が懸賞をして修身書を募つた所が、餘り好い物が出て來やうといふ望みが無い、それといふは學識あり名望ある者は餘り懸賞などには應じて來ない、太して學識も名望も無い者が懸賞といふことを目的にして修身書を書くといふことになるのてありますから、太した結果は是には望まれぬのてあり

ます、それで先づ〳〵文部省に於て種々なる點を考へて最缺點の少い最實際に適切なる修身書を編纂して、之を模範として示すことが宜からうと思ふ、併ながら果して民間に於てそれより優つたる修身書が出て來たならば其時はそれを採用することを考へても遲くはなからうと思はれます。

（三）劃一主義の是非如何

國定教科書といふものが出來ますれば劃一主義は免かれない、假令修身書丈けでも文部省で編纂したるものを以て押通す時にはそれ丈け劃一主義が行はれる譯であります、世に劃一主義の非を論ずる者が少く無いやうでありますけれ共是は深く考へないから起るのであらうかと思はれる、尤も嚴密なる意味に於て劃一主義を行ふといふことは我々も決して贊成で無い、我々は天才教育を主張する側でありますからして勿論劃一主義などゝいふことを行はずして濟めば之に越したることは無いのであります、併ながら實際どうでありませう、全く劃一主義を廢することが出來るものでありませうか、第一小學校から中學校、それから高等學校を經て大學に這入るやうにしてあるといふのも是は劃一主義であります、尤も學力さへあれば如何なる學校に居つた者でも試驗を受けて大學に入ることは出來るのでありますけれ共さう云ふ者は極めて少い、矢張り正式の順序を經て來る者が多數であります、又今日のクラスシステムといふものが劃一主義であります、一級の中に居る者が皆同一の性質といふ譯でも無く同一の學力といふ譯でも無いけれ共、如何せん一人〳〵を分けて其性質其學力に應じて教育することは到底出來ないのであります、それで何十人といふ性質學力の異つたるものを一級として教育しつゝあるのであります、是は劃一主義であります、之を全く廢するとは到底出來ない、又教育の行政を政府が司つて居る以上は全國の教育に統一を與へねばならぬ、其統一は國家の目的に合するやうにするを必要とする所であります、若し國家の目的に合するやうに統一を期するを要しないといふことであつたならば、それは劃一主義が不用といふことになりませう、若し劃一主義が不用ならば教育の行政を政府に任するといふことがいけないことになるのでありませう。

それで實際に於ては劃一主義は或程度までは到底免れないことゝ覺悟せねければならぬ、若し劃一主義を廢

したならば如何なる名案がありますか、どうして教育を施しますか、劃一主義の非を論ずる者は多いけれ共之に代るべき名案を出したるものは嘗て見たことが無いのであります、唯々劃一主義を執ると同時に出來得べき丈け應用的變化を要するのであります、元來人間の性質學力といふものは色々違つて居るのでありますからして必ずしも此の如き異同を蔑如しないで臨機應變の態度に出づることが必要である、教育は餘りに機械的に形式に拘つてはいかぬといふことは是は重々教育界を警醒する爲に論ずべきことであります、又天才教育の必要をも併せて主張すべきであります、併し未だ全く劃一主義を除いて可なる所以を發見することは出來ませぬ。

(四)哲學館事件

近頃哲學館事件に關して種々なる議論が各新聞紙上に見えて居ります、我々も兼て教育上のことには出來得べき丈け注意して居りますので是等の新聞をも大抵は漏さず見て居りますが、抑々ミユイルヘッド氏の動機と結果の論及其引例の適否如何といふことは暫く措きまして、我々の最懸念することは日本に於ては唯々上

每一人に關する不祥の文字を二三箇處に新聞紙上に發表して述べて居ることであります、どうか此の如き不祥な文字を無遠慮に用ゐることなくして學理ならば單純に學理、行政ならば單純に行政を論じた方が宜からうと思ふのです。

所が又此哲學館事件の餘波は意外の所に及んで來るのである、といふは其張本は我々自身であるかの如くに言觸らす者があると見えて、或新聞には恰も事實の如くに記載してあるのに驚き入るです、文部省が哲學館を處分するに當つて、先づ我々を喚出して其倫理説の危險なりや否やを問ふたところが、我々が直ちに其危險なるを言ふたが爲に哲學館は其特權を取上げられてさうして又我々の哲學館に對して平生宿怨を懷いて居るところからして文部省の處分に贊成したが如くに言觸らして居るのに更に又驚き入るです、哲學館事件には始より我々は何等の關係も無い、之が爲に文部省より喚出されたりなどいふことは夢にも無いことである、又哲學館に對して宿怨を懷いて居るなどゝいふことも夢にも無いことである、隈本視學官が哲學館に關する倫理上の疑問に付て大學の某教授に問ふたといふことを言ふて、其某教授は果して誰たるやを明言しな

かつた所からして某教授は即ち我々であると斯様に揣摩臆測したのであるまいか、又我々は哲學館主の井上圓了氏と學説上に於て相互に辯駁したことはある、學説上の見解が違ふ所からして相互に辯駁することのあるといふのは是は學者間の通例のことでありまして固より怪むに足らぬそれが爲に我々が哲學館に對して宿怨を懷くとか井上圓了氏其人に對して宿怨を懷くとかいふやうなことが露程もあつた例が無い、哲學館は我々は講師となつて助力したこともある、未だ甞て哲學館の發達を妨害したることと及妨害しやうと思ふたことは決して無いのである、哲學館事件の爲に我々は意外の迷惑を被つたのであるからして併せてこゝに辯解して置くのである。

(五)現今の宗教問題

我々は近來是までの歷史的宗教に代ゆるに倫理を以てすべし、倫理が將來の宗教たるべきものであるといふことを主張しつゝある、所が昨年の十二月の本誌であつたかと覺えますが、加藤博士は我々の此見解を以て誤れりといふことを斷言して居られますけれ共、それは加藤博士一人の見解である、加藤博士の見解を標準として我々の見解を議する譯にはいかぬ、我々は加藤博士の見解を誤れりと斷言して憚らぬのである、加藤博士は是まで宗教の事などは餘り研究した人ては無い、宗教の學問に於ては誠に素人であると思ふです、隨つて我々の宗教に關する見解に向つて此の如き斷案を下すなどゝいふことは實に己の分限を知らない疎忽の擧動であると思ふ、加藤博士が平生尊崇して居られるエルンストヘッケルの説の方が却つて我々に近いてす、ヘッケルは其近著の「ウエルトレッツエル」中に於て眞善美の理想を以て從來の宗教に代ゆることを主張して居るのであります、又社會教育學の著者たるヘルゲマン氏の如きも其最後の一章に至つて殆ど吾人と同一見解を述べて居ります、氏は從來の宗教の著しく衰頽して最早何等の勢力も無いことを斷言し、之に代ゆるに倫理を以てすべし、倫理は即ち今後の宗教であるどいふ趣意を最痛快に論じて居ります、それで此の如き見解は獨り我々のみならず歐羅巴に於ても一致して居る者があるです、殊にソールターギビチキーなどゝいふ倫理運動を主張する學者は此點に於ては全く同一見解を有して居るのであります、之に付ては是まて既に論じたこともありますが、尚今後充分に論ずる

機會もありませうからして、唯々加藤博士の斷案は甚だ疎忽なることを明言して置けば足れりてあります、さうして加藤博士は右樣のことを論じながら餘り其理由を精細に述べて無いので、愈々以て我々の異意の在るところを了解してないことが見えるのてあります。倫理を以て從來の宗敎に代ゆるといふのに付ては彼の文明敎の興つた時のやうに震天動地の事業を要するといふ譯ては無い、唯々從來の宗敎に代はるべき倫理思想に關する社會的良心が次第に傳播し發達して來れば足れりてあります、少くもそれが我敎育界に必要てある、我敎育界に此の如き社會的良心の種子を植え付けることは決して不可能の事てはない、此點に於てヘルゲャンの主張して居るのと我々は全く一致して居ると考へるのてあります。

（速記同志社員筆記）

帝國の將來と千島

報効義會長　郡司成忠

私が占守島へ參りましてから足掛け十一年になります、其間何をして居つたかと思ふ人もあり、又占守島の價値を御承知ない人もあらうと思ひます、占守島の氣候のこと、山川草木の有樣は、日本の土地てあるけれども多く人に知られずにある、現に去年遞信省が郵便の組合に入つてから廿五年の祝をやるといふので、繪葉書を拵へて日本の圖を揭げたのに占守島が入つて居らなかつた、占守島に居る者は非常に怒つた、日本政府は占守島を日本國土と認めて居らぬだらうか、日本全國の圖てあつて占守島が入つて居らぬのは其認めがないのであらう、それでは此土地は頂からうかといつて笑つたことがある、所が占守島が日本全國の圖の中に入つて居らぬといふことを氣付かれる方が實に少い、それ程まだ多くの人に知られて居らぬ、今日てさへもさうである、況して私が十年前に占守島のことを言つた時には、友人からもどうかしたのてはないかと言はれた位、不思議に思はれた位てある、けれども占守島はさう人に知られずに長く了るべきものてないと私は思つて居る、私が報效義會といふものを拵へて占守島に根據を置いたといふことに付ても多くの人から非難を受けた、何だつて最初に占守島といふやうな處に根據を置くのだ、一躰日本の開けて行つたあとを見れば南の方から北の方へ段々進んて行つたのではないか、今此點々羅列して居る千島を開くには南の方から即ち

行易い處に根據を置いて北の方へ行つたが宜からう、だしぬけに北の方へ行つては変通も不便だしそれは行くまいと眞面目な人から言はれたが、私は是はよく占守島のことを御承知ないのであらう、七八百里の道を遠方と思つて居る人の言であらうと思つて居りました、此處に根據を据へましたのには多少理由がある、けれども其當時人から尋ねられても是に答へなかつた、なぜなれば其當時何が理屈らしいことを言つても馬鹿にされて人々の耳に入らぬ、それ故に理屈は言はなかつた。

占守島に着目せし起因

抑々私が占守島といふ土地を知つたのは、明治十一年に比叡、金剛、扶桑と三艘の軍艦が新たに出來て、日本の海軍に勢力を増したと言つて喜んだ當時、其金剛艦に乘つて浦鹽斯德へ航海した、此時恰度露西亞に於て聖彼得斯堡から浦鹽斯德まで七千八百哩の鐵道を敷く議が確定されて、日本政府に約束することがあるといふので日本人の來るのを促した、浦鹽斯德に歐羅巴から技師も政治家も來て居つて、日本からは其時の開拓長官黑田伯爵海軍卿河村伯爵其他五七の有名な人々が行かれた、其時金剛艦に私が若士官で居つた其末席に列つて其時の有様を聞いた、此時に占守島といふことを小耳に挾んだ、不思議なことを言ふものだと思つて聞いて居りました、併し此時は話を聞た計りでまだ其話を元として占守島を根據にする念が起らなかつた。

私共が浦鹽斯德で初めて西比利亞鐵道の設計を聞いた時に、迚もそんな鐵道は敷かれる筈がないと思つた、なぜなれば黑田長官河村伯爵とか其外竹添とか黑岡とか五七の人が集つて、浦鹽斯德を露西亞が開けばそれに對して小樽を開かなければならぬ、小樽を開くには函樽鐵道を架けなければならぬ、そこで此鐵道の設計をさせるといふ考で技師を送つて昔からある道路を調べさした所が、此鐵道は困難である先づ里數が非常にある百四十哩もある、山は高し川はあり此鐵道は困難であるといふ、僅が百餘哩の函樽鐵道すら六ヶ敷と云ふこんな人々が吾々の音頭を取つて居る時代であるから、七千八百哩といふそんな鐵道が出來る譯のものでなからうと思つた、西比利亞鐵道が架るとは信ぜられなかつた、露西亞人は法螺を吹くものだ出鱈目のことを言ふと思つて居つた位である、けれども其當時の話、

を大略言ふと、どうしても浦鹽斯德を開いて東洋の商業の中心とせねばならぬ、それには第一に浦鹽斯德から聖彼得斯堡へ鐵道を架け、其鐵道を以て歐羅巴の貨物を持つて來るから、既に歐羅巴から桑港までは定期航海が開けて居る、又桑港から横濱まで來て居る、それを繋いで浦鹽斯德へ日本で定期航海を開いて呉れといふことである、且つ海底電信が架つて居らぬからどうも航路が不確實である、それ故に第二には海底電信を浦鹽斯德から日本を經て架けるやうにする、將來桑港、シヤトルは盛んになる、殊に露西亞向きの貨物はシヤトルが大切であるからシヤトルから浦鹽斯德へ定期航海を開く、それには占守島がシヤトル浦鹽斯德の航路に於て桑港から日本に來る中間の布哇と同じ位地に當るから占守島を海底電信の中心地とするといふ話を聞いた、其時に占守島の話を聞いて、占守島とはどの島だらうと思つたが今のあなた方と恰度同じ位だと思ふ。

所が私が其翌年筑波艦に乘り代つて生徒の練習旁々亞米利加へ行つてヴイクトリアへ行つた、其時にヴイクトリアに日本人が澤山居つた、其日本人が軍艦へ遊びに來る、どうも彼等の様子が訝しい、日本人でないかのやうに思はれる、着物の摸様だけ位が同じである、お前方は何しに來て居るかといふと、私共は此ヴイクトリアに來て居りますが私共のして居ることをお話したつてお分りになりませんと言つて話さない、訝しいと思つて段々聞いて見た所が、あなた方は海軍士官だ軍艦に乘つて廻て歩いて海のことは御存知の積りであるか知らんが、私共がヴイクトリアに居りますのは日本の占守島へ商賣に行く爲めです、日本人に占守島のことを言つても分る人がないと言はれた時に私共は不思議に感じた、何處だ、千島の一番端の小さな島です、それでは北海道から行つたが宜いぢやないか、四五千里もあるヴイクトリアまで來てから、三千七八百里もある占守島へ出掛けるのは迂廻てはないかといつた所が、それはあなた方が占守島を御存知ないからだ、私共だつて好んで出ては來ぬ、併し日本人を相手に千島の仕事をしやうといつても出來ぬ、ヴイクトリア人であるから私共の技倆を賴み私共の言ふことを聞いて二三萬の金を投じて仕事をさせるから來て居ると答へた、それはどう云ふことか何の仕事をするかといつて聞いて見た所が、それは猟虎膃肭臍を捕る商賣である、あなた方は海軍に居つて始終航海術のことを稽古して

ござる、それですら占守島のことを知らぬ、膃虎捕といふ商賣は金の儲かる好い商賣だけれども日本人は海に出ることを大層恐しいやうに思つて金を出さない、それだから占守島の仕事が始まらない、ヴイクトリアの人間を試して御覽なさい、小供でも占守島のことは悉しく知つて居ります、占守島、パラムシロ、オンネコタン、是等の島はヴイクトリアの小供が立派に知つて居る、日本では立派な人達が一向占守島のことを知らぬと言つて、妙に嘲つたかの如く冷かされ氣味にやられ、半信半疑で陸へ上つてヴイクトリアの小供に聞いて見ると果して皆知つて居る、私の阿父さんも行つて居る叔父さんも行つて居る今に歸つて來るとおみやげが澤山ある、是は占守島から取つて來た花だ是は占守島の石だと種々の物が卓子やストーブの上に載つて居る、で老人に段々聞くと如何にも知つて居なければならぬ譯である。

ヴイクトリア人と占守島の關係

ヴイクトリアに居る者は殆ど悉くが占守島を賴りに生活して居るといつて宜い、それは英領加奈陀が段々開けて來始めてから此沿岸に膃虎膃肭臍が居るといふことが歐羅巴の新聞に出て、歐羅巴へ此處から皮が送られて行くに從ひ此處の膃虎膃肭臍が評判になつて、英吉利沿岸の膃虎膃肭臍を捕ることを商賣にして居つた者が段々加奈陀へ集つて來てヴイクトリアから船を出して獵をすると澤山捕れる、それを倫敦へ出して非常な利益を得て居つた、多く皮が出て行けば行く程英吉利の膃虎捕りが此方へ集つて來るやうになつたのが今より八十年程前である、元來膃虎捕りといふものは例へば船を三艘持つて居ると、其中二艘が膃虎の居ることの分つて居る島へ行つて膃虎を捕る、あとの一艘は船に積めるだけ食物を積んで、何處の場所何處の國といはず膃虎の棲みさうな處を探檢して歩いて獵場を求める、そして新しい獵場を見付けるとそれを報告して探險した人が出掛ける前の者が又探檢に出掛ける、始終探險は怠らぬ、ヴイクトリアに百四五十艘の船が居つて沿岸の探檢を始めた、膃肭臍捕りが國を開くといふことに關係を持つて居ることは非常なものでありますが日本の人は知らぬ、チヨツト一言言へば北極探檢をしたので有名な諾威のナンセン博士此人も膃肭臍捕りである、膃肭臍捕りといふと犬殺しのやうな賤しい商賣と思ひなさるか知らんがさうでない、名譽ある男

の爲すべき仕事になつて居る、日本人殊にあなた方に此間の面白味が解釋されて居らぬのは誠にお氣の毒に考へる。

此膃肭臍捕りが段々此沿岸を探檢した末遂に占守島を見付けた、そして此占守島には非常に財源があるといふことを知つて多數の者が此島に集つて來た、併し島が狹いから何十年後には此獸類を捕り盡すといふ恐れがあるから、そこでヴィクトリア人が露西亞政府に契約して廿ケ年間膃肭臍獵の爲めにヴィクトリア人の占領區として貸して呉れといふことを交涉した、そして租稅を納めて許可を得てヴィクトリア人の占領區となつて居つた、即ち外の國の者は手を入れぬヴィクトリア人だけ來ることになつて居つた、それで最早探檢を出す必要がない、占守島へ行けば間違なく獵をして來るに極つて居るから此島を保護しつゝ此島の獸を捕つて居つた、そこで三歲にならぬものは毛が惡い未だ生へ揃はぬから捕らぬとか、腹に兒のあるものは殺さないといふやうな申合があつてそれが能く行はれて繁殖法を圖りつゝ占守島を保護しつゝ捕獵を二十年間續けてやつて來た、其二十年の年期の終る時に再び露國政府に交涉して尙ほ二十年間續いて此島を占領區として貸して呉れ、相當の租稅を納めて前には是だけ今度は是だけ納めると稅の高を增して願ひ出たさうです、所が露西亞政府が許さない、てヴィクトリア人は奈何とも仕方がない、今まで許したのであるから今度は露西亞人がやるのか知らんと思つた、其年は明治七年であつて露西亞から日本へ交涉して來て國境の爭ひのあつた年である、サガリエンの國境の爭ひから日本人と露西亞人と非常に葛藤して始終双方の間に喧嘩の絕間がない、それで國境制定に就いて双方使臣を出し日本からは榎本さんが行かれて段々交涉した結果國境がうまく纒まらぬので、それではサガリエン全島は露西亞に寄越す千島全島は日本が取るといふことになつた、即ちこれが露西亞がヴィクトリア人に千島を貸して居つて期限の切れた年である、千島樺太交換條約が極つて千島を他の國に貸して稅を取つて居つては面倒だからそれで許さなかつたといふことが分つた、それならば日本人が來るかといへば日本人が占守島に行きさうもないから、それでは日本政府に交涉して借りやうといふので明治八年に日本政府に交涉して來た、露西亞政府に納め來つた通りの稅を納めるから占守島の膃肭臍の專獵權を與えて呉れといつて來た、日本

人は何にも知らぬ外國人に國を貸して商賣をさせる法がないからと斷つた。

外國密獵船の初め

それでは日本人が大方來てやるのであらうとヴィクトリアに居た皮の仲買人が函館橫濱に支店を出して皮の仲買を始めた、所が明治八年の日本は膃肭臍どころの騒ぎぢやない、昨年もソンナ目論見が起らない今年も其計畫がないといふことをヴィクトリア人が聞いたから、さうだらう日本人はすまい其間膃虎を捕らずにあるから集つて居るだらうソッと行つて見やうといふ者が出來た、是が密獵の初めです、千島に來て見ると日本の船は來ずアイヌが居るばかり、露西亞からは船も人も來たから占守島のアイヌも貿易が出來たが日本からは偶に北海道丸といふが來たが少さな船であつて貿易もしない、それで初め二三艘來たヴィクトリア船が大獵をして歸つた、それを聞いて十艘來り二十艘來り三十艘來り段々と殖へて來た、十三年に行つた頃には盛んに膃肭臍を征伐して居る最中、其上密獵では保護する必要はない腹に兒があらうが年が若からうが手當り次第に捕つた。

私が此占守島のことをヴィクトリアへ來て聞いた時に此分にして置くと占守島も長いことはない、日本に歸つて要路の人に話をして亞米利加人と合同して仕事をするやうに又繁殖を圖らなければならぬといふ御注意までヴィクトリア在住の日本人から聞て歸つて來て日本の人に話をして見るとどうしてマルでうつらぬ、膃虎を捕るといつても膃肭臍を捕るといつても其捕方も直打の有無も知らぬ、どだい膃虎を見たことがない、あなた方にしても見られぬ方の方が多い位のものである、さう云ふ風でありますから私が歸つてから千島の話を人にもして見たがうつらぬ、私が其時膃虎膃肭臍の委しい話を聞いたから膃虎を捕る爲めに行つたかといふと、それは膃虎が捕れゝば捕る鮭鱒が捕れゝば捕る何でも宜いが、占守島に根據に置いたのは、南の方からやつたが宜からうといふことを段々言はれたけれども私が占守島に根據を置いたのは、必しも膃虎の話や鮭の話ではない、私の履歴から御承知になつても膃虎膃肭臍のことは知らぬ、此間まで洋刀を下げて外のことは知らずに戰史ばかり讀んで居つたものである、商賣のことは知らぬ、それが何故に占守島を根據としたかといへば、私は矢張り占守島を見るに商賣上の占

守島を見たのでなく元の職業軍事上から占守島を見たのである。

軍事上より見たる占守島

私が初めて占守島の軍事上の價値を説いた時に人は彼は狂氣であらうあんな處に戰爭はない軍事上の關係はないと言つた、私は此頃になつては年程考も違つて居るが併し私が占守島に根據を置いたのは恰度一昨年露國半官報の「ノウァウレミヤ」に書いてある北方の情況を書いた説が私の考に近いことを言て居る、私は自分の説を言はずに此頃は却つて「ノウァウレミヤ」の説を受賣をして居る。此方が弊がなくて宜い、どう云ふことを言つて居るかといへば面白い説を爲して居る、露西亞に明治七年の頃も些と目の明いた政治家があつたならば千島と樺太の交換といふ其樣な馬鹿なことは爲なかつたらう、餘程千島と樺太との面積を較べれば樺太の方が大きい、人間も澤山ある、開けても居る、併し是は交換すべきものでなかつた、露西亞人は目先きの見えない人ばかりであつたから明治七年に此交換を爲たが是は非常な損をしたのである、なぜかといへば一躰國といふものは例へば甲と乙との二國の間に一の無所屬の島があるとする、それは甲の國からは之を陸軍を以てか將た海軍を以てか防禦するに容易く、乙からは之を防禦するに非常に困難であるといふことであれば、其無所屬島は其實無所屬ではなくして防禦し易い甲の國に隷屬すべきものである、是は通常の話で分り切つた事だ、今サガリエン島の形勢性質を見るならば是は日本から此土地を防禦するのが容易いか、露西亞から此土地を防禦するのが容易いかといへば、是は少しく兵史を讀んだ者は直ちに了解することで日本から之を防禦するは困難である、露西亞からは一兵卒を置かずして防禦が出來る、ハバロフカに兵を置けばサガリエンに如何なることがあつても鎮定するに宜い、サガリエンに兵を置く必要はない、日本から防禦すれば海軍か又は陸軍ならば常備兵を置かなければならぬ、北海道すら漸く一昨年に常備兵を置くことが出來るやうになつた、況してサガリエンに常備兵を置くことは今日出來ることでない、それでは軍艦を以てするかといへば海に於ては十二月から三月四月までは北海は危險なものとして居る、其上日本人は二百十日を過ぎれば航海するものでないと思つて居る、日本の者でゴョウマイの瀨戸を越へたものは殆ど一人もない、日

本人は二八月は可愛い子に旅をさせるな、船に乗るなとなつて居る位だ、サガリエンまではとても及もない、其當時のみならず今でも行かぬ、そして露西亞からは防禦することが容易いから、故に此サガリエンは千島と交換するまでもない將來は當然露西亞に隷屬すべき性能を具へて居ると見て差支なかつた、然るに明治七年に周章てゝ千島全島を日本にやつてサガリエンを取るといふことを爲たのは露西亞の大失策である、此千島誠に掌大の此千島を露國が日本に與ふることがどれ程惜いか、どれ程惜いかと問ふのはそれは千島の價値千島の貴いといふことを知らぬからである、少し歴史を見れば容易く分ることである、千八百五十二、三、四年に於けるクリミヤの戰爭の當時、東洋に於ても英佛の聯合軍が露西亞と戰つて居る歴史がある、是は御承知でありませうが、堪察加半島の、ペトルボルスキー此處を露西亞は根據として百年の大計を立て、鎭守府も置かれ兵營も置かれた、當時英佛聯合軍は香港に集て聯合艦隊を編制し香港から占守島を越へ、ペトルブルスキーを逆撃した、カムサツカは其當時多數の移住民が居つて開けて居つたが、聯合艦隊はカムサツカ人が此カムサツカといふ土地は一朝露西亞が戰ひがあつた時には露國の力を以て保護して貰ふことは出來ぬ土地であるといふことを頭に入れるまでカムサツカを攻撃し盡した、それから折角盛上げたカムサツカは移住民が西比利亞に逃げ歸つてカムサツカは空虚になつた、即ちこゝに此千島といふ點々した此島の價値があるのである、なぜならば今はカムサツカは浦鹽斯德に軍艦を置いて防禦するといふことになつて居るが、一朝カムサツカに事有つて浦鹽斯德からペトルブルスキーに船をやらうとするならばどう云ふ道を通つて行くか、地圖の上から見て直ぐに分るが先づ宗谷の海峽を通る、日露開戰となつた所が宗谷の海峽を露國の軍艦が通るは中々容易でない、今度は何處ぞ、宗谷の海峽でなく浦鹽斯德から津輕海峽を通つて大廻りをして、ペトルブルスキーに行けば宜いが、日露開戰の時に日本海軍が敵をして津輕海峽を通過させることを許すならば向ふには都合が宜いがさふ云ふ譯には往かぬ、先方もさう思つて居る、此方の對州と釜山の間は此處は嚴重な關門が出來て居る、此處を通す譯には往かぬ、歐羅巴からの軍艦は新嘉拔で押へる、旅順大連に居るものが行くならば格別であるが浦鹽斯德からペルトルブルスキーに行くには千島を通らなければ行くことが出

來ぬ。
然るに日本の經濟が日露開戰といふ時に千島の各島にまで軍備を敷くことが出來るか、今の日本の財政を調ぶれば迚も千島各島に軍備を敷くことは出來ぬ、それならば此海峽は安々と通れるかといふにさうでない、水雷術といふものが段々進んで僅かの經費を以て造られる、電氣觸發水雷、浮標水雷、海底水雷、自働水雷等の極く安い武器、守るといふ方に都合の好い便利な武器がある、それが買けぬ程日本の財政が紊亂して居るとは思はぬ、されば此千島の海峽を通るには多少の危險を冒してゞなければならぬ、先づ此千島の海峽を通過するとは出來ぬといふ考を有たなければならぬ、即ち露國から露國に渡るに危險を經なければならぬ、從てカムサッカは完全なる防禦が出來て居るとは言はれぬことになる、是は小さな島々の集つた千島を日本に與へてしまつた爲で通路を遮斷された形になる、又カムサッカの土地を露西亞が見捨てゝしまつた一向構はぬといふならば言ふ必要もないが、今日のカムサッカはどうであるといふと殆ど世界中の人がカムサッカを論じて居る、探檢に來て居ない國はない位である。總ての人の問題になつて居る此カムサッカ、非常な財源が發見された此カムサッカを見捨ることは出來ぬ、それなれば此カムサッカを完全に防禦しなければ移住民を送ることは出來ぬ、それにはどうすれば宜いかといへば日本と露西亞の天然の境を見れば、北海道に近いエトロフ、クナシリ、シコタン、是等の島々は北海道の屬島であるといふことは明かである、それから占守に近いオンチコタン、パラムシロ等は公平に判斷を下せば露西亞の屬島でなければならぬ、それに氣が付かずして露西亞は千島全躰を吳れて樺太を取つたのは其當時は露國の爲め宜かつたやうだが、今日はカムサッカの門番たる屬島を日本に取られてしまつたから露國人としては之を今自然の分界に戻して、千島の眞中の名も付けられぬ人も住まはれぬ小さな島々がある、それが自然の界であるから此處を日本と露西亞との境としたい、つまり千島の上半分をカムサッカの屬島として取れば是に露國の監視人を置き海底電信を架けて、カムサッカの沿岸に他國の軍艦の出入することを注意することが出來カムサッカを保護することが出來る、然るに今は占守島を日本に與へ其處には多少の兵器を持つて居る一種の移住民が來て居る、若し日本國民が玆に着目して此占守島に軍備を施し大なる勢力を持つ

たならばカムサツカは何となる、今日の露西亜の經濟上此カムサツカに常備軍を置いて此占守島の兵力に對するだけのことをすることが出來るか、何れ占守島を根據にして此處に兵力を日本が持たうといふならば陸兵を持つ譯はない、此處に幾艘かの軍艦を持つて居れば東西何れの沿岸といはず攻擊することが出來る、是に對じてサガリエン沿岸千七百哩を防備をするといふことは損の話である、例へば此處にそれ程の軍備を置かれゝば是に百倍の費用を掛けても守る力は足らぬ、どうても國の周圍の屬島を取らなければ國の防禦が出來ぬといふことは今始つたことでない、若し地を代へてサガリエンを日本に與へて千島を露西亜が取つてそしてシコタン、クナジリ、に露西亜が軍備を施したならば今の北海道はどうなつて居るか。

中々面白い議論て、私が露西亜人であれば今言つたやうに考へる。

日本人は千島の價値を知らず

色丹國後に軍備を施されて御覽なさい、七師團でやり放して置く譯に往かぬ、實に日本の海軍士官は北海道の昧は知らぬといつて宜い、それだから誤つて日本人が北海を恐れるやうになつたのである、さう云ふ風の所からノウァウレミャが此島半分は取らなければならぬといふ論をしたのを私は島に居つて見て、是は怪からぬことを書いた此新聞を日本人が見て何と思ふであらうどう云ふ說を爲すであらうと窃かに思つて居つたが此方へ出て聞いて見ると、そんな新聞が出て居つたか知らんよ、といふふやうなのである、日本の新聞にも露西亜朝鮮のことを勝手に書くが、今日本の對州を取らなければならぬといふ時に、對州の價値はよく知つて御座る、歷史を讀んで知つて御座る、對州に對する觀念が深い、是は渡せるものでないといふことはあなた方は合點して御坐るに依て宜い、所が千島のことに至ると千島の價値を御承知ない、今外交の舞臺は滿州朝鮮沿岸でも支那地方でも露西亜日本とで解決して行かなければならぬ問題は澤山ある、茲に或一の事柄が起つた時に彼國から此方面に於て或利益を與ふるに依て此方面に於て是だけの島は露西亜の領土として永久借入をと申込まれた時、日本の人が千島の價値を知つて居らぬと(是は取越苦勞か知らんが心配になる)安く負けてやらうといふ考が起る、なかなか此占守島は私が自分の行つて居る處だから言ふ譯ではない「ノア

ヴレミヤ」の說と私共の考も同じやうなことであつて、此千島の北が日本の有てあり且つ軍備有て見ればカムサッカ全半島の死命を制して居る之れ丈け重大の關係がある。

今日はカムサッカもなか〳〵開けて外國の人も多く來て、露西亞の貴族などもオデッサから船を出して新婚旅行に來て暫く滯在したこともある、昔とは異つて多くの人に財源も知られ將來有望の土地であるといふやうに見られて來たばかりでなく、ギヂキンスキーといふ處にある冶金場などは立派なものである、多くの滊船も通ひ澤山の人々も行つて居る、今に露西亞も明かには言はれぬがハバロフカの鐵道を延ばして、オコツク海を通つてベーリング海峽まで鐵道を敷き、此海峽を滊船に滊車を積んで渡して北米シャトルまで鐵道を敷くといふ話もある、私が明治十一年に浦塩斯德で西比利亞鐵道の話を聞いた時にそんな空想見た樣な鐵道は出來まいと思つて居つたが、今はそれが出來てしまつて日本人も乘つて往來するやうになつた、七千八百哩の鐵道は立派に出來上つて百四十哩の函樽鐵道はマダ工事が運ばないと云ふナサケ無い有樣である。

此の浦鹽斯德からハバロフカを經てベーリング海峽を渡り新舊兩半球を繫いでシャトルへ行く鐵道は西比利亞鐵道より遙かに工事がらくである、唯ベーリング海峽だけであるがそれも佛國のルーベ博士が四年間實地を踏査して海底にも隧道を堀る計畫もあるから今度は此鐵道が敷かれるのが却て容易いやうに考へられる、丸で架空說のやうだ、どうだか知れたものでないと恐くはさう云ふ考で御聞きになると思ふ、さう云ふ風にどうたか出來るか知らん郡司が法螺を吹くのぢやないかといふ考があるならば、實に日本といふ國は誠に御氣の毒ながら何時も人の爲たあとばかりを舐めて行くやうになるであらう、私は此鐵道は確かに敷かれると思ふ。

（以下次號）

社會主義と宗教

幸德傳次郎

近時著しく我國青年の研究的精神を振起した二個の大なる問題が有る、一は即ち宗教問題、他は即ち社會問題、而して此等の問題は大抵別個の人士に依て、常に別個の方面に於て、盛に論議せられて居るのであるが、予は僭越ながら直ちに此兩者の關係如何を考へて見た

いと思ふ、殊に社會問題中の樞軸たる社會主義と、在來宗教、就中基督教との關係を探つて見たいと思ふ、此論文は以上の考へから僅に其一端を書て見たので、『一社會主義者の宗教觀』と題しても良いのである。

日本に於ては、社會主義を以て、基督教の特産物若くば附屬物と見て居るのみか、甚しきは即ち、社會主義者即基督教徒であるかのやうに信して居る、成程日本の社會主義者中には、基督教徒、准基督教徒、乃至は元の基督教徒ともいふべき人々が多いので、社會主義者は之を以て誇りとし、宗教家だから不平の壯士亂民などとは違ふと辯護し、非社會主義者は、之を以て攻撃の武器となし、アレは耶蘇だと排せんとする傾きが有る、予を以て之を見れば、兩つながら大に正鵠を失して居る。

所謂『近世社會主義』一名『科學的社會主義』の學説の系統は、實に其源をヘーゲルの哲學に發して、ダルキンの進化説に養れ、そしてカールマルクスの物質的經濟説に至つて、始めて大成せられたもので、或宗教の特産物でもなければ、附屬物でもない、今日歐米社會黨の首領や學者は、所謂物質論者が多いので、社會黨が各國の宗教家から蛇蝎の如く憎惡され、仇敵の如く迫害されるのも、之が最大原因なのである、尤も『基督教社會主義』なる少數の一派が、社會主義的思想を以て、諸種の組合や慈善事業に盡力し、徐々に科學的社會主義に近つきつゝあるのは事實だが、今日の處では實に曖昧至極なもので、基督教の多數からも、社會主義の多數からも、異端視せられて居るのである、伊太利の教授エンリコ、フェリーは、彼等耶蘇教社會主義者も、社會主義を信ずれば信ずる丈け、無神論に傾いて來るに違ひないから棄て置た方が善いと言て居る。

從來宗教の骨髓とする所は言ふまでもなく『神』である、宇宙万物を神と名くる無上の權力者に服從せしめて、或は神の意思だとか支配だとか、命令だとか、裁判だとか、賞罰だとか、社會人事の一切を、神を割出しにして解釋せんと力めるのである、然るに近世社會主義は、哲學的、歴史的、科學的道理の基礎に立て、自由と平等を實現し、人間自ら支配せんとするものである、無上の權者も認めねば、下劣の奴隷も認めぬのである、故に一たび『神とは何ぞや』てふ問題に論し至つたならば、科學的社會主義者は、到底在來宗教の說く所に、滿足するとは出來ぬのである。

神が歸天齋の手品のやうに一種の號令をかけて、宇宙と人とを創造したといふ說は、最早生物進化の說に依て破られた、彼の一般に通用さるゝ原因論でも實に薄弱極まる者で、結局神なる者の存在を否定するどになるのである、若し宇宙万物の原因、マターとフォースとの原因が神だとすれば、神の原因は何物である乎、若し神だけは無始常住だと答へるならば、同じくマターとフォースとも無始常住であつたと答へ得るではない乎。

今日の所謂『神』は、何處に在る乎、如何なる者乎、何人も之を證明し得るものは無い、唯た『有るだらう』と思ふのみである、『有るだらう』と思ふ心が、即ち神の有る證據だといつて居る、是れ果して科學の許ずべき證據である乎、如此く今日の神は千万人の『だらう』といふ想像である、想像なるが故に各個に其定義と解釋を異にする、天地に充滿してるといふのもあれば、天上に居るといふのもある、古人の神は今人の神とは違ふ、今人の神でも、松村介石君の神と、内村鑑三君の神とは違ふ、内村鑑三君の神と、海老名彈正君の神とは又違ふ、有神論者の一皮剝けば千百万人皆な其定義が違ふのである、斯れば所謂一神教なる基督教は、實に千百万の多數の神を容れてるのである、滑稽至極ではあるまい歟、先頃耶蘇教の大學傳道の時に際し、高僧達が會合して、耶蘇基督は神の子なりや否やの問題を討論し、結局多數の投票で決定したといふを聞た、此多數こそ、今の議員選擧の多數よりも更に危險なものではない乎。

在來宗教の神は有るのでなくて拵へるのである、甚しきは多數投票で拵へるのである、聖書に神は己れに似せて人間を作つたとあるが、フォイエルバハは、人間が己れに似せて神を作るのだといつた、然り己れに似せて作る所の臆說である、佛國のラプラスは、神なるものは精密な科學に無用な假說であるといつた、ヘルツェンの說に從へば、神なる者は、スペンサーやヂユボアレーモンドが滿足してるが如き不可知(アンノーエブル)ではない、大負けに負けてX(エツキス)である、未知數である、科學の發見の進歩に反比例して、其數量を減する所の未知數であるのだ。

現に社會の進歩に從つて、神の解釋は違ふのである、解釋が違ふに從つて、神の領分は減するのである、科學が神に合はんとを求めるのでなくて、神が科學に追付かんことを力めて、セツセと辻褄を合すのである、

宗教家が飯の種には、其社稷を合すの必要があるかは知らぬが、科學的社會主義は、強て神なる空名を存するの必要はないのである。

如此にして荒唐無稽の想像の上に立ち、無上の權力者を迷信して居た從來の宗教は、科學の進歩に從つて、確に衰滅の運に向て居る、將來果して宗教なるものが必要であるとしても、又存在し得るとしても、其名は宗教でも、其實質は全く違つたものでなければならぬ、其宗教や、迷信空想の宗教でなくて、哲學的、歷史的、科學的道理の上に立つものでなければならぬ、此點に於て、予は從來の宗教に取て代つて、將來の人生を支配すべき宗教(若し宗教と名く可くんば)は、即ち社會主義其者であると斷言する。

大古に在て一種の共產主義の行はれた團躰生活の時代に在ては、宗教は政治や社會と別物てはなかつたのである、一年一回の祭祀は祭祀でなくて饗宴である、彼等の慰藉和樂の爲に、政治的社會的の要件であつた、そして平生禮拜する所は、祖先である、自然の力である、禽獸草木水火である、必しも之が道德に合するでもない、否な殆ど道德不道德の區別はなくて、其目的は、單に現在の生活に惡事災難なかれと祈るに在つた、彼等は禽獸や祖先や水火が、自分に禍福を下すものと迷信して、雨乞もすれば虫除の祈禱もする、團躰部落の宗教は即ち殆と其政治であつた、印度でも埃及でも支那でもシリア、パレスタイン、日本等、凡そ大古の狀態は大抵如此きであつた、此時に於て、豈に今日の所謂道德的權者なる神なるものあらんや、地獄天堂なるものあらんやである。

然るに人口が殖える、領土が擴がる、小部落、小團躰の結合が漸く弛むと同時に、階級が出來た、奴隷が出來た、專制政治になつた、中央集權になつた、共產主義と之に伴ふ團躰的道德は全く頽れて、個人主義が油然として芽を吹き出した、万人漸く政治的團躰的の考へを離れて、一個人の幸福道德に注意することに傾いた、而して個人の生活如何てふことが、學者賢人の問題となつた、ストイックも出た、エピキュリアンも出た、シニックも出た、彼等の教義は一時を風靡したには違ひないが、社會の進化は遂に彼等に滿足しない、個人主義の勢力益々熾なるに從つて、競爭は烈しくなる、道德風俗は益々頽れる、生活は益々苦しくなる、多くの學者も哲學も、羅馬晩年の人生を拯くひ得なかつたのである、此の時に於て彼等の接觸したのが、一種

の亞細亞的思想であつて、爲に舞臺は一變した、即ち他界の觀念を生じたのである。

現在は苦土である、人生は痛苦である、眞個の幸福は死後に在るべきものである、以上の觀念は、墮落と苦痛と絕望の底なる當時の人心に一道の光明を與へて、勃然として今日の所謂大宗敎の基礎を作つた、そして天堂も地獄も實に之より出來た、神の裁判も賞罰も實に之より出來たのである、政治と社會との同一物なる大古の宗敎は、玆に一變して全く現在政治、現在社會と別物になつたのである。

斯くして今の大宗敎は皆な二元論（デュアリズム）である、政治と宗敎、世間と出世間、靈と肉、現世と未來、普通感情と宗敎心、是等を强て二分して、而して一方の爲めに一方を犧牲とせんとするのである、靈の爲に肉を犧牲とし、未來の爲めに現在を犧牲にし、親切、友愛義務等の念より宗敎心を離さんとして居るのである。而して其結果や、即ち單に神と未來とを夢みるのみで、現在社會の幸福平和に就ては、彼等は何の利益を施す能はざるに至つたのである、彼等は決して一片の麵包をも與へぬのである、一領の衣をも得せしめぬのである、唯だ運命に服從せよと命ずるのである、唯だ苦痛を忍んで勞働せよと命ずるのである、多數人類の所謂『信仰』が日に衰へて行つゝあるのは決して怪しむに足らぬのである。

從來の宗敎が果して以上の如くなりとすれば、社會主義は全く之れに反對せざるを得ないのである、神は科學の許さぬ空名である、天堂地獄の觀念は個人主義の社會に在て、已むを得ざるに出たる慰藉の手段に過ぎぬ、若し現在生活の苦痛と窮乏にして除かれたならば、自然に消滅すべきものである、エルネスト、バックス曰く、社會主義は人生の統一を回復して從來大宗敎の二元論を禁廢せんとするものであると、然り社會主義はモニズムである、社會主義は神を要しない、又死後の世界を信ずるを要しない、直ちに現在實際の社會生活に、自由と平等と平和を持來さんとする者である、ハルトマンの説に依れば、總ての宗敎は幸福の約束を包含する、大古の宗敎は個人一代の間の幸福を約束し、次なる宗敎は其幸福を死後の世界に置き、最後の宗敎は、個人一代に在らずして人類全體の永久の進化に資するものであると、社會主義は實に一人一代の爲めにするのでなくて、人類社會全體の健全なる幸福なる進化を希ふものである、從來宗敎の本尊に代ふるに理想

を以てし、祭壇に代ふるに道理を以てし、天上の樂園を地上に恢復せんとするものである、若し社會人類全躰が階級なく壓制なく、皆自由なる平等なる生活を遂げて、衣食餘あることが出來たならば、何の神あらん、何の未來あらん、靈も肉も、世間も出世間も渾然融然として一如である、道德も此中に在る、幸福も此中に在るのである。

故に予は社會主義を以て、將來諸種の宗教に取て代るべき眞個の宗教なりといふのである、彼のラヴエレーの如きウオレースの如き社會問題のオーソリチーたる人々も皆な之を首肯して居るのである。

余の見たる日本の病弊

博士リギヨル

序言

他人に向つて其欠點を語る事は蓋し一の難事なるべし、而して、多くは其人の感情を害し怒りを引き起して、却りて欠點を矯正する事を得ざるものなり。今日本國民の短所欠點に就いて日本の讀者に談らんとするは大方の人の氣に逆らひ、隨つて多大の利益なかるべし。

然れども聊か思ふ所あり、思ふ所に依て少しく研究せんと欲するものあり。抑も日本國民は道理を愛する民にして、能く道理を容るゝ性質ありといふ。兎に角に能く道理を悟り、苦言と雖も能く之れを甘受する事は吾人の知れる事實なり。既に眞理を愛して能く之れを容るゝ者に向つては一々に其短所欠點を指摘して之れを列擧するには及ぶまじ、唯一個のヒントを與ふれば直に自ら知るに至るべし。如何となれば國民自ら如何にせば其欠點を正し短所を補ふを得べきかといふ事に就ては、既に之れに從事せるを以て、殊更に外國人が日本人の欠點を數へ立てゝ、目の前に突き出す事は却りて無益有害の事ならんと思へばなり。

其一　風俗の混亂に就て

先づ手近く風俗の事より談らん、風俗といふ事は先づ社會の外面なりと見て可なるべし、即ち社會を觀察するに先づ第一に目に映ずる所の外觀なり。今此外面上より風俗を觀察するに、現今に於ける日本社會の風俗は非常に混亂せる事明かなる事實にして、昔の教育を受け昔の趣味と習慣とを保存せるものは、今の新社會

には時代後れとして容れられず、又進歩主義を取りて何事も改良々々と唱ふる者は今の舊弊諸老と合はず、互に相排擊しつゝあるものゝ如し。

昔の人は甚しく打嘆くなり、此國第一の名譽ともいふべき嚴格なる習慣が遠からず消滅し去るべしと、禮儀は古來人生の萬事を規畫して、言語動作の末に至る迄一絲亂れず嚴正なりしものが、今日に於ては悉く碎け破れて片々斷々となれり、今の弱輩は早殆ど禮儀を知らざるもの多し。「禮なければ人に非ず」といへる諺の有力なりし時代は既に遠く去れりと、されど今の壯者をしていはめば昔の禮儀などいふものは、要するに唯堅苦しき虛禮のみ、何等の實用をも爲さゞるなり。古老が徒らに頑然としてかゝる虛禮を株守するは、恰も繭に籠れる蛹の如きものゝみ。少しも外界の天地を知らざるものなり、然れども吾人今の壯者は既に進步し來りて蛾となり、縱橫に飛び翔りて自由の空氣を呼吸しつゝあるものなり。何ぞ虛禮虛儀の殼の中に跼蹐せんやと、共に一理なき能はず。

然れとも要は其中を採りて、古今新舊の二者を合調せしむるにあり。思ふに其方法なきにしもあらず。今之れを談るに當りて一言風俗なる詞の定義を論ぜしめよ。

風俗といふは甚だ漠然たる語なれども、之れを出來得る限り正確に捕へて定義すれば、風俗とは社交德の外容なりといふことを得べし、社交德とは何ぞ讀者或は了解に苦しむものあらん。例へば尊敬、友誼、親愛、自重、貞潔、謹愼、攝生等の如き德をいふなり、吾人は之れを社交德と名づく。換言すれば風俗とは以上の如き社交德が言語動作となりて社會の表面に現はれたるものなり。今風俗を人に譬ふれば社交諸德は風俗の精神にして生命なり。禮儀其他一般風俗と稱するものは其肉躰の如きものなり。精神が肉躰の上に現はれ社交德が風俗の上に現はる、今此二者合調して言動の美と社交の美とを生ずるなり。

こゝに此二者に就いて考ふるに、第一の德即其精神は年所又は時間によりて變ずるものにあらず、例へば尊敬といへる社交の一德が古今によりて其性質を變じたりといふを聞かず。されど尊敬の形式即ち禮法作法なるものの時勢と場合とによりて變化し行くは免れ難き事實にして、近く例へば此所に二人の日本人ありとせんか、洋服を着して歐洲風の居室に在るもの互に篤き尊敬の情を持ちながらも、疊の上に据れる時とは其表

情の作法全く異るべし。洋服を着て手を床上に附き額を擦り附けて辭儀するものは非るべし。要するに社會の狀態が變化すると共に、言語其他の社交的動作も變化し來る事は論を俟たず。之れ已むを得ざる事實なり。夫れ今日の時代は古の如く相過ふ毎に、ながくと挨拶の詞を述べ。之に三分四分の長き時間を費し、寧ろ之れを鄭寧親切なりと思惟せし安泰無事の世と異り、世は益々繁劇を極め、人は寸暇をも吝む時なれば殆ど日々相見る同僚の如き挨拶を以て辭儀を終り成べく簡單に禮を濟まして實務に赴んとするに至れり。斯くの如く外容の變化せし事を以て、直に人情の輕薄に流れたるを嘆き、社會の墮落を心配するに及ばざるなり。時間の經濟と言動の簡潔とは却て利益を齎し、又虛禮に束縛せらるゝ事なく寧ろ相互間の自由を得しものなり。されど此所に注意すべきは古の禮儀作法の消滅せしと同時に其精神なる社交の德も共に消滅せんとしつゝある事これなり。蓋し其德消ゆる時は精神なき人の如く其風俗も同時に亡びて、美はしき其國の風俗は再び見るとを得ざるに至るなり。これ現社會の禍根の存する所たり。されば今一々社交德に就て說明せず、單に尊敬(自他)の一事に就て談らんに、苟も此一字が國民の精神に殘れる時は此精神が如何なる禮法作法の衣を蒙りて現はるゝやは一定すべからずと雖、兎に角に時勢に適合せる恰好の道を通りて現はれ來るに相違なかるべし。譬へば水は方圓の器に從ひて其形一定せざれども、常に其性低きにつき其面平かなるが如し。

而して一度新たる形によりて現はし禮法が漸々定規となりて終に一定の風俗となり所謂新社會の新禮法となるべきなり。然れども其時に於て日本人の禮讓尊敬といへる社交德が其外觀は改良されたりと雖も其精神の變化したりといふ事を得ず。日本人は今も昔も丁寧にして、人と人との交際に於ても細事に到る迄、日本人の美を愛する精神は躍如として發現せり。

されば若し尊敬其他總ての社交德を缺く時は、如何に外部の風俗を改良するとも、魂魄なき人に藥を吞ましむるに等しく、到底德の代りとなるものに非ず、唯精神なき虛禮に終らんのみ、而も一時の注射が人の命を此世に止め置くが如く暫時にして朝露の如く消え去るべし。恰も人の命なくして一日も生存する能はざるに同じ。

これによりて考ふるに日本今日の風俗を改良せんが爲

めに、少くとも風俗の亂れ行くを防がんには、世の父母たるもの、敎師たるもの、其敎養する兒童、若くは青年子弟に對して第一に注意せざるべからざるは、いふ迄もなく自他尊敬の念慮を深く注入せざるべからざる事これなり。これ簡單なる一語なれども社會改良、風俗改良などの順序細目は悉く此中に含めり。

然らばいかなる方法を以てすれば、こゝに成功するやといふに、人若し之を問はゞ容易く答ふるを得べし。現代國民の胸中に自他尊敬の念慮を銘刻する爲めに、取るべき第一の要件は「人は如何にせば尊重され得べきか」といふ事を敎ふるにあり、人をして其人物の價値を高めしむる所以の道を與ふるにあり。然るに現今の日本に於て最も缺けたる所は唯此點にあり。現今の學問は種々の雜件を敎へ萬學を授く、唯一事遺失し、忘却せるは人物とは如何なるものか、如何にして人たるべきかを敎へざるにあり。換言すれば自己を知らざるにあり、自己を意識せざるにあり。人の心得べき道を敎へざるにあり。要するに自ら自己を意識せず、從て人に人たるべき道を敎へざるを以て人物的に道を行ひ人物的に世を送る事難く、惡風汚俗に陷り易きなり。

（未完）



海外大勢

今世紀世界政策の大勢

英をして露に結ばしめんとする新運動

時として舊守退嬰の誇りある英國外交政策を根本的に改革せんと欲する政治家の一團躰倫敦に起れり、其目途とせる所は大英帝國を全く獨逸より分離し、却て露佛仝盟の範圍内に置かんとするにありて、此團躰中の人物は外交界に於ても、內政上に於ても、實業上或は文筆上に於ても皆堂々たる人のみなり、而して機關紙としては「國民評論」なる有力なるものを有し、誌上に現はるゝの各論說は頻りに歐大陸諸國の外務當局者に杞憂を抱かしむるに至れり。

此運動一度起るや最先に一國當局者の意志を發表せしは佛國にして、此は「ガランレブー」誌上に「二十世紀初期の世界政策概觀」と題し、極

めて詳細正確なる議論をなせり、此文は此問題を解釋評論し又佛國當局の意見を代表するに最も適切なるものにして其言ふ所は蓋し再讀に値するものあるべし、曰く。

今日の大勢を見るに一國民たる眼光を以てせず、世界的觀念を以てすれば、久しく「光榮ある孤立」に誇りし大英帝國は那邊にか甘き同盟の接吻を得んことを欲せるは掩はる可きにあらず。

十九世紀史を播かば誰か英國なる一小國の絕大權力の發展に驚かざるものあらんや。大陸諸國同盟の援助を得て我佛國に勝ち、其第二帝政の倒るゝや凡ての利益を攫みしものは彼英國なり、如此して彼は敵の起たざるに乘じ、殖民地の擴大を致し、海上の雄飛を致し、自から海上の王を以て任じ、全世界の事件發生に關しては常に主宰者として活躍するに至れり、之を歐洲以外の地に見よ、行く所として彼の權威數かれざるなく、彼の膝下に跪づかざるなし、只彼に抗し得るは惡疫と極烈の氣候なるのみ、加ふるに燃ゆるが如き國民の意氣と、近代科學の進歩に伴ふ發明改良は之に無限の勢力を附與して。一世紀ならざるに蕞爾たる西歐の一小島は世界隨所に其國土を建て、あはれ西班牙葡萄牙の大殖民は今や影だにもなきに至れり、曾ては實に歐洲以外の世界は凡て英領たらざるなきやと思はしめたるともありき。

轉て歐洲を見るに、幸に其配下たるは免れしも、大陸に於ける最大帝國は彼と握手するの名譽を希ひ、第二帝政時代の佛國はクリミヤ及支那戰爭に彼の手を借りて遂に其陪從者たるを甘んじき、かくて彼は半世紀間以上物質上にも道德上にも世界の最大優者たる地位を持し、優に世界の主宰として万般を料理せり。

不意にセダンの砲聲轟き渡りて、續出せる事件は歐洲大陸を騷がせしも尙大英王者の夢を醒す能はざりしが、時哉、大英殖民史上の一些事、其進歩時代に於ては半日を要せずして壓伏せられたる可き南亞非利加掌大の一國との爭鬪は端なくも彼を俄然として停歩せしめ、一歩直に蹉跌し得可しと確信せし彼大英の巨人は此新光景に對して愕然自失したりき、少數の農民は自己の正義と神の冥助を堅く心に持して斃れずんば止まざるの鉄石心よく三年の久しき大英巨人の活歩を支へ、彼をして幾万の生靈と幾千億の金錢を散じ、尙人道を破り國民の權利を壓して殆んど狂亂せしむるに至らしめたり、玆に於てか彼大英帝國は初めて世の形勢を見たり、一度目を注げば思はざりき僅々三十年を經ざるに世界は全く變轉せり、彼が世界に絕對主權を有せりと自信せし間に、四隣の各國皆等しく勃興して最早組し易からざるに至れり。北米合衆國、其獨立は一世紀以前なりと雖も注意すべき現象もなかりしに、近年俄に盛運をあらはし、商に工に其進捗や驚くべく、米州擧げて其臣下たらんとするあり、更に東方日出の國は一躍今や强國の列に伍せり。

然らば近く歐羅巴大陸は如何、一箇土地州縣の集合に外ならざりし獨逸は千八百七十年英國の好意ある中立に依て得たる佛國戰爭の大勝以來國內の團結堅く陸海軍に於ける優者たるのみならず、其盛大なる工業と野心滿々たる外國貿易は愈々國をして富强ならしめ、將來經濟上大英帝國の當面の敵は必ず獨逸たるべく、其生產品は世界至る所の市場を侵し、英國製品と大競爭を開けり、而して此幼帝國は殖民地の必要を感じ遂に亞非利加の太部及太洋州中の數島を獲得し、更に本國に於ては千八百七十年に得たる地位を保たん爲に墺太利と結び、近年以太利を加へて三角同盟を作り、一度事あれば以て六百万の戰士あるに至れり、かくして彼は歐洲の主權者たる地位を得たり。

佛國も亦其頽廢より回復し、陸海軍は前時代よりも强盛にして、其殖

民地は世界第二の廣さを有せり、更に北方の露西亞帝國は如何、千八百五十五年英國に加へられたる創傷今や癒へて、陸海軍を新にし、而して其領土は世界無比に廣漠たり。

如此にして世の大勢は大變遷を來し、前時凡ての文明國に關係ある問題は單に「歐羅巴事件」と稱して可なりしも、今や全く不當にして「世界政策」と呼ばざる可らざる有樣となれり、又前時に於ては大英帝國を中心として諸國之に參集せしも、今や各國其事件の主裁者たらんとし世も亦之を蔑視し排斥する能はざるに至れり、大英帝國は最早唯一の「一等國」たらず、併も彼は尙孤立の地位にあり、此孤立や昔時に於ては彼をして絕大權力を振ひ、眞に壯嚴の觀あらしめたるも、今日にては却て衰微の要素たり、云々

以上「レプー」誌の言ふ所は實に今日世界政策の鍵鑰にして吾人の決して看過すべからざる所なり、而して改革派の機關「國民評論」は曰く大英帝國の理想は其今日に於ける海上の覇者たる地位を保持して如何なる聯合軍にも敵せんとするにあれども、現今は一國にして到底無數の軍艦を製造保持し得るものに非ず、然して其上陸軍に至ては英國は到底獨逸の如く徵兵制度を採用する能はず、又採用さるも人民の服從を得ると出來難し、されば靜に世界に於ける大英帝國の眞地位を思はゞ、過去の光榮に眩せざる英國の熱心なる愛國者等が何故に其前途を憂ひ、大英帝國の外交政策を革新して今日の現狀に適はしめんとに努むるかを知るべしと。



(歐州の鐵道蜘蛛)

記者は更に一步を進め、論じて曰く、大英帝國至上の大目的たる海上權の占領及他國民に向ての覇權は十九世紀末に至る迄各國民の熱望せし所にして、當時は相爭ふべき敵國二三に過ぎざりしが今日に於ては之も過去の夢にして、二十世紀の新天地は競爭國一二に非ず、其勢力は何れも相似たるものあり、又大英帝國が殆んど自己手中のものなりと信ぜし歐洲以外に於ける世界商業の獨占も今や各國に分割され、獨逸の如きは隆々たる盛運我を凌がんとし、佛や、米や、露や、日本や、各々地歩を占めて我區域を犯しつゝあり、海上帝國の如きも亦一の過去の追想にして最早現代に於て應用せらるべきものならず。

故に大英帝國にして尙今後も世界の主權者たる夢想を以て外交政策を行ふとあらは一歩は一歩より困難に、遂に一大障碍に遭遇すべし、大英帝國の霸權に代ふるに獨逸を以てせんとて獨逸を助くるは佛又は露の

利益に非ると共に、大英國自身の勢力を保持せん爲に不利益なり、即ち英國は露佛と結ぶの安全たるを見るべし。而してよし大英帝國にして眞に露佛同盟に加はらんと欲せば、先づ亞細亞に於ける露西亞の行動に全く自由を與へ、全世界に於ける佛蘭西の運動に一切干渉せず、アルサスローレンの還附を承認し、海陸に於ての主權たる自信を捨てざる可らず、蓋し如此は大英帝國の甚だ不愉快に感ずる所にして亦耐ゆる能はざる所たらん、殆ど英國は之を除いて何所にても親實の同盟を得る能はず、日本巳に然らず、而して獨逸亦決して眞の友情を以て英に對せざるなり。

大英帝國は過去數年間同盟國の搜索に忙しかりき、初め彼は北米合衆國の成立が如何に獨逸分子の多きかを忘れ、只同族の愛を以て之と手を携へんとせしも、其目的は今日迄遂せられず、加之米大陸以外に於ける二國の關係は未だ確固たる同盟を起すに足らず、次に彼は皇室の姻戚たる故を以て獨逸に結はんとせしも失敗したりき云々、

即ち英國の爲めに名譽たる孤立を保ち能はざる以上は、獨逸に結ぶよりも露佛に結ぶの必要なるを說くものにして、所論大に一方に偏するも、又歐洲外交界の一潮流として、吾人の深く注意を拂ふべきものたるを覺ゆるなり。

亞細亞合衆國の建設

（日本は其先導たるべし）

輓近日支の關係は世界各國をして一種の臆說を逞ふするに至らしめ遂に亞細亞合衆國をなすに至るべしと言はしむるに至れり、此事に付て巴里の「ジュールナル、デ、デバッ」紙は頗る興味ある論議をなして曰く

新同盟即ち亞細亞合衆國の急速なる建設は何人も疑ふ能はざるものにして其大主義は「亞細亞の爲の極東」主義なるべく、排他運動は日本の掌る所なるべし、政治學者にして日支親交の近時に於ける發達に目を注げる人は必ずや此傾向に注意を怠らざるべし

と又曰く

何人か頽癈弛張せる支那帝國内に對する日本國の勢力注入の増大進步を疑ふものぞ、日支兩國はよく自他を知り少しの隔意もなし、今や日本は平和の征服を恣にしつゝあり且つ此征服は北京政府の喜ぶ所たり。

極東に於ける此二國同盟の實理は猶一の疑問に屬すれどももし形成せられなば其對支那問題は解明せらるべし、一は人口の無數を有し一は無限の活氣を有せる此の二國合同の曉何れの歐洲列國かよく大膽に自已の政治的商業的利益を主張し得可きや、此亞細亞合衆國の恐るべき勢力は白人が未だ未來にありと想へる黄色難の大法則を復活現出せしむべし云々。

支那にて發行する新聞報は此同盟の確實を祷り且つ曰く

今や露西亞は頑陋保守的なる支那人の性質に乘じ是を利用して亞細亞の領土を擴張せんと計畫せり、されば此際に處するは只光榮ある外交に依りて中國を救ふべし、或國か他に數國の爲に保護支持せらるれば自然に掠奪せらるゝの危險避く可らざるものにして從て獨立し得んことは仲々難し、全亞細亞諸國中眞に獨立の意義を盡くせるは只日本一國あるのみ、他は凡て全く夫を失へるか又は半ば他の附屬配下たり、例令ば安南は佛に奪はれ、緬甸は英に屬し。其中間に存せる暹羅は尙獨立を保ち、賢明なる帝王は疾に西洋文明を輸入して日本の維新革命に倣ひ國運の進捗を圖れり、然れども悲むべし其目的と方法は全一な

らんも日本と暹羅の發達は甚しき相違をなせり、見よ、日本は强國の列に入り完全なる獨立を有せるにも係らず、暹羅は未だ微弱振はず其獨立も名實甚だ協はざるものあり、此間の相違は果して何に起因せるや、日本にては普通人民も皇帝と同じく革進に心身を勞し、各自の能力獨立者なきに足れるも、暹羅にては皇帝獨り焦心苦慮せるも人民は深く意を注がず、却て他人種の奴僕たる運命を有せるものと自信せり、云々

匈牙利の獨立運動

匈牙利には獨立黨として認めらるゝ一團躰あり、其主領はかの有名なるコッスートの子フランシスコッスートと稱す、現今の目的は墺帝フランシスジョセフ皇をして匈牙利の主權を辭せしめんとする者なり、フランシスジョフ皇帝は已に墺匈二國の國王として偉望あれども併も帝は獨立黨及全獨の徒の當面の敵にして其攻擊の燒點となり、遂に小說家モーラスジョーカイをしてマグヤールネムゼッドを書かしむるに至れり、ジョーカイは獨立黨に向て其强暴なる行爲を止めんとを切言し、全時にフランシス皇帝の匈牙利に來り住まんとを熱望せり、彼の意見は大なる反響を及さず事態は愈々迫て遂に匈牙利の首相にして自由黨の主領たるコロマンスツエル氏をして維納政治評論誌上に、もし事態平穩に歸せずんば議會を解散する外なしと叫ばしむるに至れり、而して獨立黨にてはスツエル氏を以て帝の歡心を得んが爲に墺地利に媚ぶるものとて責むれどもブラセル市なる「インデペンデントベルゲ」紙は此思想は謬見の甚しきものなりと痛論して曰く



印度人に乘れる英國

南洋人に乘れる獨逸

非律賓人に乘れる米國

皇帝フランシスジョセフは最も細心緻密を以て主權者たる職務を行ない、其爲には心身二ながら少しの休息もなく健康を害する迄に至り、尙且匈牙利の利益に苦心焦慮せるに非ずや、彼は聖ステフエンの王冠と共に墺太利の王冠を頂き自己の宣誓の下に合躰したる二國に對しては何等の偏頗する所もなくよく公平無私に政を行へり、彼に取ては墺太利の利害も匈牙利の得失も少しの徑庭なかるべし。と。

且、倫敦スペクテートルは二國統合上に對すフランシスジョセフ朝の統合的勢力の大なるを指摘論述して曰く

墺匈合躰の朝廷は四千万の人民を提げて歐洲の一角に平和靜穩の國を形作り、文明の普及に充分なる力を與へ、而して其勢力ある軍隊は以て外の侮を防ぐべし、されば二國の併合にして續く限りは、叉コンスタンチノープルにして强大ならざる限りは墺太利は侵畧の災を受けざるべし、嘗ては恐る可き野心を包藏せし彼國も續出せる不幸に自覺する所あり、先づ以太利より退き、獨逸より放れ、スラブ巨人の怒を恐れては戰々恐々としてバルカン半島に對し、只國內の平和を堅くし、

地歩を進捗せんとに孜々として、到底其手に協はざる領土擴張の念今や全く跡を絶てり、而して此平穩無事に對する匈牙利の力は甚だ大なるものにして恐らく二國合同して始めて今日の狀態を保ち得可く、もし彼等にして合併君主を捨つるあらば墺太利は活躍せる國となるべきか、否々むしろ獨伊露の三國に分割さるゝに至るべし、而して歐洲は混亂紛爭の悲を極むべし云々。

排モンロー主義

久しく故ビスマークの政策と同一主義を有せしハンブルグ新報は公然モンロー主義の敵として起れり、彼は日々の社說に於て反對論を公にさると共に亞米利加外交政策の根本主義たる此主義に衝突せる幾多の事例を發明せんと務めつゝあり、曰く。

見よモンロー主義に根源せる政策の如何に許す可らざるものなるかを合衆國は如此にして全亞米利加國の外交政策を左右するに至べし、蓋し此主義は千八百二十三年合衆國の主權を握りし或一人の主義にして性質より云ふも決して法律たる効力を有するものにあらず、亞米利加の爲めの亞米利加なる語は已に久しき前より亞米利加全土は北亞米利加則ちヤンキーとに屬すと云へる思想に變じつゝあり、云々。

此獨逸新聞と同じくモンロー主義反對の氣焔を揚ぐるは英國週刊「土曜評論」にして、近刊の紙上にては、獨逸が南米に於て米國の妄狀を擊し相當の地歩を占めんとは吾人の切に望む所なりと言ひ、續ひて曰く。

外交上自由政策の最大惡現象は南米諸國をして保護を歐洲に仰ぐ念を止めしめ、彼等をして合衆國の掌中に飜弄せらるゝに任せたる事なり然れども今や進歩せる南米諸國は北米合衆國に對し恐懼を抱けり、吾人は英國と獨逸との共同運動の第一歩が南米に對し不結果を來せしを悲しむと雖、將來は是非歐洲の强國が南米に向て其勢力を擴張し、合衆國のヤンキーの爲めなるモンロー主義に對し其防禦運動を爲すを望まざるべからず云々。

海外雜纂

大砲王クルップの生涯

大砲王クルップ卒去してより、其事業や、生立や已に殘す所なく公にせられたり、而して未だ世論の囂々を免れ能はざるは彼の死因にあり、一方に彼を慈善家と呼び、工場主の模範と稱し、死因は單に腦溢血にすぎずとなせば、一方にては彼を詐欺者なり暴制者なり、勞働者を籠絡せる惡漢なりと罵り、其死せるは社會主義者の攻擊に逢へる爲なりと云ふ一月發行の「ツオールクツオーク」誌は彼の私人的性格に付て詳述し、決して彼が殺淡なる世の富豪の如き人物に非ずして大に世人の誤解を解きたり、曰く

フレデリッヒクルップ即ち獨逸國エッセン大工場の三代目の主人たりし氏は父祖とは著しく性格を異にし、其工業の如き十五年前に讓り受けし時よりも數倍の盛大繁昌を加へしめ、其大工場を管理統一するの伎倆實に驚く可きものありしにも係らず、時々彼は其親友に向て予の如き莫大なる財產を讓り受けしは却て人生の一不幸にして、其が爲め文學美術等の好尙を恣にする能はざるを嘆けり、且つ彼は溫良恭儉なる人物にして大に喧騷なる俗社會を嫌厭せり、父祖傳承のものとして已を得ず相續せし事業は決して彼が自由意志を以て選擇採用すべき職業にはあらざりき、獨逸皇帝は彼の親友の一人なりしが、彼は常に向

て曰く、巨額の財産を有するは予に取て一の殃なり、之なくば予は嗜好に任せて文學者美術家たりしならんに」と

彼は豐富なる自然的才能と、正確熟達せる好尙を有し、寬洪精緻なる美術の保護者なりき、さればコーゲル村の別邸に蒐集せし物は凡て美術上の大傑作たらざるはなかりし。

對話せる時に際しても、彼は父祖より傳られし職業が少しも自己の心をして自由ならしめざるを悲しむと屢々にして、又彼は眞心より華麗虛飾等を嫌へり、且つ位階稱號を忌むと甚しく、何時迄も只一個のヘルン、クルップたらんとを希へり、されば彼は獨逸皇帝は勿論墺太利、英國、葡萄牙、白耳義等の皇帝を饗應せしこともありしかど、其之等に對する風姿態度は少しも諂媚の風なく、部下の勞働者に對すると同しく常に天眞爛熳作らず飾らざりし。

彼は優美なる感情と、高尙なる性格を有して且つ廣き教育を受けたる人なりき、又彼は極めて平和を希ふ人物にして、大砲王と稱せらるゝを痛く嫌へり、蓋し彼の事業上より云ふも大砲王と稱するは正しからず、何となれば、其廣大なる製造品の七割は船具鐵道の如き平和の器具のみにして、大小砲火等の如きは殘りの三割を占めしに過ぎざればなり、彼の家庭は常に和氣藹々として夫として父として最良の摸範たりし、只かの社會主義者等が狂暴なる攻撃をなし、其人物の眞相を極めず、大工塲の持主と云へる點のみにて盲目的攻撃をなせるは返へすがへすも殘念なることなり、云々。



露西亜と土耳古

英國の二大僧正

英國カンタベリーの大僧正フレデリックテンプル氏八十一歲の高齡を以て舊臘永眠せり今紐育サン紙上に記載せる氏の批評を見るに曰く

かのカンタベリーの僧正席も、テンプル博士の如く深厚なる學識と敬虔なる精神と確固たる信仰と而して又偉大なる人格を有せし人に依て從來占められし事なし、思ふに氏の永眠に依て世は其有せる最も尊むべき人物の一を失へり、彼がこの高位を占めしは全く故女皇ヴイクトリヤの撰む所なりと云ふ、蓋しグラッドストーンにてもソールスベリー侯にても大僧正の候補者を撰むには從來常に高級僧侶中よりし決し下級を顧みざりしものなりしが彼は下級僧侶より抜擢に逢ひ、一時全教界を驚動せしめたりし、然れども氏の人物技量は先任者たる上級僧官

ベンソン氏に勝れるを顯はし、貴族院に於ける演説の如き一人として傾聽せざるものなかりき。

又彼の壯麗なる體格と旺盛なる氣力は節慾主義者の以て誇る可き好標本なり、彼は決して不淨を食はず飲料には只水を用ひたりと云ふ、又氏は單に嚴格なる習慣と尊嚴なる風姿を有せしのみならず、一方に於ては極て洒々たる性情を有せる人なりしと

而して今や之を失ひ英國同教徒は恰も慈母を失へるが如き感ありと云へり

テンプル氏の後任として此度新にカンタベリー大僧正に就任せしはウインチエスターの監督ランドールトーマスデヴイツドソン師にして氏の履歴を紐育「ツリビユン」より抄譯せんに

氏は千八百四十八年エヂンバーに生れ牛津大學に學び其後三年間牧師補を勤め又エート大僧正の秘書となり其死に至る迄仕へたり、其間七十八年に於ける大ランベス會議に主として會務を掌り、八十二年には女皇の名譽牧師となり後一年にしてウインゾルの副督監に任せられ八十四年には大英博物館の保管人となり今尚身に其職を帶べり、九十一年ローチエスターの監督となり、九十五年ウインチエスターニ移り今に至れり。

氏は六年前已に一度カンタベリー大僧正たるの任を受け、ベンソン氏の後を繼ぐ筈なりしも、病の爲之をテンプル氏に讓りしが今は健康舊に復したるを以て更に就任せしものなりと。

晩餐後の談話室

▲此地球を　攝氏零下二百まで下せば大氣は變じて液體となり地球表面は約三十五呎深さの一種の海となるべし

▲土星の直徑二千零九十二哩、地球より小なりと雖、月に比しては大なるものなり

▲空氣の中炭素は地球表面より十八哩上まで有り酸素は六十二哩則ち空氣の最上層と信ぜらるゝところまで有り

▲木星は地球より千三百八十七倍大なり、然れども其重量は三百倍に過ぎずと算せらる

▲天王星は太陽系中にて他の星と反對の方向に回轉す

▲地中海は從來潮汐の進退最も少き海と思はれしも實際は然らずシヽリー島沿岸にては四呎の高低有り

▲南米白露のアンデス山間 Ancomarca と稱する地に旅人の休憩所有り、其地海拔一万六千呎、此休憩所の番人は世界最高の住民なり

▲亞弗利加に於ける英國の領地は埃及び蘇丹を除ひて猶二百五十八万五千平方哩有り、英蘭土の面積に約五十倍す、此屬地の人口四千五百万

▲ニユージーランドの海岸線總計四千三百三十哩

▲モンブランの絕頂に初めて上りしは一千七百八十六年アルプス山の案內者 Jacques Balmat と云へる人なり

▲ダマスカスよりメツカまで回教徒巡禮者の爲めに一昨年末より着手せる鐵道は一千一百哩間亞刺比亞沙漠の全く水無き土地を橫斷す

▲獨逸の森林は他國の森林の如く減少せずして却て年々增加の傾有り、千九百年は三千四百五十六万九千エークル有りしもの其後七年間の保護にて十万エークルの森林を增せり

▲同國は年砂糖の産額著しく增加し、一年二百二十五万噸の真質砂糖を出だす、則ち全世界砂糖の産額六百七十五万噸に對し一國にて其三分の一を出だす割合なり

▲日耳曼政府の特許局千八百七十七年には僅か四十人の局員なりしもの、現今は七百二十九人となれり

▲海上保險は紀元前四十三年羅馬帝 Claudius 初めて之を行へり

▲同盟罷工の最も長く續きしはサンダーランド織工の同盟罷業にて、一千八百八十三年より千八百八十五年まで二年半を持續せり

▲英國中に依て糊口せる六十五万の婦人裁縫師有り

▲愛蘭土には二十一万一千人の寡婦有り鰥夫は之れに對して八万八千人に過ぎず、海外出稼の結果に依る

▲全歐洲に八百五十万人の猶太人有り、亞細亞には三十二万人

▲グラスゴーは龍動に次て英國中にて人口增加の著しき都會なり最近の統計七十六万一千六百八十二人、千八百九十一年より十万二千人を增加せり

▲ロンドン人の平均壽命四十一年、グラスゴー人の平均壽命三十五年

▲從來英國へ移住し來たるもの獨逸人を以て第一としたるが、去年は露國及びポーランドよりの移住者最も多く其數二万一千人、次ぱ獨人にて六千七百三十人

▲北米合衆國首府ワシントンは人口に比例して世界第一手紙を多く出だす市なり、則ち一人に就一年間六圓七十五錢づゝの郵券料を支拂ふ割合となる

▲大英國郵便局にて取扱ふ信書の種類中端書を以て最も多しとす昨一年間四億四千五百万枚の端書を取扱へり、前年度に比して六分の增加

▲各國全權公使中獨逸駐在の米國全權公使 Mr. Tower は第一番の金持なり、資産二千万圓

▲波斯より初めて希臘へ全權公使を派遣せしは今を去る二千三百九十三年の昔なり

▲英國にて最も古きコレッヂはイートン校にて千四百四十年に創始さる

▲巴里には百六十三種の政治に關する定期刊行物有り

▲千八百九十七年英國にて六千二百二十四種の新著書籍出でたるもの、昨年は四千九百五十五種に過ぎず、却て減少の傾き有り

▲繪入小說は英國にて千七百十九年に出でたる有名なるロビンソン漂流記を以て嚆矢とす、此小說に世界地圖を挿入したるが英國にて繪入を以て小說の說明を助けたる初めたり

▲バイブルの各國語に譯せられたるもの四百七十八種中、四百五十六種までは宣教師の手に成れり

▲英文中に最も多く用ゆる文字は E の字なり、英字千個を書く中に八十八個 E を書かればならぬ割合となる

▲各國軍隊の禮式は殆んど一樣なり、普露西其根元をなす

▲難船中にて最も高價の物品を海底に沈め去りしは一千七百九十八年 Lewis に難破せし英船 De Brook 號にて、各種の寶玉二千四百万圓を失へり

▲テームス河に沈沒する船毎年四十艘より五十艘に上る

▲シドニーのタウンホールに備へあるチルガンは世界最大のものにて、一万のパイプ百二十六のスピーキングストップ有り、十五馬力の瓦斯滊鑵を以て吹奏す

▲去年ミスシッピー川を下せし材木筏の中、最大たるものは千七百十五呎の長さと、二百三十七呎の幅と、二万八千噸の重量四十二万圓の實價を有せり、これ筏の記錄破りたるべし

▲羽蟲類の最大なるはボルネオ島の棒蟲(スチツク、インセクト)と稱するものなり、其形狀ステツキに酷似せるが故に名けらる、大なるは長さ十三吋有り

▲蜈蚣の視力は一吋の十分の二乃至五の距離以上を見る能はず

▲隼の速力を實驗せしに巴里よりマルタまで千三百五十哩を二十四時間に翔せり

▲肺病患者の讀みし書物中に殘れる病菌最近の實驗にて百零三日間死せざるを知れり

▲男子一百人に就て十六人までは左右の腕力同等なり、婦人は百に就て二十八人まで同等なり

▲紐育市の The Waldorf Astoria ホテルに住み込み散髮床を開ける理髮人は一年一万圓をホテルに住み込み料にして拂ふ

▲花の種類其三割は白色なり

▲金屬の器にて水は二百十二度の熱に逢へば沸騰するも玻璃の器にては二百十四度の熱を與へざれば沸騰せず

▲總ての物質中最も熱を長く持續せるは鎔石(ラバ)なり

▲金屬中にて最も堅きは Iridium なり

▲ブレークに彫動紀念として贈りしメダルは千六百八十三年に製造せられ純金にて楕圓形、原價三千圓を要せり

▲千八百五十二年ウエリントンの葬儀は、其行列四哩續きたり

▲英國人の用ふる珈琲の三分の二はブラジルより輸入するものにして、ブラジルは毎年殆ど十一億八千萬磅を世界に輸出す

▲北米合衆國の電信線は七十萬磅を超ゆ

▲西比利亞の廣袤は全世界陸地の九分の一にして經度東西百二十度亘たる

(END)



德川時代の蘭人來聘

上

山縣五十雄

德川政府が鎖國政策を執つて、和蘭人と支那人とを除
くの他總ての他の外國人を拒絶した事や、和蘭人が時
々江戸へ來聘した事に付ては、我國普通の歴史に大略
の記事が出て居るけれど、其詳細の事に付ては專門家
の他餘り多く知つて居る人が無いやうであるが、先日
友人村川堅固氏が校訂して飜刻されたヒルドレツス著
日本古今記(Hildreth's Japan as it was and is. Boston,
1855)を一讀したるに、其うちに和蘭人の來聘につき

て頗る興味ある記事があつたから、主として此書に據り、他に二三の外國史料を參考して、本誌の讀者諸君の爲めに一の昔話を語らうと思ふ。

▲和蘭人通商の始め

和蘭人が初めて我國と通商を開いたのは慶長十三年即ち西暦一千六百九年二代將軍秀忠が職に就いてから四年目の事であるが、その頃からそろ〳〵耶蘇敎の禁制が勵行され始めて、これ迄通商の自由を得て居つた西班牙葡萄牙等の國人は我國に來ることを嚴禁され、同時に我國人の外國に行く事も嚴禁され、大船の製造洋書の輸入等も禁ぜられて、耶蘇敎徒は嚴刑に處し、又我國人の海外より歸り來る者は直に死刑に處する等の嚴重なる方法が執られ、我國の門戸は世界に對して固く鎖さるゝことになつた。獨り和蘭人は耶蘇敎を傳へぬといふので、特別に我國に來ることを許されたのであるが、それも極めて嚴重なる制限の下に許されたのであつた。和蘭人は寛永十八年即ち西暦一千六百四十一年迄は肥前國平戸に商館を構へて居たのであつたが、此年に幕府の命令に因つて長崎に移轉することになつた。

▲長崎に於ける和蘭人

長崎に於て、和蘭人は同地の海岸を埋めて築きたる出島といふ小さき島を居留地として宛がはれ、こゝに住居することになつた。此島は元は葡萄牙人を居留せしむる爲め築いたもので、形は扇の面の如く、廣さは僅に三エーカー即ち我一町二反ばかり、島の周圍には高い板塀が設けてあつて、長崎の町とは一の短い石橋に因つて聯絡がついてあつた。此石橋の他には海に向へる方面にある一の大なる門を除くの外出入口は無いので其の門は平常は固く鎖閉して唯和蘭商船の入港した折り、積荷を出し入れする時にのみ開かるゝのであつた。さて又石橋の長崎の側の端には日本の役所が立てられてあつて、多數の役人が晝夜詰めて人の出入を見張つて居た。それから和蘭人は容易な事では島の外に出ることを許されない、一年に僅に一二度だけ長崎附近を見物することを許されたが、其時は無論一人で出るのではなく、數名の役人が附き從ふのであつた。手紙を本國へ出す時には先づ役人の檢閲を受くべき規定で、本國から來る手紙も公文書は皆役人が檢閲した、私信は役人が大目に見て檢閲しなかつたが、これも秘密に受取らなければ檢閲さるべき規定であつた。總ての取扱ひが此通りであつて、和蘭人は實際囚人と同樣の境

遇に居たのである、否時としては囚人よりも酷び取扱を受けた事もある。長崎在留の和蘭人が死んだ時に、其屍骸を日本の土地へ埋葬しては神聖なる神州の土地を汚すものだといつて海中へ投げ込んだこともあつた。

▲和蘭商船の入港

貿易品を積み載せて來る和蘭の商船は一千六百七十年頃即ち四代將軍家綱の世の終りの頃迄は毎年六七隻宛來たのである。其後日本との通商が衰へたため、其數は半分にも減じた。和蘭貿易船は實は本國和蘭からではなく、蘭領東印度の一島ジャヴァの首府バタビヤより來たので、大抵九月の頃貿易風に乘じて來たのであるが、此等の商船が長崎へ入港すると、多くの日本の役人は船中へ入り込み、殘る限なく搜索する、それは嚴禁の耶蘇敎の聖書、十字架、ジーサスの肖像や、又は外國の貨幣等を隱くしてないかを調べるためで、乘組の人々水夫等は船長を除くの他頭の頂から足の尖迄檢査され、それから鐵砲刀劍火藥彈丸等は一切取上げられて、歸國の時迄日本人の保管に任せるのであつた。かくて此等の檢査が濟むと、長崎奉行から耶蘇敎嚴禁の事を始めとして、其他種々の禁制の個條を一同に申し渡した。

か丶る次第で万一禁制品を載せて居るのを見附けるらると大變であるから、船が長崎へ到着する一日前に、乘組の人々は聖書や十字架の如き禁制品は皆船長に預けたので、船長は此等の品物を一つに取纏めて、樽や箱のうちに入れて船中の知れない所へ隱してしまうのであつた。

猶ほ其上和蘭人は船へ出入する毎に、日本の役人の檢査を受けた。獨り船長のみは此身體檢査を除かる丶特權を有つて居つたから、船長は此特權を利用して非常に巾の廣い衣服を着て、其下へ種々の小さき貴重品を隱くして密輸入をするのが例であつた。ところが無學なる日本人は久しく之に氣が付かず、和蘭の船長は誰れでも角力取りのやうに肥え太つた人に限るやうに思つて居たところが、或時偶然の事から此秘密が曝露されたので、以後は船長と雖も身體檢査を行ふとの命令が下つた。船長等は大に失望したが、幕府の命令に背く譯にはいかぬ、それで其後は巾の廣い衣服の必要が無くなつて、船長は身躰相應の衣服を着て上陸したところが、昨日迄デブ〳〵肥太つて居た船長が急に小さな身體になつたのを見て、日本人等は皆吃驚したといふ

話てある。

▲和蘭人の輸入品

和蘭貿易船の載せて來る品物は如何なるものであつたかといふに、最も主なるは生絲、之に次いで絹布、毛織物、柔皮、砂糖、藥品、錢、珊瑚等で、今日では日本の輸出品の第一位を占めて居る生絲が其頃には一番多く輸入されたことは奇なりといふべしだ、又和蘭人が日本から輸出したものは主として金銀貨幣で、後には銅も多く持つて歸つた。

▲日本通商の利益

和蘭貿易船は二三ヶ月滯在して、其輸入品を賣拂つて歸國の途に就くのが例であつたが、其逗留中は出島に二三百人の和蘭人が居て、非常に賑かであるけれど、船が歸つた後長崎に殘つて居るのは商館長を始め僅に七人ばかりで、此等の人々は前にも言へる通り殆ど四人同様の取扱ひを受け、本國とは全く音信を絕ち、寂しい變化のない面白くない月日を送つて居たのである。此やうな生活をして迄も和蘭人は何故に我國と貿易を繼續したのであらうか、といふ迄もなく金が儲かつたからである、然も大層な金が儲かつたからである。一千六百四十一年和蘭人が出島に閉ぢ込められる迄、彼等が日本へ輸入したのは、毎年黄金四百八十萬圓ばかりで、殊に一千六百四十年は利益の多い年であつて、六百四十萬圓の品物を賣込んだ。其頃日本に於ける黄金の價は銀に比べて非常に安かつたから、日本の小判を外國へ輸出すれば莫大の利益があつたのである。それて小判の輸出された額は非常のものであつて、例へば一千六百七十年及び其翌年の二年間に十萬個以上の小判が輸出され、之に因て和蘭人の得た利益は八十萬圓餘であつた。此通り莫大なる利益があつたから、和蘭人が窮屈な運命を忍んで居つたのも道理な次第である。

序にいふが、一千五百四十年葡萄牙人が初めて日本へ來て貿易を開いた以來、日本から外國へ輸出する物は主に金銀であつたから、其海外へ出て行つた額は驚くべきものである。即ち外國貿易が始まつた後一千七百四十年迄二百年間に四億萬圓の金銀が輸出されたといふ勘定である。新井白石が幕府の文書に據て調査した所に據れば、一千六百十一年より一千七百六年迄凡そ百年間に長崎から外國へ輸出された小判の數は六百十九萬二千六百枚、銀は一億一千二百廿六萬八千七百枚といふことである。何と非常な額ではないか。德川政

府の末に當つて日本が貧乏したのも故無きに非ずである。

▲和蘭人の江戸參覲

和蘭人は德川政府の御機嫌を取つて其利益多き日本との通商を專有する爲め、前述の種々の窮屈を忍ぶ上に、猶一つ不愉快なる務めを盡さねばならなかつた。それは和蘭商館長が毎年一回江戸へ上つて將軍家の御機嫌伺ひをなさねばならぬ事で、諸國の大名と同樣所謂參覲交替なる務めをなすのであつた。此務めは寛政二年即ち一千七百九十年、十一代將軍家齊の職に就いた始めの頃迄は毎年一回の例であつたが、其後は四年毎に一回といふ事に改まつた。

此和蘭人の江戸上については種々興味ある事實がある長崎から江戸迄の長途の旅行や、江戸へ到着して後將軍に謁見する時の模樣やについて面白い話があるが、此話を語る前に德川時代に我國へ來た西洋の學者に付て少しく言はねばならぬ必要がある。

LITTLE THOUGHTS.

THERE is always a little water left in the sponge

善魔曰く（其八）

青柳有美

○日本三幅對
佛…原れい子――珠數…信心
耶…內村鑑三――聖書…激憤
神…西澤之助――詔勅…感泣

○支那帝國の今や露國の爲に侵略威壓を肆にせらるゝこと、是れぞ誠に天罰の自然なるもの。昔は鐵木眞・拔都・帖木兒等の徒、ノヴゴロド大侯國モスクヴアー大侯國など、今の露國版圖のうちに擊入して、畧奪焚掠を肆にせしに非ずや。支那征伐と比律賓征伐との得意となれる日本帝國と北米合衆國とは禍なる哉。

○近世の東洋人は白皙人種の壓迫に恐怖すれども、中世の西洋人は黃色人種の壓迫に戰慄せり。

○女性の嫉妬心強きは、同情の念なきを以てなり。しかも、同情の念なきは、心意力の劣等にして小兒の如くなるを意味す。

○競爭は同シピシース（種）の間に盛なり。又、同職業の間に盛なり。女子の互に相恨み相嫉み相羨むは、皆な共に其職業を一にすればなり。女子の定業定職とは、

嫁することなり、子を生むことなり、又脂かけらるゝことなり。

○朝に源氏を送り夕に平氏を迎ふる女郎商賣は、女性の能く堪え得るところなれども、到底男子の忍び難きところ。

○生活力と生殖力とは、互に相融通す。

○天然を楽むとは、天然に同情することなり。則ち人間の自ら貶して自然の間に下るを云ふ。是れ、人間の墮落なり。

○俳優の名題昇進が、近頃甚しく亂調子となれるに驚くものあり。之を博士の亂授に比す、豈に歎ずるを要せんや。

○天地宇宙ほど器械的なるは無し。然るに、人これを稱んで美なりといふ。然らば、器械的作用は、これ美の最なるものに非ざるなきか

○數々重複せらるゝ動作はその回數を重ぬる每に益々容易のものとなる。これも又宇宙の經濟組織なるより來る。なほ鐵道の回數割引乗車券の如し。

○ショウペンハウエル以爲らく、生物の無機物に勝りて高尚なる所以は、その能く地球引力に打ち勝つ力あればなりと。

○戀歌

緑の髪　筆のあと
うまし肌膚は　料の御紙
あゝ我が迷ひか
接吻せる　卿の文
火に葬れば　立ちのぼる焔
あゝ我が胸のごと

○女性作者の作物の鼻サキには、輕少ばかりの見識と學識とが、ブラ〳〵とブラ下り居るものなり。エリオットとブラウニング夫人とインヂエローとの數々難解の章句に充てる、これが爲め。

○人生くるを欲せざる時は、是れ死するを欲する時なり。

○或るものを失ひ或るものを得る、之を文明といふ。

○女曰く『男は助平なり』と。されど、女の男よりもより多く飾りめかして、紅白粉に浮身をやつすは、男よりも多く助平なるを證す。

○晝の最も美しく見ゆるは夕暮なり。女の顏の最も美はしく見ゆるも又夕暮なり。

○太后政を聽く時、國家必ず佞者嬖臣多し。是れ、婦

人の鑑識力痴鈍にして、皮層淺薄なるを證せずや。

○智識多くして經驗少なき人は、注釋繁多にして本文少なき書籍の如し。

○大人は、社會に接して、得るところよりも失ふところ多し。故に、高踏となり厭世となる。

○チヨコレートは包むに錫箔を以てし、果物は包むに皮を以てす。

○今の青年、肉を解して美を解せず。慾を解して愛を解せず。

○『透谷全集』は、其出版時機を失せり。

○獨逸はペダント(似非學者)國なり。故に又日本向きなり。

○或る女を悦ばさんことを希はば、世の人々の容易に認識せざる點を擧げ、以て其長所を賞めよ。

○明治に至り、花魁廢れて盛に藝者の迎へらるること是れ趣味の進歩なり。何ぞ歎かんや。

○サヴオナロラと日蓮とは。共に宗教改革に熱中し、共に外寇を豫言せり。

○東西二幅對｛東…獨逸聯邦皇帝ウヰルヘルム二世
西…合衆國大統領ルーズベルト

○和洋二幅對｛和…那須與一―宗高―扇的―美人
洋…ウヰリヤムテル―林檎―實子

○小人閑居すれば不善を爲す。生活餘力の消費法なきに苦めばなり。

○信教の國民によりて異るは、生物配布の氣候によりて異るが如し。これを一統せんとするこそ大愚の骨頂なれ。

○今の醫藥は、其効驗遙に天理教のお水に劣る。

○雄鳥の能く雌鳥を手に入れ得るは、其聲の美はしきに依らずして、只その聲の高きに依る。是に於てか木村鷹太郎以爲らく、議論と主張とは必ずしも其正しきを要せず、たゞ其聲の高きを要す。是れ勝利と成効との秘訣なりと。

○友の死せるを悲むは、是れその友の死せるを悲めるに非ず、友のうちに隱れたる『われ』の死せるを悲めるなり。『われ』の死せるを悲むは、人皆な最も『われ』を愛すればなり。

○人を蒸氣機關とせよ。情は蒸氣、意は機關、智は夫れ機關手乎。然らば、大艦船に名將の長たるものなかるべからざる如く、大意志には、必ず大智力の伴ふものあるべく、又大情緒の動くものあるべし。

○一體、男子を動かし得る女子魔力の最大點は、其顏色にあり。故に曰く『色の白いのは七難を隱くす』と

○沙翁は其『ヴェニス商買の曲』に於て、一見、猶太人を罵れる如くなれども、實はジャイロックに同情して基督教徒の不法と我儘勝手とを責めたるなり。

◎有美の俳句

きみと我れ三途の川の舟遊び

●●まだあるよ●●

日本婦人觀

南米コロンビヤ國　ニコラス、タンコ、アルメロ、

外國人が日本を見て歸つたものには隨分思ひ切た批評をするものがある、併し由來邦人の之を飜譯するものは御世辭の部分計りて、讀む我々に取ては己惚こそ増長すれ別に反省の足しとはならぬ。旅行記、通信等、日本に關するものゝ出版は海外各國で年々に殖へる、予は自家の道樂で日本に關する出版物は大概取り寄せてあるから、これより新舊の出版物色々取混ぜ其惡口の部分を飜譯して見ようと思ふ。

左は千八百七十年南米人 Nicolas Tanco Armero 氏が日本に遊んで歸國後著したる Viajes al Japón と題する西班牙語の日本旅行記中の一節である。

弦　生

身躰を容れる袋

扨て之から愛嬌のある日本婦人に付て話さう、一躰に身の丈は低ひ、然し釣合が取れてるから恰好は惡くない、顏は凹凸が劇しく、色は薄黑ひし、肌理は粗く、目は支那人と全じく小さい、が引ッ括るめた所は中々美しく見へて、又擧止の溫雅は衣服の華麗とよく調和してる、余は佛蘭西女を除ひて世界中に此樣な妖艶な婦人を知らぬ、彼等は粹を極めた佛國女と全じ樣に人を昧する魔力と愛嬌と諂媚とを有して居る。

初めて日本婦人を見る時は、其衣服が如何にも吾々の國の女の夫とは違つてるので目を驚かすが、追々には便利で優美だと云ふとが合點される、衣服は馬鹿に巾の廣いもので、襟を胸の上で交叉し、又巾廣の巾で腰を卷いてる、之が即ちキモノと呼ばるゝもので、何の事はない身躰を纏ふ袋である、元來支那人でも、日本人でも歩く時には實に風が可笑しい、之は一は衣服の

爲に足の運びを妨げられるのと、一は其形が妙なからて、兩足をクッ附け、全で赤坊の樣な步き具合をする。余の見る所では日本婦人は下着襦袢を用ひないと思ふ、只吾々の貴婦人達の下着に相當すると想像される飾りをした襦袢を着てる、そして冬になれば支那人と全じく寒の度に從ひキモノの數を重ねる、多分一番下に着てる下着の極薄いものが寢衣にもなるのであろふ。

日本婦人は前に言つた巾廣の布で腰を卷いてるが、之はオビと稱するもので、廣さは三十センチメートル程もある、其をグル〳〵卷き附けて、背中に一の結び目を作り、端を心有り氣に垂れて居る、キモノの極めて上等なるものには袖に一杯金で縫がしてある。履物即ちゲタと云はれるのは單に藁を綴ぢ合した靴底樣のもので。足を其中に入れ紐で締める形は羅馬人の皮鞋乃至西班牙本國の一部又は南亞米利加の諸地方人民が用ひるキンバス或はアルパルガタスに似て居る。

履物を脫ぐは帽子を脫ぐよりも敬き風俗なり

人の家を訪問する際には、先づかのゲタを脫ひで門口に置き、ダビ（タビの誤）と云ふものに穿き換へる、之は白又は紺の布で拵へた上履の種類だ、一體何所の國民でも得て他國の風俗習慣を惡口したがるが、其よりも前に、如何なるものでも絕對の完全かないと共に、全然惡るいものもなく、何れも夫々存在の理由と事情があるのを思はねばならぬ、吾々泰西人は就て學ぶ可き多くの事物があるにも係らず東洋人に對しては常に嘲笑を以て迎へ、かの禮儀に敬き習慣なども敢て顧みない、汚れた履物を脫ひで淸潔なのに取り代へるは巳に賞すべきであるのみならず、寺院や友人の家に行つて音を立てない利益がある、之はかの單に帽子を脫ぐのよりも一層貴き思想によつてなされるのではあるまいか、挨拶をするに手を合せ、度々頭を下げ祝辭慶語の有らん限りを述べるのは、吾々の握手よりもより丁寧親切てはあるまいか、又東洋人が額を地に着く迄下げて祈るのは、吾々が只膝を折てするのよりも百倍敬虔なものではあるまいか、膝節や脚骨が痛んで來て如何して眞心からの祈禱が出來ようか。

面倒なる婦人の頭と醜き男子の相貌

日本婦人の髮の結方は極めて奇妙で又複雜だ、自分で

は出來ないから他人の手を藉る、其爲に毎日一時間程の時を費やす、此髮の形は年齡境遇職業に依て色々と別がある、一般にコスメチコと髮油を混合した樣な油で梳るが、之は椿の實から取つたもので髮を柔かく奥しくし又形を保たせる效能があると云ふ、そして髮が頸に垂れて耳を掩ふて居り、頭の頂上に大きく束を拵へて其形が一寸リス花に似て、多くは金の紐で結び、カウシチ（簪の誤傳なるべし）と稱する金鍍金したピンを挿して居る、又此ピンには珊瑚珠が嵌めてある、日本にはアタマ又はカミサと言はるゝ理髮女が居て、何處の家にも出入し、極めて廉價で仕事をする。

前にも言つた如く日本の女は丈が低いと仝時に大抵虛弱だ、血色の生々して、肥つた女などは中々見られない、皆病的相貌を示して居る、彼等の結婚したものは眉を剃り、齒を黒く塗るが之は顏容を非常に醜くする。

日本も外の國と一所に顏容は男よりも女の方が勝つて居る、日本男子の相俗は實に醜陋で、我コロンビヤのアメリカ印度人に酷似してる、又衣服は女のと大差なく、矢張り職業其他で違がう女の樣な結髮しては居ないが、額の上部を馬蹄形に剃て頭の頂上に結び目を拵へる。日本では役人とか學者とかでなければ必ず髮は奇麗に剃てる、然し彼等は外の同人種と共に元來鬚に乏しい。

つひ近年迄彼等の頭を掩ふものは何もなかつたが、歐羅巴の風習を眞似る事になつてから吾々と仝じの帽子を用ひる樣になつた、が荷役工夫などは昔から一種の帽子を有してる、其は藁で拵へた恐ろしく大きな先づ吾々の蝙蝠傘位のものである。

天性遊惰の日本人

日本人の躰格と衣服とに付ては最早大要述べ盡くしたから、今度は道德上に付て話して見よう、が之は短日月の間に知悉するの困難なのみならず、未だ其國を眞に了解するの機會も多からぬのに威張りかへつて誤謬の觀察を傳へるのは余の好まない所であるからとても十分な事は出來ない。

日本人は天性遊惰無賴の徒である、これは一目で知れる、彼等は支那人と反對に貯蓄心がなく、只生活費をさへ儲け得れば嘻々として居る、又天性の懷疑者で僞善僞俠の風があり、心中平ならざる時でも唇邊常に微笑を湛へ、一度激怒すれば皮肉な嘲笑を以て敵手に加へる、彼等は溫良恭儉の蓋の下に汚濁險惡の性情を藏

せるもので、印度人と同様奸佞狡猾極まる。
又余は日本人を以て獨創力ありとは信ぜぬ、彼等は模擬的智識と全化的才能を合せ有して居り、青年者等は孜々勉學に餘念なく泰西事物の堂に入らうとしては居るが、併し彼等は或事物を縦横無盡に解剖すると同時に總括的觀察に於て其眞相を見得るの能力がない、只一局部にあくせくするのみである、かゝるものは眞の才能とは稱せられない、眞の才能なるものは即ち全地球の實權を握る吾々白人の特有である。

處女の不義は婚姻前の一要件なり

日本婦人は温柔で夫には愛情深く實によく家庭の主宰者たるに適して居る、夫の命ずる處には何の抵抗も意見も加へない只命之從、だが小兒の教育などは無頓着で、物心附いた時分になつても耻羞の觀念を有しない、蓋し之は善良なる教育及道德上の訓戒を加へないからであらう、未婚女の不義密通は少しも彼女の結婚を妨げない、妨げない計りでなくむしろ生理的發達の證據として婚姻前の一要件として居る。
一度結婚すれば善き妻君て、自分の夫に對する義務を完せねばならぬ事を知つて居る、さりとて明白に言へばあまり賞讃する程のものでもない、彼等が節操を守るのは自信と道德上の觀念からでなく只恐怖心からである、日本婦人は苦もなく行なはれる離婚の宣告に依て怖を懐き其爲身を愼しむに餘儀なからしめられてるのである、而して一方に於て名譽を重んずる彼等の夫は正當なる愛情と尊敬とを其細君に拂はず、却て妾の方へ入り浸りの有様である。

接吻の習慣無き珍らしき國

母としての愛や情や白人に比して甚だ薄い、日本婦人は決して其子を乳母に附さる事なく皆自分の乳で育てるにも係らず、寵愛撫育しないのは注意すべき事である、又日本では母が子に接吻するのを決して見ない、蓋しこれは予の最も驚いたことの一である、人種の異同を問はず國土の如何を言はず世界何の所にか接吻なきところあらんや、接吻は愛情の至上發現ではないか、精神電流の注出點ではないか、唇は愛や戀や情や此等凡てのもの丶熱血の塊を彈丸として注射する銃口である、接吻を藉らずして何物かよりよく愛情の表現をなし得るものぞ、母が子に與ふる接吻は愛情の甘き蜜を吸はせるのである、其苦痛を和ぐる鎮痛劑である、泣

き聲を止むる良藥である、涙を拭ふ布片である、小兒に對する慈愛のそれ、妻に對する戀愛のそれは、やがて眠らん臨終の夕最后の懺悔を救世主へスクリストの聖像に捧ぐるそれにあらずや 娶するに接吻は內に潛む愛の發現である。

オー、余は斷言す、如此愛情を有しない國は到底進步すべきものでない、其人民は決して大思想を有し得るものでないと。

「オカミサ」と「メカケ」

日本では一夫多妻主義を擯斥しながら事實上には行つて居る、支那人と同樣に男一人で幾人もの女を有して居る、從て婦人の境遇は實に悲慘墮落の極て、貧困なものゝ如きは妾たるか妓たる以外途なしてある。

而して日本人は支那人と同じく一人合法上の細君即ちオカミサンと稱する婦人を有して、此婦人は若干の尊敬を以て遇せられ家庭に於ては命令權もあるが夫は手間隙なく彼女を離緣する事が出來るから、細君たる彼女の運命は實に苦痛危險なものである、其上に血統を續け儲子を擧ぐる目的を以て幾人もの若ひ女を雇入れありて一家內に住し各彼の愛寵を享ける、此忌む可きものはメカケと名けられて一ヶ月五圓乃至二十圓の給金を拂はるゝ、此メカケは家族の一員であつて、其生んだ子は正妻の子と同樣の權を有する、而してメカケを有する數は階級に依て大抵定つてゐる（以下數行無禮の言有り省略）如此大勢を集合せしめるのであるから、其間の嫉妬軋轢は想像以上に烈しく、或は自の生子を世繼たらしめん爲他人の子を殺した事例もあると言はるゝ、嗚呼如何に痛ましからずや文明の道德心無き國民の狀躰！

矢張り土耳古人支那人と同じ下級の國民

日本に於ける悲慘の事實は凡ての下級國の夫と同じく婦人の墮落沈淪である、自分の小兒を教育するとの叶はないもの、即ち其日稼人の殆んど全躰は一種小供の養育を引受くる商買をなす或他人の處に行て養育を賴む、左樣すれば其商買人は若干の年齡に達する迄小供を育てゝ、男なれば小僧に送り、女なれば下女か娼妓にする。且つ政府が婦女に對する方法規律は男子に對するより苛酷である、もし人の妻にして不貞の事あれば、何等の同情もなき宣告は爲され彼女の生命は安全

なるとが出來ない程である。
之等の忌むべき事實の中て一の正當なる事が一ッある
そして其は他國民の倣ふてもよいものであろうと思ふ、其は夫が妻の誘惑者を殺害し得る一事である。
以上余は東洋の此國に於ける婦人の境遇の大要を述べたが、かくの如き風習ある國には到底平和なる家庭幸福なる家族を形作る事は出來ない、かくの如き下級國民は社會改善の基たる可き個人道德を保つ事は不可能である、一國人の婦女子に對する思想待遇の如何は其國文明の度如何を計る驗溫計である、土耳其人の如き、支那人の如き、是又日本人の如き優婉美麗なる他姓に向て侮蔑の限りを盡くす國民は吾人より見れば倶に野蠻人である、彼等は惡德を行ない盡くし墮落の底に沈み禽獸と擇ばざる生活をなして居る。
如此の狀況を實見した一旅人予は、驚と恐に心を奪はれたと同時に、我屬する人種、我信ずる宗敎に向て感謝の涙禁ずる能はざるものがあつた。

"Truth is stranger than fiction" wits some persons should be rendered, "Truth is more of a stranger than fiction."

成功實例 一私人（五）

愛國婦人會主唱者
奥村五百子刀自

北條環翠

（一）前半

奥村五百子が拜領の緋の裲襠を着て長刀雄々しく右手に持つた、姿は前半生の面影である。今は細き羽織の紐胸高く狹く引きしめて、輝く眼底に無限の熱涙を湛へたる樣、東洋のナイチンゲールである
五百子は弘化四年に京都今出川に生れ、二條家の血脉を引いて今の二條公爵九條公爵鷹司公爵等と從兄弟の間柄になつて居る。當時肥前の唐津に高德寺といふ眞宗の寺があつたから、五百子の父は其寺に入つた。五百子は兄圓心師と共に唐津で成人したのである。
德川三百年太平の夢破れて我國外交の事日々に困難を加へ遂に櫻田門の雪が血に染まつた頃は、五百子は年十四であつて、兄圓心と共に弓を引き竹馬に乘り、或は太閤記や仙臺騷動を好んで讀んで居た、烈女政岡は刀自が理想の人物であつたから、國家の安危を一人

で背負つて立つ程の氣概であつたのである。

是より先き、親王御降嫁の事定まつてより長州の勤王黨が激昂して佐幕黨の主領を殺し其勢漸く強くなつた。こゝに五百子の父は何か計畫する所があつて。其姻戚なる長州宍戸家へ密使を送る事となつた。當時勤王佐幕の兩黨互に入り亂れて天下物騷を極めたる日である、十七歳の少女腰に朱鞘の大小を挿み深網笠に面を包みて夜を獨り走るものは奥村五百子である。果して怪まれて小倉の番所で槍の穗先に圍まれた。五百子は進退谷まり遂に度胸を据へて大聲で怒鳴り散らした。

漸く花の町に島右衞門といふ知人があつて漸く奥村の介錯に相違なしといふ證明で、其家に宿泊する事を得た、日々評定所に出て取調べを受けて居る間に五百子は宍戸家へ飛脚を出して同家の者と共に宍戸家に入つた。同家の室五百子の叔母は五百子を抱いて共に涙に暮れたのである。

後五百子は夫を迎へたけれども僅かに一年半にして死に別れたから、家庭の春光を失つて遂に浪士の群に入つた。攘夷熱の自ら制し難くて外國人の首を覘らつた事もある。かくて五百子は京都に出て知事暗殺を企てゝ事露はれ、其地を放逐せらるゝ時に女の身一人で何時如何なる目に遇ふとも知れないからと人の勸めによつて浪士彦五郎といふを夫にと定め、同じく國家の爲めに身を捧げん事を誓つて共に九州に下つた。こゝに平戸島に假寓して夫彦五郎は日々釣を垂れて時の至るを待つて居た時に、生計の道に於ける五百子の働きは、女浪士としては實に見るべからざる程の內勤があつた。此時既に二人の間に一女を擧けて居たのである。明治も既に六年を重ぬるに至り世は太平に赴いたから浪士夫婦は東京に出て古着屋を初めた。然るに又征韓論が起つて廟堂の議二派に分れ、大西郷は鄉に退き、江藤新平は佐賀に其黨を集めて居た。古着屋彦九郎も其黨の一人で、自ら佐賀に赴いて大砲鑄造に從事した。勿論五百子も夫に從つたのである。

兄圓心師は頻りに五百子を諫めたけれども、夫と死を共にするつもりなりとて遂に聞かず。黨の者が圓心師を憚つて暗殺を企てた時に、五百子を刺客に擬するものがあつた。如何に五百子と雖義の爲めと雖自ら兄を殺すに忍びない。稍々躊躇せる色を見て其從弟に當る印具次郎といふ者がこれに代つた。五百子は直に兄を訪ひ事實を明して毒刃を避けしめた。流石に骨肉の情

として忍び難きものがあつたに相違ない。

一旦兄の勘當を受けて相背いて居た奥村兄弟も、亂治まりて兄圓心は岩倉公より朝鮮出張を命ぜられたから親族の者が二人を和解せしめた。明治十七年金、朴の二亡命客が我國に遁れて居た時に兄の囑によりて二客の爲に頗る斡旋した。

明治廿三四年兩度の撰擧競爭に於て天野氏の爲めに例の浪士的奔走を試み、其身の病を養ふ暇もなくて片手に藥瓶を持つて躍起となつて居た。

明治廿三年議會開設の際東上して都門の諸名士と交はり、其郷里唐津の爲めに盡せし所實に少々てない。唐津橋、唐津鐵道、養蠶學校、而して唐津を特別輸出港となしたる等は其主なる目錄てある。

明治廿七八年の戰役が起つた時にも內外に奔走し、遂に朝鮮より大連灣に到らんとて婦人は御用船に乘る事を得ず、「睪丸の古手でも持ち合はせて居たらば」と長息した事もあつた。戰爭後唐津に船渠を造らんとして東都の名士を說いて廻はつた時に、尾崎行雄氏が五百子に辟易したといふ。二日間の辨當を腰にして行つて面談を乞ふたから、流石の學堂も「婆の願望は何事でも聽くから二たび婆の來ない樣にして吳れ」と武富氏に謂つたさうである。偶々東本願寺が朝鮮に實業學校を起すの計畫があつて、五百子は兄圓心師及び其女滿子と共に十餘名の決死隊を率ゐて朝鮮光州に行き、拮据經營して事業を大成した。光州府民は五百子を見る事神の如しといふ。

明治卅三年老餘の身を以て支那を歷遊して我國に歸るや北清の事變が起つたから又直に之れに赴いた。聯合軍に續いて途々我軍の戰死者を弔ひ遂に北京迄跡を追つて行つた。こゝに初めて、奥村五百子は婦人の最も成功し易き天與の餘地に入つたのである。

(二)　後牛

將軍の胸に燦たる勳章は一は　陛下の御稜威と一は將軍の武勇と一は士卒の忠節とより成る三稜鏡に分解せられたる光彩である。一將功成りて萬骨枯る、命を公に奉じたる枯骨の父母　枯骨の妻子、一糸の遺髮を抱いて餓死せんとする忠死軍人の遺族を如何にすべきか。こは同情の熱き淚で解くべき問題である。五百子目の當り慘憺たる戰場の血を見、啾々たる枯骨の聲を聞いて、淚も堰き敢へず我國に歸つて絕叫した。刀自の演說を聞いたものは必ず知る。壇場僅かに身を支へ、紅淚滂沱として殆ど語を發し得ないけれども、「半襟の

一片を倹約して軍人の遺族を救へ」といふ一語が聽者の肺腑を貫くのである。

上の好む所下之れに習ふといふ諺もあり、自ら勳家名門に知る人多く、且慈善の業は婦人の爲さゝるべからざる天職であるから先づ上流の婦人に托して愛國婦人會なるものを創立した。

赤十字社は生きた人の世話をする、此愛國婦人會は死んだ人の跡が困らないやうに(刀自演說筆記)といふ趣意て、而も自身は唯一箇の誘説員として北海道の端から九州迄殆ど日本全國を跋渉して、婦人に慈善を勸めて廻つて居る。其地方勸誘日記を見ると

卅五年一月　鎌倉地方
仝　二月　京都支部發會式より滋賀、岐阜、三重、愛知地方
仝　七月　北海道
仝　十月　長野、新潟
仝　十二月　四國
卅六年　九州巡回の筈、病氣を以て郷里に靜養中、

かくの如くてある。六十歳の老軀を以て「私一代はどのやうな山の中でも島の端でも、私の息のあらん限り舌の根の續く限り、物か言へる間は日本國民の母たる者として此事を忘れるなといふ事を言つて歩く」とは其意氣の壯なる、有髯男子も恥づべきてはないか。

昨十二月末日の調査に於て愛國婦人會は

特別會員	通常會員	賛助員	以上合計
五、一二七	一三、六五四	二、九五三	二一、七三四

の會員を得た。勿論勳家名門に相談役あり、殆ど上流の婦人を網羅せる會長以下幹事評議員があつて、五百子刀自一人の力は實に其功微々たるものとしても僅かに二年にして二万有餘の會員を得たのは發達の速かなること實に驚くべきである。

吾人は愛國婦人會に於ける五百子の功勞の多少によりて刀自を輕重するものでない。唯婦人は慈善事業に就事すべきものだといふ事を誨へて、其成功の實例を示した事を感謝し讃嘆するのである。吾人は慈善事業は婦人の社會的天職であると信ずる。

五百子が婦人に慈善を勸むるのは殆ど強制的である(其熱情と意氣とを以て)。然し若し之れを非難するものは全く刀自を解せず又今の婦人を解せざるものである。耳順の一老婆によりて婦人の社會的天職を敎へられたる我巾幗社會は寧ろ刀自に謝すべき必要はなからうか。

要するに女子の社會的事業(或は國家的)として愛國婦人會を唱へし奥村五百子刀自は今故郷に(或は京都に)

其疲勞を養ひつゝある。來る三月の第二回總會には身を忘れて東上せらるゝに相違ない。嗚呼天よ願くは刀自に其名の如く五百年の命數を與へよ。然らは刀自は白髮を腥風に梳つて、世界聯合軍の陣頭に立たむ。手もて砲門を塞さつゝいふ、撃つな、爭ふな、平和の爲めに、人類の爲めに！

（此項完）

猶成功實例に數ふべき一私人夥多有之べく存候、就ては讀者諸君にて御存知の事實御座候はゞ御傳へ被下間敷候哉謹んで掲載可仕候

中央公論社[illegible]　環翠

▲蟻を殺すに大砲を以てす

雞を割くに牛刀を以てするとは事變ばり實際蟻を殺すに大砲を以てせし奇談有り南亞弗利加にて蟻垤の大なるものは二十呎の高さを有し小金字塔の如き形狀にて二十三十列をなせり其蟻は有ゆる木材を喰ひ種々の害を爲すを以て其蟻垤中に卵を產せし時大砲或は爆烈彈を以て之を破壞するなり蟻垤の高さ蟻の身長より五百倍人間が若し此割合の家屋に住むとすれば埃及のヒラミッドより四倍大なる建築ならざるべからず

時事諷壇



新へなづち

久良岐

▲親王薨去

聞き傳へ心いたまぬ民もなし竹の御園の雪折の音

▲春雪紛々

夫れ雪は飛んだ鷺毛に似たれども人はハクショー風邪をひく也

▲オセロ劇

船頭が多くて山の猿芝居オセロにあらでオセ〳〵の櫓か

▲名優缺一

寺島や老木の梅の散る見ればたのみも梨の園の春か

な

▲高橋泥舟

鎗術は天下無双の伊勢の守地獄の鬼も恐れて居らむ

▲新婚祝言

此春は生きた雛(ヒナ)の新夫婦桃のはな／＼賑はしきかな

▲博覧開會

浪華津にひらく彌生の博覧會今を春べと賑ひにけり

▲美術鑑査

繪の出來のよいの惡いの云ふは野暮ヤハリお辭義と菓子折の事

▲撰擧秘訣

投票を得るに訣あり曰く何無暗矢鱈にお辭義する事

新罪言

藍川

▲議金甌

帝子空歸白玉樓。英魂千歳護金甌。春風二月鶯花候。
相遇無人不帶愁。

▲黄鳥哀

宗室棟梁文武才。中興偉業益宏恢。八音遏密遭今日。
綠竹無聲黄鳥哀。

▲滿天雲

由來法器夙超群。奉佛尊皇奏偉勳。門下俄如喪考妣。
香烟蒸作滿天雲。

▲亦風流

天恩佛德兩優渥。冥福無量何所求。長領東山烟月好。
彌陀本願亦風流。

▲太平春

浪華城掩綾羅塵。塵集東西南北人。想見仁皇民竈詠。
瑞烟繚繞太平春。

▲矮人國

山賞英蓉花賞櫻。漫呼蝌蚪做鯢鯨。規模如豆矮人國。
得意猶冠博覧名。

▲春爛熳

議員當選定賢才。意氣揚々入洛來。昆谷原頭春爛熳。
梅櫻桃李一時開。

▲購虚名

紛々貨賂購虚名。憂國何人抱至誠。邪正賢愚君勿説。
黄金多少決輸贏。

▲横濱市

誰以黃金斥俊才。田翁義俠可嘉哉。茅鞋蹂躪橫濱市。努力排他銅臭來。

▲無駿骨

驪鄉火勢映雲紅。三百驊騮走市中。回首廟堂無駿骨。膏粱滿腹有何功。

▲除瘴毒

江東疫鬼漸衰亡。揚柳梅花向艷陽。掃蕩雖能除瘴毒。人間鼠輩益跳梁。

▲夢未醒

國躰尊嚴有典型。誰言講學失常經。堪嗤俗吏司名教。鎖港攘夷夢未醒。

▲爲鴆毒

杏林名手却傷人。弘法誤書猿墜木。堪怪刀圭似劍矛。安知藥石爲鴆毒。

▲無替人

菊五既亡團十毫。登場後輩尙逡巡。國家元老亦凋謝。何啻梨園無替人。

思潮

余の所謂成功

「成　功」　文學博士　加藤　弘之氏

志の小なる者は少しても或事を成し遂げると、忽ち自ら成功したものと獨合點して、其れを限りに其業を止めて了ふ、これ等は普通の人間としては寧ろ脱れ難い事て、所謂小成に安むずる人は洋の東西を問はず頗る多い、誠に當然ながら併し大に殘念なことてある。勿論學問と言ず事業と言はず其れには大小高低がある、其大に就き小を去り、高きに行き低きを避けるといふ事は、一般に言へば其れに若くものもないが、併し其れは人各々の力量と又情實に因て、必ずしもさうは行かない、のみか力量と境遇の許さない事を、强て試みるのは却て失敗の基てある、假令如何に小なる事業てもよいから一度志を定めた以上は、出來るまて貫き進むといふ心懸が何より肝要てある、而も大方の人は少し事が出來あがると、最早成功したやふに安心して了ふ、譬へば學問の力を以て官吏とか何か一つの業に就くと、直ちに學問のことを忘れて終ふて再びとは顧みも爲ない、又赤貧の人が少しても金を得ると、早くも心を安んじて尙其

上に働かふとは考へない、遊ぶ方にのみ心を向ける、其等の人は實際に多いやふと思はれる、それも若い者で志の未た確然定まらないうちならば、又止むなしとも言ふ可きてあるが、甚だしきに至ては世間で學者と言はれ事業家と言はれ、随分喧しく言はれて居る人達でさへ、それ迄にたつと既に心が捨て了ふのが往々にしてこれあるといふは彌々口惜しき限りではあるまいか、世には或は病身とか或は自己や親戚の上に心配があつて、為に事の出來得ない人も多くある、此等は實に大に恕す可きてある、然るに身に病もなく、又左程の心配もなく、萬事都合の良き人が何事ぞ四十歳か五十歳にでもなるともふ氣力が衰へて、隱居でもして圍碁將棋や花鳥風月に餘生を樂むのである、實に言ひ甲斐ない話て。歐洲は更なり日本でも古來大事業をなした人には、決して右言ふ如き薄弱な人間はない、抑も成功と言ふ事は宜しく生涯を成功に赴く道と思ひ、一生成功といふことはないものと覺悟しなければならない、一生涯の終りに於て初めて成功となる、死の時分即ち成功の時である。苟も呼吸あるうちは成功したと思ふてはならない。

成功の生涯とは如何なるものぞ

安邊磯雄氏

「警世」

所謂成功とは、他の勢名に依らず、自己の力量に從ひ、忠實に其位置に安じて、以て徐に向上の方法を講ずべき者なると共に、一方に於ては過去の歷史を省みて、一點の汚點を印せしめざる事なり。

凡そ青年に一種の迷信あり、今日の先輩大家の過去に種々の暗黒あるあるも、今日の地位に何等の影響なき乎の如きを見て、目的善なれば手段は之を選まずと云ふが如き一種の迷想を懷く事なり。然れども之れ大なる誤解にして一點の汚點を有するも、冷酷なる社會は之を最後に至る迄も責め、輕んずる者なり。如何に前非を改めて勉むと雖も、以前の罪惡、汚點は消失し難き者なり。レ、ミゼラブル中のジャンバル、ジャンを回想せば諒し思ひ中ばに過る者あらん。

若し余の主義によりて成功なるものを得んとせば、急ぎ其位置の高められん事を求む可らず。勿論高き位置は自己の活動上至便なる者たるを知る。然れども見ずや、戰鬪に於て敵砦を略取するや。先づ之を保持すべき謀を為し、更に進んで第二砦に向ふならずや。第一に自己現在の地位を忠實に成功せしめずして、如何ぞ第二に迫るべけんや。力士梅が谷は敵を倒さんと為すを以て目的とはせざるなり。先づ自己を安全ならしめて、後敵の虚を窺ふ、實に是れ吾人が處世上に於いて學ぶ可き事ならずや。

世人往々成功なる者を誤まりて、一の目的に達せずんば成功せしに非ずと為す者多し、政治家たらんとし、教育家たらんとして一大目標を立つるは善し、然れども現在之に達せんとして、其執れる手段を輕んじて省みざるは甚だしき誤ならずや。外人の旅行せんとするや、旅行其物に重きを置き、其道程の美景に多くの快樂を得ん事を期す。然るに吾邦人の旅行たるや道中の如何は之れを問はずして、只管目的地に於ける快樂を期する也。日本人は目的を主として手段を輕んず、故に今日の位置に不満を抱き、從て不忠實なる者多し。凡そ現在の位置を貴まざる者は、假令成功の彼岸に達する事ありとも、其處に満足を見出し得る者に非ず。唯幻影を追ふて、一生を空過する者なり。

人には俄然として一大禍害の惹起する事少からず。試みに吾人をして此

の厄運に會して盲者となりしとせよ。此時に當り果して吾人は成功の生涯を完ふし得可きや否や、或人は之を認めて成功せざりし者となさんも、若し余の所見に由れは、之れ天の配合にして如何ともなし能ざる處、されば直ちに自己の爲し得べき業務に附くに決して躊躇すべからざる也。凡そ職業に上下なしと信ずれば、按摩可なり、針醫猶可なり。要只だ忠實と熱心を以て須らく先づ之れに當るべき也。蓋し自己の位置に安んじ、天を恨みず、人を咎めずして、其責任を完ふするは又成功の生涯なりと信ずればなり。

余の所謂成功の生涯とは、位置にあるに非ず、金力にあるに非ず、只だ自己の地位を保護し、忠實に之を完ふし、上向の道を開き置くにあり。吾人にして若し其心に此決心生じ、且つ成功とは富に非ずして、質にある事を認むるに至らば、豈に至幸の事ならずや。

實業家となる人の資格

「實業の日本」　高田商會主　高田　愼藏氏

實業家となるには今の教育法は不可てすな、といふのは大切な人生の働き盛りを學問の爲に費やしてしまうからてす、人生五十年と云ふ諺があるのに大學を卒業するには生れてから三十年を要するのてはありませんか、即ち三十位にならなければ大學を卒業することが出來ない有樣てある、其處で三十と云ふ聲が掛れば人間はモウ一通りの見識を持て居ますから、中々人の命令を聞かない、自分の意見を挿入することになりますから、中々商賣の途を覺ゆることが出來ないてすから實業家になるに必要なる學問の程度は中學の程度二十一歲位に止めたいものです、實業家に爲るには決してソンナに高尙の學問は入要でない、人各々長ありてすから、若し何か學術上の六ヶ敷事があるなら、學者に聞けば善いてはありませんか、學者を雇へば其れて善い何にもソンナニ高尙の學問をするには及ばぬ、中學校を卒業する歲が二十一歲位になりますから、其れから直ぐ實業界に入れば未だ自分の意見々識と云ふものが定まつて居りませんから、善く人の命令を聞くし、從て商賣の途も覺ゆることになります、其處で二十歲より三十歲までの間に商賣の途を覺へて金を貯め、三十歲から大に雄飛することになればドンナに善いてしよ、彼の兵卒ても三十歲位の者ばかりてあつたら決して命令なぞが行はるものでない、二十臺てあれば、こそ善く命令を守つて國家の干城となることが出來るのてす、加之人各々天禀ありてすから、無暗に學校に永く居つたからとて決して學者になれるのてない、昔は眞の學者が輩出して今は出ないと云ふのは昔の人は眞に好んて書物を讀んだからてす、處ろが今の人々は天性嫌ひだのに、人傚に讀んて居るのてす、だから今日の教育法を何れの方面から見ても少しく高尙に過ぎはせぬかと思ひます、其れて今の學校出の者は、學校卒業後に新しい西洋の雜誌さへ讀もうとしないてすな、丸で學問と云ふものは學校卒業を以て一段落として、少しも勉强しない、其處に行くと西洋人たちは感心のもので死ぬまで書物を讀んてる、我國てもドウかそう云ふことにしたい、又ドウ云ふ資格が實業家になつて成功するに必要てあるかと云ふに、マア第一が健康てす、病躰ては到底成功はしません一躰日本の學校出の人はドウも健康を失して居る樣てす、眼が悪るいとか肺がが痛んて居るとか、神經衰弱して居るとか殆んど健康躰の人は無い樣てす、畢竟是れと云ふのも永年の間餘り高尙の學問を爲した結果てしよう、英國などの教育法は運動を第一にして學問を二の次に置て居る、學問などは餘りさせない主に身躰の運動のみをやらして居る、だから英國人はドレを見も頗る丈夫てす、ドウしても健康が第一てあり

ます、其れから忍耐力ですな、忍耐力が強くなくつては到底もダメです
よ次に着實でなければなりません、餘り怜悧の人はドウも失敗し易い、
諺に石の橋を叩いて渡れと云ふことがありますが、其れ位の心掛て丁度
善いのです、其れから正直でなければ成らぬことは無論です。

鼻たらし國と畜生國

「東洋哲學」　文學博士　井上　圓了氏

我邦は表面は文明國の列に加はりたるも、裏面は尚ほ未開の民たるを免れさる所あり、例へは迷信の多きが如き其一なり、又風俗に就きても種々論すべき點多し、其一例は兒童の鼻を垂るゝ癖あるを見て知るべし、東京にても地方にても下等社會の子供は皆鼻の下に二本棒を垂らし居らざるはなし、是れが爲に鼻の下は常にただれて赤く見ゆるなり、斯くして鼻汁漸く流れて口内に入らんとすれは、之を口中にすゝり込みて、舌にて味ふものあり、驚き入りたる次第にあらずや、我人は平素此鼻垂を見慣れて居るゆへ格別きたなく感せざるも、西洋人が我邦に來りて之を目撃したるときには、必す日本は野蠻なりとの觀念を起すに相違なかるべし、折角日清戰爭によりて數萬の人命と幾億の費用とを抛ちて、漸く購ひ得たる文明國の評判が、兒童の鼻垂の一事によりて忽ち取り消され、昔時の如く野蠻國を以て蔑視せられては殘念の至極にあらずや、故に鼻垂の小事と雖も決して輕々に看過すべからす。

又燕居偶筆にも芝居遊女は國家を治むる砒霜石と云ひ、隱元禪師始めて日本に渡り、京洛の遊山所を一見して是れ畜生國なりと評したりと云へり、蓋し風俗の亂れるを見て云ふならんとせり、其當時と今日とは數百年を隔つも、依然として畜生國の遺習を存するは慨すべきの至りなり。

勞働の種類を選ぶ勿れ

「實科敎育」　法學博士　添田　壽一氏

其働く方法は筋力を以てすると腦力を以てするとを問はず、兎に角働くといふことが人生の終局の目的と認めらるゝことを祈る、已むを得ず働くとか、斯う云ふ働方は氣に入らぬとか、見つともないとか苦しいとかいふことは懶惰者の口實で、働くのが嫌だからいろ／＼のことを言ふのである、働くといふことに其種類は如何にあらうとも高下のある筈はない、働かない人が一番卑むべきものである、此の雨降る眞ッ最中、寒い風をも厭はず自分の力で人力車を挽いて妻子を養つて行く人類は尊むべきものである、其車に乘つて他人の金を以て傲々然として乘つて居る徒輩は卑むべきの極である、故に仕事の種類を御研究になるといふことは必要でありませぬ、何でも宜い働きさいすれば宜い、是に反していろ／＼仕事の種類を選擇する人は詰り懶惰者の證據でありまして、それは其仕事の種類を選擇する忙しき間に於てなまけて居るだけでも既に甚だ宜くないのである、尤も終身從事すべき仕事を選む前には多少考へなくてはなりますまい、已れに適したことを選むといふことは必要であります、けれども結局あれも嫌是もいやで何にも爲ないといふことでは甚だ困る、而して一たび仕事を定めた以上は專心誠意是に從事しなければならぬ、何ぜなれば一たびは或仕事に從事し次には他の仕事に從事するといふことであつては完全なる結果が得られぬ。

世の中にはいろ／＼方向を變へるお方がありますが是は甚だ御損であります、獨り其お方の御損であるのみならず其人に從事されたる仕事が發逹しない、此事は餘程考へぬといふと各自の不爲めのみならず、大きく

言へば社會の事業が發達致しませぬ、一番仕事に熱中する所の人類はどの人類かといへば英吉利人であります、英吉利人の一の金言は「己れの仕事のみを見よ」といふので、他人の仕事に目を呉れるなといふことてあります、是が大變大切なことて、何にもならぬ言葉のやうてありますが味ふべきものてある、兎角隣りの人の皿に乘つて居る肉は大きく見える、人のやつて居る仕事はらくて收入が多いやうに見える、所がなかなかさうてはありませぬ、人間の仕事は何れても濡手て粟を攫むやうなことはない。

亞米利加を通過して來る思想に注意すべし

「早稻田學報」　在英　島村抱月氏

凡て日本に居て、此方の評論書や新聞雜誌の言說から、題目を選んで說を立てる場合には、餘程注意して、其の著者や册子や、世間の眞反響やを考へた上てないと、隨分をかしな結果を生ずることになる。こちらて人の忘れてゐる頃に、それが歐洲の大議論のやうに日本て持て囃されなぞして、ちやうど田舍の假小屋に馬の脚の團十郎か乘り込んで、村中を唸らせるやうな騷ぎになる。殊に亞米利加の片々たる小册子や雜誌類は一層危險だ。日本の事を書けば日本人とも印度人ともつかぬ名を署して誤覺化さうとしたり、所謂グランド、フレースや最大級の言葉がざらに用ひられて飛んだ所にストレスが這入つたり、要するに亞米利加を通過して流れ込む歐羅巴の思想には、善惡ともに亞米利加の息が多分にかゝつてゐることを忘れてはならぬ。勿論英國の人が亞米利加ものとけなす中には、國自慢の分子もまじつてゐやうが、我等は此の點に注意して亞米利加と英吉利とを區別する必要がある。一方から言ふと、歐米のあらゆる思潮は、少なくとも其の半面觀として、一度は此の沈着な、廣い心の島國に打ち寄せて、其の反響を聽くがよい。精神界に於ける英國民のじみな批判は、少なくとも參考になる、賴もしい、手堅い參考になる。これが此の國の味のある點てあらう。

移民業の弊害除去策

「太陽」　山口正二郎氏

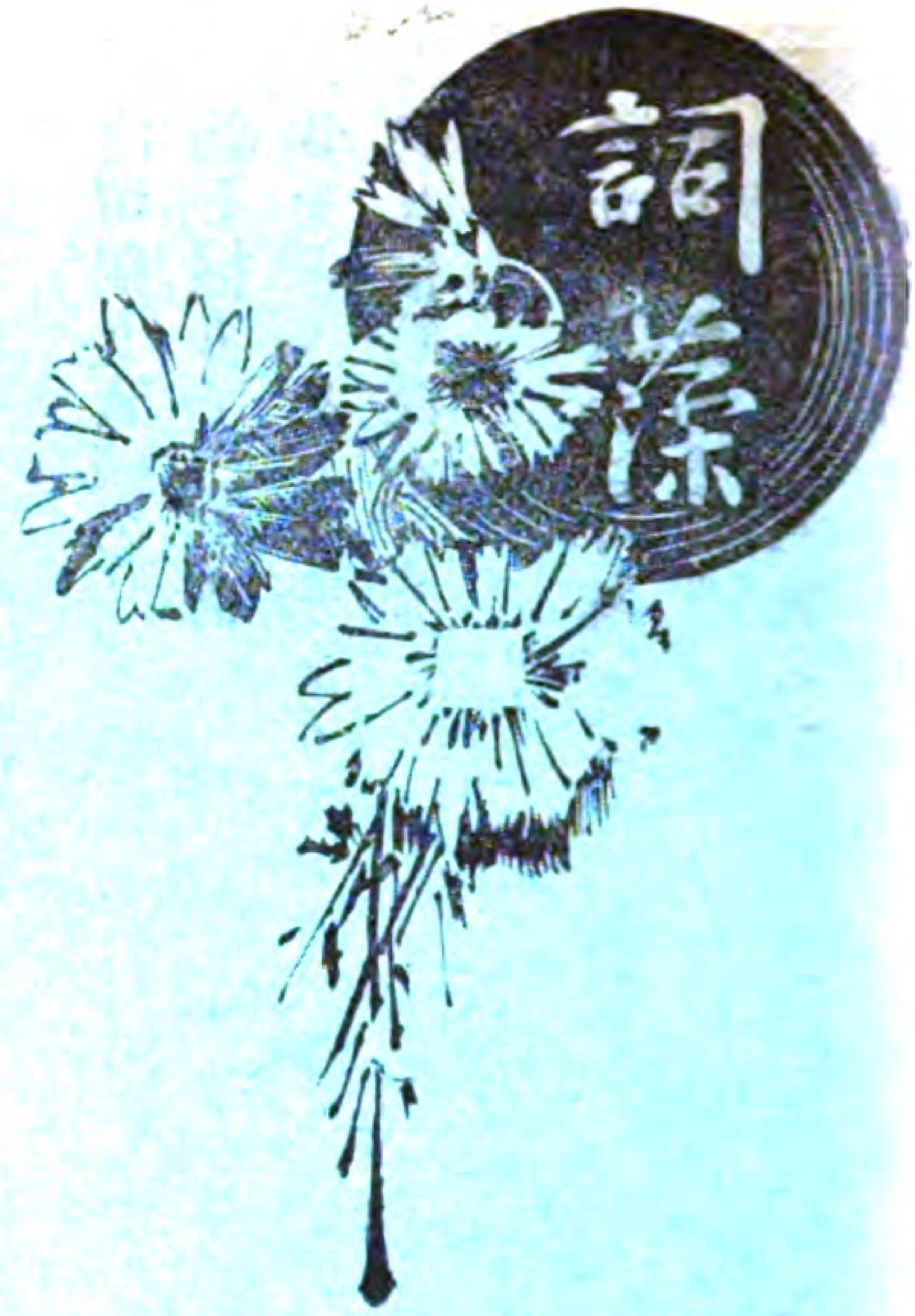
本年八九月以來東京並に大阪の諸新聞雜誌を始め外務省通商局其筋に至るまで過去並に現在に於ける移民事業の弊害を極言せしもの、前後數十百回ぞ、而して之に對する辯駁に至りては未だ一言の耳にする所あらず、政府は只移民取扱人に對して幾分の取締を爲たるに過ぎず、根本的整理と積極的改善策とに至りては未だ一事の企畫せし所あらざるなり。吾人を以て之を見るに政府にして若し國家の利害を顧慮するの誠意ありとせんか、其弊害を一掃し其の、利益の增進を圖るは眞に一擧手一投足の勞のみ、曰く

一、從來の移民取扱人を打て一團と爲し、一大資本の下に一大移民機關を組織せしめ政府に監督を置きて嚴重に監視整理せしむる事是なり

若し夫れ事情の許さざるものあらんか。

一、一會社をして保證金二十萬圓以上を納附せしめ、資本金五十萬圓を最低格として其取扱を許可する事

一、此場合に於て二三以上の會社を許可する時は其聯合を命し業務の



秘密國の探險

河口慧海師を憶ふ　小林雨峯

星斗は愁ふ秋の空
旅ねに魂も驚きて
夢に故國を思ふとき
獨りさまよふ砂漠の地

三千里外跡たえて
飛鳥もつきし雪山の

雪は千古の時遠く
世を鎖したる西藏に
猛虎の如くわけ入りし
身は神力の加護深く
ラッサの京に逗まりて
菩提の寶珠求めけむ

萬苦のあとを例ふれば
昔しロースの露と消え
虎の餌食に斃れたる
玉葉の皇子偲ばるゝ

張騫玄弉震旦の
たけき丈夫は數あるも
われにはたえてきかざりし
壯圖始めて君に見る

單鉢の身に死生なく
たゞ向上の精神のみ
鐵　凌く求道の器

生還元より期せざりき
靜觀空しくみ佛の
ありし昔しをしのぶとき
貝葉の文今もなほ
此の土に殘るうれしさよ

されど險關入り難き
國のおきても忍びたる
身はラマ僧のいでたちに
人膽冷やすいさましさ

淹留獨り寶藏の
鑰を握りて二裘葛
錫をとゞめし甲斐ありて
民に信認深かりき

やがてはかざす桂冠に
東方の榮飾るべき
運命の矢はつきたるか
諜者のそれと疑はれ

おきてに問はれ牢獄に
曳かれんとせし其刹那
屠所の羊に似たるかも
抱負空しく消えんとす

胡馬も嘶く夕まぐれ
北地を遙か思ふとき
天地かきろぐ心地して
ゆくゑも迷ふ旅の宿

あゝ山河萬里をふみ破り
身はこの境に進み入り
薄倖かゝる厄に遇ふ
佛日遂に明なきか

兵士戰場の露と化し
道者求法の途に斃る
古今の例し期すれども
なほ惜まるゝ法の庫

一夜鷄鳴の客となり

十重につゝまる關門を
逃れ出づれば天寒く
胡沙吹く風は力なし

あはれ虎穴に操り入り
虎兒を殘して歸るには
いかに思出つらかりし
斷雲の身はいとはねど

あゝかの銀冠のいやたかき
雪山の色清くとも
一衣の僧を容れえざる
異鄕の天地情なきか

東亞の空を眺むれば
敎海の波荒みはて
閏津の人溺るとき
不幸何にとて降しけむ

流寓なほもダーヂリン
獨り住みわび思ふとき
萬感胸をつくならむ
地角に孤錫よそう身は

東風かへり花笑ふ
故國の今は春深く
愚僧苟安にねむるとき
いたく驚く旅の夢

眞如の眞珠ともなく
胸には秘めてつゝめども
黑雲掩ふ今の時
魯陽の才を振ふ誰ぞ

一葉の君天涯に
寄する心も累卵の
危き運命知りつるも
なほしのばる丈夫の身」

（をはり）

しどろもどろ

（言歌）

渡邊光風

敢て新奇を好む譯ではありませんが、言文一致體の文章が世の中に存在を認められた上は、歌に言歌と云ふものが出來るのも理の當然であらうと、試にこんなものを作つて見ました。子供の喋言のやうだと譏るものは、お譏りなさい。俗謠の繩張内へ足を入れたと苦障を鳴らす人は、お鳴らしなさい。誠に下らないものではありますが、正直のところ、今度私が始めて、これに手を染めるので、今日まで唯の一つも摸範にすべきものがないのですから、どんなのが此體に適應するか、又發達の望みがあるか、ないか、自分ながら、殆ど判斷がつきかねるので、よしんば徹頭徹尾惡口の中へ葬られて了つても致方がないのです。けれども、かうして皆さんにお目にかけたならば、自然御親切のお方があつて、或は特別の御指導を辱うし、研究上の便利をお與へ下さらないとも限るまいと、譾劣も顧ずに、玆に披露する事と致しましたので御座います。

てふ〳〵は　どちらにとまる　八重に咲く
牡丹の花の　赤いの白いの。

膝に猫　日向(ひなた)で鞠を　かゞってる　むすめか
はゆや　ちよとこち見やれ

霜の朝　うぐひすチャ〳〵と　さゝ鳴いて
垣をくゞって　隣の庭へ

もず鳴いて　すゝきほうけた　廣野原　さす
よ夕日の　うすい光りが

むらさきの　色はよい色　野のすみれ　何を
愧ぢてか　たんぽゝの陰に。

盃洗の　水のみほして　酔は醒めず　みかん
の酸いの　柿のあまいの。

ざる抱へ　小刀持って　摘草に　げんげ咲く
野を　姉といもとゝ。

父上の　墓は、こまごめ　吉祥寺　おほ木の
杉の　露ちるところ。

新らしい　父のお位牌　ふしをがみ　香(かう)をく
すべて　思はず泣いた。

火葬場は　どこか、あそこで　尋ねましょ
窓のあかりが　森から漏れる。

母上が　お召しあそばす　三つ紋の　羽織の
紋を　うひ孫なでる。

白ばらの　かんざしさして　化粧して　夜會
むすびの　孃樣、町へ。

はなやかに　精養軒の　電氣つき　うへのこ
うゑん　日は早くれた。

招きましょ　お嫁に行った　姉樣を　ひな樣
かざって　白酒あげて。

山三里　駕籠で越えたが　芒野は　馬で行き
ましょ　賃うまこゝへ

おかよひか　提灯つゞく　土堤八丁　伊達の
若殿　高尾のもとへ。

ゆきまする　母御氣丈に　御達者に　いくさ
て死ぬのは　男のほまれ。

宿(しゅく)は遠く　時雨に暮れた　旅の空　はぐれが
らすが急いで歸る。

南天の　あかい實、雪に　おちこぼれ　いつ
も來て居る　小鳥がそこへ。

梅花

小孤山生

讀某氏梅花詩卷次篇中諸作韻

欽君高臥謝衣冠。松竹訂盟凌歲寒。白雪吹香隨處遍。
黃昏帶月幾人看。水邊幽石瘦相倚。林下冷雲凝作團。
最喜江南消息早。春風第一嘯吟壇。

孤山遺愛此移栽。標格洒然無點埃。家被白雲埋沒去。
夢遭黃鳥喚醒來。風前馥郁麝吹氣。月下玲瓏珠作堆。
低唱淺斟多雅興。笛聲三弄酒三杯。

杖屨探春西又東。化身千億憶詩翁。白雲遮路俗寰遠。
翠羽導人幽徑通。臨水一枝留臘雪。傍山十里送香風。
竹籬茅屋尋常景。纔有梅花便不同。

老梅駢植碧嶙峋。安得此間來卜隣。北礀猶堆三尺雪。
南枝已占十分春。蹄輪勿漫驚高士。脂粉何容涴美人。
幽靜自存無限趣。半瓢殘酒酹花神。
一道潺湲碧玉泉。東風陣々薄寒天。冷烟籠樹黄昏近。
疎影離波明月懸。佳句早爲人所賞。勝區多在地之偏。
逋仙高躅君須繼。證得三生石上縁。
江南微雪半晴天。尋到竹籬茅屋邊。溪上避烟孤鶴瘦。
枝頭追暖早鶯遷。横斜影訝簪釵墜。清淺水疑環佩傳。
林下美人含笑立。不施脂粉更嬋娟。

首々梅花傳神、非斷火食人、不能解其妙、

壺燒

繞石選

春風や壺燒食ふて島めぐり　柳家
壺燒を試みて去ぬ旅の人　經明
ともすれば煮ゆる蠑螺のくつがへる　夏風
壺燒や廓もどりの頬冠り　兒獅子
壺燒や坐禪危き膳の隅　不破
壺燒や取り圍む人に足るべうも　摩天鶻
つぼやきや三浦岬の薄がすみ　丁堂
食ひつくす壺燒の殻のぞきけり　同

壺燒の燒ける間を見る海の面　芒生
壺燒の潮をふきけり海かすむ　同
蛤の舌壺燒の拳かな　萩生
江の島や壺燒の灯貝細工の灯　同
蠑螺やゝ蠑螺のやうなおやぢかな　同
壺燒の江の島うれし海の音　同

人

三界は火宅蠑螺は燒かれけり　芒生

地

壺燒や淡路へ渡る舟の中　摩天鶻

天

壺燒や長汀曲浦かすみけり　萩生

選者吟

壺燒や發句もよまざる彌次郎兵衛
壺燒や富士は晴れたる磯霞
食ひすてし壺燒の殻春寒し
壺燒や片瀨は宿の鄙びたる
壺燒に輕き瓢となりにけり
名物の壺燒もとて旅の春
壺燒の蠑螺の湯氣や富士かすむ
壺燒や鎌倉いでゝとある村

壺燒や浦に住む乳母が馳走ぶり
壺燒や橋の柳に月うすき

課題

藤「三月十八日限」
蠅「四月十八日限」

まだら草

△　森欝堂

口にのみ平和となへて差向くるやいば三尺ちりもとゞめぬ。

白梅の咲ける中庭乙女子が羽子板抱いてうぐひす聞くよ。

ふるさとを忍ぶ下宿のやれびさし新乳の如き春のかせ吹く。

すゞめちる嵐としばしたゝかひて雄々し隼(ハヤブサ)ゆきに山のす。

新妻と雑煮いはひて外に出てゝまだ口どもるうぐひすをきく。

いてどけを御墓まうでのわざも子が内輪になづむ駒下駄あぶな。

遠山のかすみにのぞむ四疊半今日も客なく釜の湯たぎる。

庭下駄に片あしかろく簀(スノコ)よりうぐひすきくよ元祿をとめ。

△　栗山直扶

窓の戸をあられうつ夜半ゆめさめて冷たる藥とる腕痩せぬ。

大杉の咒ひの釘に月さえて風さむき夜をみゝづくの鳴く。

山ざとの叔母が歳暮の納豆に款冬のとう掘る雪のたそがれ。

小書院に寒梅いけし砂鉢の水こほる夜をゆきげのあらし。

△　鹽田香園

むしろ君田をば作れと友はいへど筆もつさへにつらきかひなよ。

いかにせん智なく識なく才もなき鋤もたんにはかよわきこの身。

君とわれ其戀はかな歌となりて馬ひく馬子の口にのぼりぬ。

冬の夜の長き一夜をみひつきのつめたきまもり只なきあかす。（父喪ひける人に代りて）

△　　　　正富汪洋

駒ながら妹かり通ふ女坂さかの南の梅ま白なり。

いまの世にわらはれましの二人なり露の春野腕交しゆかむ。

さらばきみわが手をとりて詩の神のみ許にいざや導きたまへ。（泣菫兄へ）

髪結ひて君待つ宵は嬉しかりき人のおもはく恥しかりき。

おほろ夜をせのきみ待ちて心そゞろ庭に出てみつまた入りてみつ。

友どちと轡つらねて雨に濡れて黒門によりて明の花見る。

かたくなの法學生を苦しめぬ牡丹たゝへて周茂叔說いて。

文天祥それの氣慨は願はねどせめて男の骨あらばいかに。

世に泣きていきどほろしくなれるとき神の惠かこの和き手は。

△　　　　乙山千笑

亡き君の植ゑし白梅花咲きぬまづ一枝よ折りて手むけに。

白梅をかざして歌ふ乙女子の眉のうごきよさて神に似たり。

GEMS OF WISDOM.

Ambition is often the assassin of happiness.

* * *

Sarcasm has many admirers, but no friends.

* * *

A light heart sometimes means a light head.

* * *

Have something to do, or you will be a nobody.

* * *

A man seldom has any trouble in finding trouble.

* * *

Genius consists in making the other fellow do the work.

* * *

The man who is his own best friend has few others.

* * *

A man thinks he knows, but a woman knows better.

* * *

The best-man at a wedding is often also the most lucky one.

* * *

Money buys things, and love wins things; power takes things.

一部聯盟を作らしめ政府監督の下に之を統一する事

而して移民會社の責任として必ず左の三件を完ふせしむるの規定を立つべし。

第一、移民の募集は須く勞力過剩の地に於てし一地方に偏して土地の經濟を紊亂せしめざる事

第二、外國に向て勞力に對する需要供給の度合を察し、移民の渡航數に其適度を失せざらしむ可し

第三、在外移民の取締を嚴にすると同時に彼等をして安全に就業し貯蓄せしめ其疾病災難を救助し、其子弟を教育する等直接に間接に誘導保護其宜しきを制す可し

如斯にして始めて能く内外の弊害を一洗し外國に向て國家の体面を保ち會社の信用を博し、進て積極的に勞力の需要販路を擴張するを得可し。

動物虐待の惡弊

「東　朝」　記　者

動物を虐待するは野蠻の惡風にして、同情に富める文明社會の一大汚辱とする所なり。動物も亦人間と同じく生を覆載の間に享けたるものにあらずや。若し人間が其生活の幸福と平和とを要求するの權利を有すとすれば、動物も亦同樣の權利を有せざるべからず。彼等は初めより人間の用をなさんがために生れ來りたるにあらず。されど强者たる人間が弱者たる彼等を利用するは勢の免れざる所にして、敢て天地生々の德を傷つくるものに非ずと雖も、其言はず訴へざるに乘じて虐使酷待し、其生活の幸福と平和とを全く奪ひ去るに至つては人間の亂暴も亦甚だしといふべし。權力又は金力によりて壓制せらるゝ人を見れば、四圍皆必ず之れに向つて温かなる同情を寄するを禁ずる能はず。而も動物の虐待せらるゝを見て惻隱の心を動かすものに至つては甚だ多からず。是れ高尚なる同情の未だ發達せざるが爲めなり。社會の良心麻痺せるが爲めなり。此の如き社會に生れ出でたる動物は眞に憐むべきかな。

日本の社會は動物の資用に就て遙かに高尙なる同情の缺如せる社會なり。門前一步を出づる每に、吾人をして最も不愉快の感に堪へざらしむるは、纍々として喪家の狗の如き憐れなる牛馬に、數百貫もあらんと思はるゝ重荷を挽せて街路を辿り行くものあると是なり。平坦の道を行くさへ實は既に其力に堪へざる所なり。されば阪路に到着する度に氣息奄々として動もすれば則ち僵れんとす。而して匹夫情なく、乃ち鞭を擧げて之を叱咤す。殘酷ならずや。圓太郎馬車を見よ。鐵道馬車を見よ。其馬は肉落ち骨聳えて活氣全く銷沈せるにあらずや。其鬣と其尾とは鞭に代へんが爲め剪り去られ居るにあらずや。彼等は相當の食餌と休養を與へられずして過大の勞働を强られ居るにあらずや。彼等は生活の幸福と平和とを全く奪ひ去られ居るにあらずや。歐米諸國の大都會に於て若しかゝる心なき業をなすものあれば、社會は之を攻擊して假借せざるべし。彼の國に於て吾國に於けるが如き憐なる畜類を見ることなきは即ち何よりの證據なり。法律も亦畜類虐待を以て一の刑法上の罪となせり。かゝる事には無頓着なるべき淸國に於ても、上海の如き居留地に在つては同樣の制裁あり。倫敦のオムニバスには『吾々は言ふを能はざるものに代りて言ふ、勾配の急なる場所に於て車を止めしむるなかれ、再び發足するに當り馬の力を費すと甚だ大なればなり』と記しあり。可憐の動物を使用するものは固より此位の親切なかる可らず。動物に對する親切は啻に社會の美德として推奬すべきものなるのみならず、動物使用の上に於て大なる利益あるべき也。適當の營養を與へずして法外の勞作を强ゆる

は疑もなく動物をして早く其勢力を消耗して夭死せしむる結果を生ず。夭せざる迄も人をしてその自然に備へたる勢力を十分發展利用せしむること能はざるべし。一文惜みの百損とは此事なり。是實に經濟上の大損失なり。國の馬匹虐待の悪風は自然に之をして温順の美質を失ひて慓狂悍傑殆んど野獸の如くならしめたるに與つて力有り。

高尚なる同情を有する人士並に畜産關産の人に告ぐ。希くば吾痲痺せる社會良心を覺醒して、少しく動物を遇するに道を以てすべきことを世間に教へよ。無用の犬猫を寵愛する心を移して、少しく有用の牛馬に及ぼしめよ。是啻に社會の美風を涵養するのみならず、其結果甚た大なるものあらん。

▲名優の身長

英國の劇壇に於ける喜劇の名家、ビーアボム、ツリー氏及びチヤーレス、カレッテ氏は各六呎以上の身長を有したりサー、ヘンリー、アービングは五呎十吋ジョン、ヘーアは最も短くて五呎五吋東西共名優に短身者無し



哲學館事件とは何ぞや

米峯

●緒言

さすがは、上に賢明な大臣閣下を戴き、下に忠良のお役人様ある文部省だけありて、時々活劇を演じて、吾々俗人の膽ッ玉を冷させ給ふ御腕前、たゞアッと感服の外はない。「帆柱問題」も、やうやく七十五日といふ人の噂の時効にかゝるかかゝらないに、早くも已に、「教科書事件」といふ一大疑獄を次ぎ興行として、その支配統轄の下にある、お役人様方や大先生樣方、無慮百數十人を、繩つきのまゝ舞臺に登せ、實に

天下の壯觀を極めた、ところが、今の文部省の活動力に富める、これ程働いてもまだその及ばざらむことを恐れ、張目飛耳、殆ど老練なる刑事探偵の如き態度を以て「事」あれかしと索め歩いた骨折り空しからず、遂に東京は小石川の片ほとり、鷄聲ヶ窪なる一私立學校に於て「神道は祭天の古俗なり」以來の大々的珍種を發見し、これなら確に、忠良なる四千萬の國民をして、ヤンヤとうならせる値打はあらうと、反り身になつてヘヘヘと笑ッたところ實に千兩……イエサ誠に淺慮の至りではあるまいか。

事實　哲學館は、去る明治卅二年に於て、中學校師範學校敎員無試驗檢定の認可を得たのであるが、爾來三年間の課程を修了させたので、昨卅五年の十月に、第一回卒業試驗を執行した。その時の倫理學の試驗問題の中に、「動機善にして惡なる行爲ありや」といふのがあつた。ところが哲學館では、倫理學擔任講師中島德藏氏が、桑木嚴翼氏の譯したミユイアヘッド氏の倫理學を敎科書として、開發的に倫理を敎授して居られたのであつたが、受驗者の一人は、その敎科書中に在る、

單に彼の、志向たるに止まりて動機たらざりし結果の部分を見て、之に善惡の判斷を下すべきものにあらず。否らずんば、自由のために弑逆を爲す者も賞讃せらるべく、自ら焚殺の料に供せんがために、罪死に瀕せる人を救へる暴君も、辯護の辭を得べし。云云。

といふが如き趣意のことを答案に書いたのを、その時臨監したる文部省のお役人様、隈本有尚といふ人が見て忠君愛國の熱誠に取上せて御坐ッたものと見え、弑虐といふ二字にフラフラッと眼が眩み、ミユイアヘッド氏の「動機」や「志向」の詮索もせず、たゞ一圖にそりやこそ國賊御參なれと、取るものも取あへず御注進に及び、不忠の奴等許すべからず、お手討にもなるべきを、特別の御慈悲を以て「文部省構」仰せ付けるといふことで、遂に與へたる無試驗檢定の特權を奪ひ、認可以來第一回の卒業生は、無試驗檢定を出願したが不合格とし、剩へまだ不都合なる（所謂御役人樣方の仰ッしやる）ミユ氏の倫理説を聽講したことのない第一二三年級の生徒も、共に同資格を得る特權を取消され、中島氏は哲學館及び東京工業學校講師を諭旨退職せしめられ、その上、暗に哲學館に對しては、謹愼の意を表して居ればよし、さもなくて騷ぎ出し、この事を輿論にでも訴へるといふやうなことがあれば、斷然學校の閉鎖を命ずるかも知れぬといふやうな威嚇を試

み、哲學館は、目下館主井上圓了氏不在のことてもあるし、古參講師て「勅語讀本」などさへこしらへた位の頗る非常な忠君愛國派たる湯本武比古氏を始め、たゞ縮みあがッて謹愼して居るのである。然るに中島德藏氏は、自己の擔任學科からして、哲學館にこンな迷惑をかけたのは如何にも、氣の毒だといふので、奮然蹶起してその事の顛末を天下に告白し、全國の新聞爭つてこれを轉載し、社說に寄書に、或は敎育行政上から、或は倫理學說上から、文部省の處分の亂暴狼藉なのを打擊しないものはない位(「二六新報」のみは一言も言ひ及ばず)。而して總選擧、敎科書事件、哲學館問題、これを目下新聞紙上の三大立物と呼ばれるに至ッたのである。

ミュ氏の學說は危險なりや　中島德藏氏一たび起ッて哲學館事件の顛末を天下に告白するや、輿論は鋒鋩を列ねて文部省に突ッかゝッて來たものだから、文部省は周章狼敗爲すところを知らず、たゞ何がなと巧に言を弄して己の非を掩はうとし、そしてますますその醜と愚とを暴露し來ッたのである。最初は、自由のため弑虐云々といふ引例が不都合だからといふ理由て、認可を取消したかの如く辯じて居たのであるが、後には、遂にその引例を産み出したミュ氏の學說が、不穩當てあるやうに言ふに至ッたのである。ミュ氏の學說の比較的穩健なることは、自稱數學者や、極端な直覺說に盲從する程の愚人や、又は倫理硏究を以て道德を破壞するものであるやうに考へて居る腐儒輩を除くの外、苟も倫理學の片端でも聽き喫ッた程のものならば等しく首肯するところである。論より證據、ミュ氏の學說は、上は東京帝國大學より、高等學校、高等師範學校以下、全國の敎育家の殆ど全體に涉ッて、講究せられて居るのであつて、現に文部省の檢定試驗に應ずるには、是非共これを一讀して置かねばならぬとまでになッて居るところのものである。若しミュ氏の學說にして危險なものであるとしたならば、何故に先づ大學の敎授の學說を罪し、旨を諭してその職を退かしめないか、何故に先づ高等師範學校の卒業生に、中學や師範學校の敎員たることを差止めないか、又何故に先づ文部省が修身科敎員として檢定免狀を與へたものからその返付を迫らないのか、ミュ氏の學說眞に危險なりとして文部省が先づこの爲すべきを爲して、而して後に哲學館の處分に及べりとしたならば、吾々は少くとも文部省の猪勇あるを賞するも可なるか、さはなくて、

たゞ一私立學校たる哲學館をのみ罪して、他を不問に付し置くを見ては、吾々は斷々乎として、文部省の底意が、私立學校撲滅にあることを信ぜざるを得ないのである。

處分酷に過ぐ　　最大多數の識者の承認するやうに、ミュ氏の學説は些の危險なく、寧ろ穩健中正のものであるとしたならば、これを講授したのが何で惡いのであらう、これを聽講した生徒が、その説を受賣り的に答案を書いたのが何で罪すべきであらう。たゞ弑虐といふ文字が不祥であるといふならば、爾今國民全躰に頼んで、この二字を忘れて貰ふより外しかたがない。假りに倫理のことなど一向にわからない、例へば或る自稱數學者のやうな愚見地から見て、ミュ氏の學説は危險であるとして、さて文部省が哲學館に加へた處分はどうであらう、若し果してミュ氏の學説が危險であるとしても、それを生徒に講授したものは哲學館ではない、哲學館を代表する館主井上圓了氏ではない、たゞ倫理學の擔任講師中島德藏氏である。事若し罪すべくんば、中島氏の職を罷めさせるだけで十分ではあるまいか。又哲學館の中島氏を招聘するや、豫め危險なる學説を講授する人なることを承認して、これに生徒を託したといふ事實があらば格別、しかし哲學館主井上圓了氏は、吾々より見る時は、實に極端なる勅語派であッて、殆ど頑冥に近い程の忠君愛國黨である、何てそんなことを豫想して講師を招聘することがあらうや。更にまた、此くの如き危險な學説を聽いたものは到底中學や師範校の教員には出來ないといふならば昨年の卒業生、即ちこの事件の種を蒔いた第一回の卒業生だけに、認可を與へないと云事でよいではないかまだ一度も中島氏の講義を聽いたこともなければ、ミュ氏の倫理學を眺めたことさへない第一第二第三年級の生徒をまで罪して、これに特典を與へないといふのは、實に無慈悲の頂點、殘酷の極度ではあるまいか。彼等現在生徒は、犯せる罪なくして鐵窓に繫がれたるよりも、なほ氣の毒なるものがある。殊に第三年級の生徒の如きは、眞に螢雪の勞苦を積むこと漸く三年、こゝ數月の後には、兎も角も一個の教育家として、平素の理想を實現して見やうと、樂しく勉勵して居る矢先へ、突然この理由なき責罰を蒙り、彼等は實に當惑に當惑重ねて居るのである。罪なきものを罪する、これ既に默止すべからず、况んや有爲なる數百の青年の進路を遮り、彼等をしてその方向に迷はせるといふに至ッて

は、吾々は飽くまでこの沒常識にして殘忍酷薄なるお役人樣と戰はなければならない。而して彼等お役人樣の反省を促し、速にこの處分の取消を求めなければならないのである。

私立學校の撲滅　　中等教育が、年一年に隆盛を來し、從つてその敎員の缺乏甚しく、各府縣中學及び師範學校が、每學年の始めに於て、殆ンど俸給の競爭を以て、辛うじて招聘といふよりは寧ろ引張り寄せる程てある。この時に當ッて、この國家教育の缺陷を補はうといふので、從來の組織の一部を變更して、中學や師範校の敎員を養成することゝして。文部省の特典を得たのは哲學館てある、勿論その特典を得ない前からも、每年十數人の文檢合格者を出し、夙に教育界に於て、清新なる一勢力を作りつゝあるものであッて、日本の中等敎育に對しては、決して忘るべからざる功勞があるのである。これを以て、曾て　今上陛下は、思召を以て金圓を下賜せられた位てある。當然から言へば、この仁慈なる陛下の下にある政府は、哲學館の如きに對しては、十分の保護を與へてその職責を盡さしめ、以て國家敎育の缺陷を補はせてこそ、始めて陛下の大御心にも適ひ、眞に陛下に忠良なる政府といふことが出來るのである。然るに、曾ては陛下がこれに恩賜さへあッた哲學館に對して、罪とすべからざることを曲解して强ひて罪となし、以て一たび與へたる特權を奪ひ、非常な迫害を加ふるといふのは、眞に忠君愛國の擧といふことが出來やうか。　吾々の見るところでは、事のこゝに至ッたのは、全く今の文部省が實力競爭の結果、官立學校出身者が、年一年に私立學校出身者に壓倒せられ行くを見て頗る心外に思ひ、何でも私立學校を迫害して、遂にはこれを撲滅し、依然として官學出身者の肩書（實力にあらず）の價値を維持して行かうといふ底意から起ッたことに相違ないのである。委しく言へば長くなるが、今の日本の敎育界は、ザット大學派、茗溪派、私立學校派の三黨鼎立の狀態てある。ところが、今の文部當局者は一意專心、大學派（勿論東京帝國大學に限る）の勢力を扶植しやうといふことのみ熱中し、同じ官學の高等師範に對してさへ、屢々種々の迫害を試み、その勢力を抑壓しやうとし、（この事は昨年の『萬朝報』に十日間ばかり連載せられたることある故今は畧す）、一面は私立學校に對して、樣々なる難題を持ちかけてはこれを困らせ、少しでも乘ずべき機會があらば、これを陷れて頭のあがらないやうに

してやらうと考へて居るのである。

忠君論の犠牲　日本の國民として、陛下の臣民として、誰か片時も忠君愛國の念なきものがあらうや。軍人が千軍萬馬の間を馳驅して、義勇公に奉ずるのが忠君愛國であるやうに、實業家が國の生産力を増大するのも忠君愛國であるし、學者が冷靜宇宙の眞理を探究し、國の文化の先導をするのもまた是大忠君大愛國である。口に勅語の難有さを述べ、筆に忠君愛國の文字を臚列しなければ、忠君でない愛國でないといふ理由は決してない。また忠君愛國といふことは、決して文部省の一手專賣品ではないのである。それを何ぞと言ふと、直樣忠君愛國を擔ぎ出して人を鎗玉に擧げやうとする。ア、自由、汝のために如何に屢々忌まはしきことが行はれたるよ、否、ア、忠君愛國、汝のために如何に屢々忌まはしきことが繰返されたるよ。「神道は祭天の古俗なり」と唱へた學者は、遂に大學教授の椅子を奪はれ、共和云々の例を引きて演説したる政治家は、遂に文部大臣の椅子からつき落され、さうして自由のため弑虐云々といふ引例をしたといふので、一校、一講師、及數百の生徒は罪せられた。これ實に僞忠君僞愛國の犠牲であッて、同時にまた、今の文部省、その他滔々たる一般の忠君愛國家は、悉く是れ形式的の忠君愛國、藁人形的忠君僞愛國であるといふことの反證である。彼等僞忠君僞愛國派は、常に我國の國躰の萬國に卓絶して居ることを揚言して居るではないが、實に我國の國躰は、彼等の揚言して居るが如く、萬國に卓絶して居るものであッて、決して學者か研究の結果たる「神道は祭天の古俗なり」といふ議論によッて、グラつくやうなそンな怪しげな國躰ではない。又決して共和云々といふ引例のために、動き出すやうなそンな腰の弱い國躰ではない。況んや、最大多數の學者が中正穩健といふ保證附のミュ氏の倫理學説によッて、「容易ならぬことになる」やうなそンな馬鹿氣た國躰ではない。孝といへば雪中の筍を思ひ、忠と言へば湊川の討死を想ふやうな、そンな褊狹で固陋な考では、眞の忠君愛國はわからない。德川時代の忠君愛國は、この廿世紀の新天地、明治聖代の御代には通用しない。一國道德の源泉であるべき教育界が、今日の如き一大醜態を演出したといふのも、實は主としてこの僞忠君僞愛國、…形式的忠君愛國主義によッて、口に忠君と呼び筆に愛國と書きさへすれば、その心事はどンなに陋劣でも、その行動はどンなに醜汚でも、立派な忠君

愛國家であるといふやうな考が、最も大なる原由をなして居るのである。現に當代の教育家として、常に勅語を擔ぎ廻はッて、我こそ忠君愛國の權化でござぃと言はぬばかりの顏して居る人が、法律上罪にならぬといふことを知ッて、公々然として人に向ッて、「僕なンぞも、教科書肆から頼まれて、あッちこッちへ賄賂を贈ッたことはある」と明言して居るではないか。今の忠君愛國家なるもの、實にこういふ連中のみであッて、たまたま亂臣賊子を以て目せられる程の人々の間にこそ、却つて眞の忠君愛國家があるのである。思へ、文部の當局者、眞の忠君愛國は、決して形式の上にあるのではない、口舌筆紙の上にあるのではない、二千五百餘年の間、連綿たる皇統を戴いて來た吾々國民には、殆ど先天的にこの忠君愛國の念を持つて居るのであッて、それが時代知識の推移と共に、進歩し發達して、天壤と共に窮りなきに至るのである。

學問の獨立　こゝに至つて吾等は、更に學問の獨立といふことについて一言せざるを得なくなッて來た。言ふまでもなく、學問は獨立なもので、普通なもので、決して何々の國躰や何々の政躰の下に、隷屬し屈從すべき筈のものではない。苟も學者の智識的探究である以上は、必ず政權や教權の表に卓立して、斷じてその抑壓箝制を許さないのである。これ即ち世界の學問が日進月歩して、今日の文明開化を來した所以であるのである。若しこゝに國があッて、その國躰に拘泥して世界的の學問を抑壓し、學者をして十分にその智的探究をなさしめないとしたらどうだらう、憐むべし、その國の文化は進歩の足掻きを止めて、眞理の光明はこゝに輝かず、學者は悉く曲學阿世の徒となつて俗權に頤使せられ、國民は頑冥固陋の眠醒めずして、世界の列强と生存競爭をするに堪へず、遂に或は强國の征伏を免れることが出來ないやうにならぬとも限らぬ。近くは我が明治の維新の時、五事の御誓文の中にも「智識を世界に求め大に皇基を振起すべし」と誓はせ給ひしは、即ち獨立普遍にして、政權や教權以上に卓立した世界的學問の結果を取ッて、それで以て我國光を宣揚しやうといふ大御心であつたことゝ伺はれる。これを以て考へて見ても、日本の國躰は、學者の智的探究を抑へつけ、思想の自由と學問の獨立とを蹂躙しなくては、維持が出來ないといふやうな、そんな意氣地のない國體でないといふことは明である。それを何ぞや、今の文部省が、形式的にして固陋なる忠君愛國を楯と

して、俗政權を以て學問の研究に干渉し、學問の神聖を汚し思想の自由を妨げ、更に國民全躰の行動云爲をも、この形式的僞忠君僞愛國の鑄型の中へ入れやうとするのは、却つてこれ國躰を辱しめるものであつて、眞に大不都合事である。由來數學でもやツたやうな人とか、或は曲學阿世の腐學者などの間には、倫理の研究が道德を破壞するかのやうに考へられて居るのであつて、常に心ある學者をして、憤慨に堪へざらしめて居るのである。今この哲學館事件の如きも、主として私立學校撲滅の方策から割出された事であッて、そこへこの僞忠君僞愛國の褊狹固陋な考を楯として、學問に迫害を試みたのである。即ちこの迫害に堪へ、大に思想の自由を發揮し、學問の獨立を擁護するのは、これを今の文部省に望むことが出來ない。帝國最高の學府であッて、學者の淵叢たる赤門大學に望むとが出來ない。立派な肩書ある博士さんにも望むことが出來ない。辻新次氏を會長とし、幾萬の會員を有する帝國敎育會にも望むことが出來ない。あらゆる敎育雜誌にも望むことが出來ない。殊に、常にこの忠君愛國論のために迫害せられて居た、基督敎徒にも望むことが出來ない、彼等の多くは、政權を恐れてこれに屈從せんとし凡俗的思想と迎合して多數の愚民に歡ばれようとして居るのである。然らばこの時にあたッて、奮闘勇戰、能く眞理の光明を輝かし學問の神聖を護るものは誰であらう。ア、誰であらう。吾々はこゝに至つて、實に私立學校なるものゝ責任の、頗る輕からざることを思ふのである。

新聞紙の時弊に就て

寥川

社會に制裁を與ふるに新聞紙有り、新聞に制裁を與ふるは果して何物かある。新聞に對する不平は新聞を以て漏す能はず、如何なる偏頗、如何なる罪惡も、新聞社の行へるものは世人は之を言ふの機關を欠く。

由來本誌は多言を新聞紙の時弊なるものに向て費せり、次號よりは更に餘號

『新聞評壇』

なる一欄を置き、都下及び地方の新聞に表はれたる記事、其他に就て吾人の感じたることを力めて公平に批評し、併せて讀者諸君よりの投書をも募らんとす、諸

君の新聞に就て感じたることは善惡共に投寄せられんことを望む。

新躰詩と社會教育

常に清新なる家庭の讀物を供し、脂粉の臭氣以外何物も無き不健康なる我文學界に異彩を放てる堀内新泉氏は、頃來一種の新躰詩を創めたり。氏の詩は世に通ぜざる難澁の文字を弄して獨りよがれる、所謂現今詩家の常套を脱し、日常の用語を以て穩健の思想を傳へんとするもの、幼稚園の兒童も八十の老翁も喜んで讀むべし。實際社會敎育に益するところ尠からず。

前月左の一篇を寄せらる、世人が渡世の栞生涯の掟として、這種の詩を俗謠に代へて暗記するに至らば間接直接一國の風敎を補ふこと實に多大なるものあらん、特に本欄に掲出して讀者に推薦す。

人生

堀内新泉

（一）

人の此の世に生れしは、
　空しく過ず爲ならず、
あらゆる苦痛と戰ひて、
　身を立て家を起すべし。

（二）

身を立て家を起しなば、
　我等は即ち我が國の、
爲に盡しゝものなるぞ、
　國家の爲は此に在り。

（三）

身を立て家を起すには、
　獨立自營を事として、
他に賴るな我れは我れ、
　我れは尊き物なるぞ。

（四）

苦しき時は克く忍べ、
　山を越ゆれば平地あり、
雪や氷のその中に、
　知らずや春は近附きぬ。

（五）

人生終にいくばくぞ、
　逡巡遲疑は自殺なり、
これぞと思ふ事あらば、

眞一文字に進む可し。

(六)

正しき道を楯として、
獅子奮進の威を振ひ、
人々戰へ國のため、
世界は我等の戰場ぞ。

(七)

叨りに我れを卑みて、
目上の人を恐るゝな、
學べば我等も博士なり、
稼げば我等も長者なり。

(八)

油斷は出世の敵なり、
失意得意は隣同士、
得意の時に油斷せば、
やがて失意に陷らん。

(九)

時は金なり時は金、
人々この語を忘れずに、
時間を化して金にせよ、
時間は即ち金なるぞ。

(十)

博士も始めは一字から、
長者も始めは僅から、
僅を忘れて一時に、
多くを望む不覺なり。

(十一)

つまりこの世は金次第、
痩腕張りて道德の、
議論はやめよそれよりも、
先づ身を富せ國の爲。

(十二)

おのれの家族を飢しつゝ、
いかに仁義を說けばとて、
社會もゆるさず身も立たず、
神や佛も受けざらん。

(十三)

愉快と云ふは氣の勇み、
勇氣と云ふは心の張、
事業を成すはこの二ツ、
常に勇めよ愉快なれ。

(十四)

世を怨まずに樂みて、
　稼げ身の爲國のため、
稼ぐに追付く貧乏は、
　無しと古人も敎へたり。

（十五）
一家中よく稼ぐべし、
　家の榮えはこゝに在り、
不和は怠たる家に住み、
　笑ふ門には福來る。

（十六）
友には誠を盡すべし、
　情は人の爲ならず、
我れ他の人を憫めば、
　他また我れを憫まん。

（十七）
朝は笑ふて早く起き、
　夜は悦びて床につけ、
身体の無病息災は、
　黄金に勝る財寶なり。

（十八）
君には忠を勵むべし、
　親には孝を盡すべし、
君の恵みは大いなり、
　親は二度無きものなるぞ。

（十九）
さは云へ我等が渡世の、
　秘計と云ふも他に無し、
正直勉强この二ッ、
　人々必ず守れよや。

（二十）
喜べ！勇め！人々よ、
　この二ッだに守りなば、
我等は終に富み榮え、
　いかでか春に合はざらん。

（をはり）

文藝時觀

思想問題に就て

虎深

島村抱月子は萬里書を飛ばして英國及び大陸に現れたる思想界の動靜を報じ、施いて一時この國に喧囂を極

めたりしニーチェの論に及ぼし、以て眠れるが如き我が文壇を驚かさんとしき。文は載せて新小説の第二巻に在り。近頃痛快の文字ながら、われ等が君に期待せる所の餘りに大なりしが爲にか、聊か失望の感あり。われ等は君の言に聞きて歴史的宗敎が、保守的なりと認めらるゝ英國に於いてさへ、其の積極的なる權威と信仰とを繫ぐるに足らずして、僅かに消極的の方面を生命とせることを知りぬ。されど舊宗敎が、其の形式と典型とを存して、其の精髓たる信念の動搖を來したるは實に十九世紀科學の著るき發展に伴ひたる現象なり、我が思想界は幼稚なりと雖、或る迷信家を除きては歴史的宗敎を文字通りに信ぜんとするものなかるべし、唯其れ今後の問題は、一面には偉大なる權威を有し、一面には理性に滿足を與ふべき新宗敎の出てんことなり。

されば、われ等の知りたきものは如何にして知識と信仰とを調和すべきか、如何にして情的慾求の所産たる宗敎が、理性と融合すべきかに在り。換言すれば二十世期の科學的思想と矛盾せざる底の宗敎は、如何なる要素と如何なる條件とを以て構成すべきやといふことなり。即ち吾人は既に舊宗敎の破れ家を去りて、新邸を營まんとの心構へを有するものなるに、抱月子が吾人に敎ゆる所、汝が家の壁は破れたるぞ、屋根の瓦は崩れかゝりたるぞと言ふに止まらば、これを有力なる助言と謂ふべきか。

次にニーチェ主義に關する抱月子の說は如何に。これも一ト渡り聞えたりと謂ふべきも、これぞといふ斬新にしてサッジェスチヴなる點を見出す能はざるを如何せん。若しこの說が氏が洋行前に出さましかば、若しくは今一層遡りて、ニーチェ崇拜熱の高まれりし時に世に示さんには、或は又『馬骨人言』に先だちて世に出さんには、大に世の耳目を惹きたるものあらん、而も今や時は過ぎぬ、否時と方處とは問ふまじ、單に他の言ひふるしたる事を繰り返すを止めて、新規なる見地より論じなばと思はれて、今更ながら口惜し。

今や我が輕佻なる思想界は、ニーチェの名さへ疾くに忘れて、噯にも出すものなし、高山樗牛は亡せたり、同信徒たる竹風子はニーチェの一本槍は抛ちぬとて、文壇八面鳥などいふ愛嬌をふり蒔きて居り。この時に當りて抱月子のニーチェヤニズム攻擊論を讀む、何となく火事場の後始末さへ終りたる處へリンの音仰山に蒸氣ポンプを引き來れるを見しが如き感あり。又醫は

ゝ葬式の濟みたる後へ醫者の駈けつけたるを見しが如し、これを御苦勞と言はゞ御苦勞なれど又少しく滑稽に似たらずや。

劇壇の新氣運

坪内逍遙氏の『牧の方』を持餘したる劇壇は、今や新派俳優てふものゝ手腕に籍りて、着々革新の氣運に向ふを見るはいと喜ばしき事なり。さきに森鷗外氏の書下したる『玉手匣兩浦島』は、伊井等に由りて市村座に上されて可なりにうけ、また江見水蔭氏の沙翁が四大ドラマの一と數へらるゝ『オセロ』の飜案は、新歸朝者たる川上等に由りて明治座に演ぜられ、新演劇の歷史に嘗て見えざる程の喝采を博しぬ、川上江見等の得意思ふべきなり。

是れを看て氣逸やなる評家は、演劇革新の實現はれぬとて騷ぎ立て、自惚れ強き新俳優等は、舊劇に對して自ら正劇派といふ名乘りを擧げき。然りこれも革新をいひ正劇といふ又何といはんも、名においては不可なし、されど是れをもて其の實をも併せ得たりと信ぜんは蓋し僻事なるべし。何をもて而かいふか、曰く『オセロ』が單に飜案に過ぎぬことなり、俳優が原作（飜案彼れが如くなれば猶更の事）の理想の腹に入らぬことなり、俳優の技が未だ陳套を脱せざることなり。

人はいふ、江見の飜案は善く日本化（或は川上化高田化と謂はん方當れるか）したる點に於いて確かに成功したりと。これ一面より言へば、江見はシェークスピーヤの性格劇を、日本の夢幻劇に燒き直したる點に於て成功したりといふに侔しからずや。試みにかの『オセロ』の脚本を通讀せよ、『オセロ』に於て、『イヤゴー』に於て、『ロデリゴー』に於て、何處に沙翁が苦心の俤をうつし得たるぞ。夫れ沙翁劇の飜譯は一たび逍遙氏に由りて、而も功を奏せずとして止みき。二たび戸澤姑射氏に由りて、これ亦其の功は勞を酬ふるに及ばざりき。われは思ふシェークスピーヤを最も善く知るものは最も多く失敗し、善く知らざるもの或は成功すべしと、これ逆語に似てさにあらず、沙翁の貌を摸するは易く、神を傳ふることの難きをいふなり。江見氏の飜案が上滑りなること、川上等の技藝が未だ性格劇を爲こなし得る域に屆かぬことは、具眼者の見逃すまじき事なり。種を西洋に取れると、場面を臺灣に取れると、川上等の洋行返りとか目先きを新たにしたりといふ外に、何等の革新あるか、何等正劇として誇

るべきものあるか、蓋し彼等（作者も俳優も）はこれより行李を裹みて劇壇革新の旅程に上らんとするものなり、その果して一時の人氣物たるに止まるべきか、若しくは劇壇の根本的革新の曙光となるべきかは、今後の腕次第なり、奮發次第なり。

善美一致論

「讀賣」の日曜文壇に、平野柏蔭氏は美と善とは對象に由りて異なるものと、即ち自然物には美ありて善なく、人間の品性には善ありて美なしといふ如き意義をほのめかせり。夫れ片鱗を看て全躰を評せんことと或は的を外るゝ恐れあらん、なれどこの思想は夷が思ふ所と大に異なり。

抑々美醜といひ善惡といふも、元來同一活動に名附けたるものにして自然も人間の品性も、主觀に對しては、同樣に客觀的にリアルの物として感ずるものなり。主觀の對象として、物的なる自然と、精神的なる人間の品性とを分たんとするは、二元論の謬妄に陷いりたるものなり。吾人が善といひ、美といふ對象の如何を問はず、これ善にして美なるものあり、醜にして惡なるものありて善美の必ずしも一致せず又必ずしも矛盾せざる所以なり。

さては同一の對象に於て善惡を分ち、美醜を區別する理如何、其の答は易々たるのみ、唯其れ主觀の態度の異なるあるのみ、即ち一を事物の評價といひ他を事物の觀照といふ、評價に由りて善惡別れ、觀照に由りて美醜生ず。

▲文壇怪氣焰

何うやらうけさうにもないが、まあやって見やう。なあに僕は教育屋ぢやないよ、現ナマは頂戴せぬから、誰に遠慮がいるものか。たまには氣焔を吐いて弱虫どもの肝膽を抜いて置かぬと、乃公の估券が下らあな。

◎先見の名　は乃公のものぢや、言はぬとぢやない、教育界のざまを見ろ、これぢやから彼等に小說は讀ましたくないといふ乃公の意見ぢや。芥舟ちう男の提案が事實とならなかったのはお互に仕合せであった。あんな腐れかゝった奴輩に、下らぬものを讀まして見ろ、收賄事件と相並んで姦通大疑獄なんぞといふ忌まはしい事がすんでの事に起る所であった、鶴亀〱。其れはさうと、

◎芥舟ちう男　はまだ健在ぢやらうか、彼れの教育界小說輸入論は何うなったらう。あれ程の名案があの儘おヂヤンたあんまり情ないれ。江戸の敵を長崎で打たうってのぢやないが、教育屋の自墮落に愛想が盡きはてたから、默ってばかり居られない。

◎『文庫』の文士評　は誰ぢやらう、中〱味をやる男ぢや。赤門方にも早稻田方にも、大分恐慌を惹起したやうぢや。僕の友人などにも大分大ふさぎといふ手合も見えた、先づ〱この模樣なら大分反響がありく

さうぢや。こんな事はどうも若手に限るやうぢや、早稲田の黌士でも、赤門の屁放家でも、片ッ端から遠慮なく、臆面なく、用捨なく遣っつけて貰ひたい。あゝさう／＼併しれ、

◎お尻に玉子殼連　の方はお手柔かに願ひますよ。先輩や老輩はどうでもよい、彼等は惰力で飯を喰って居るのぢや、我輩等はペンとペーパーでばくついて居るのぢやから、こっぴどくやられた日にや、うだつがあがらないよ。

◎桂月といふ男　は、誤面相は窺った事もないが、相變らず愚論の切賣にはあきれたものぢや。なんぢやあれても文壇の流行っ見ぢや！、さうぢやらう、あんなへチマな事を言はなけりや賣れないのが當世ぢやて。君、まあ彼の男の

◎漢字保存説　はかうなんだ。グリーキ、ラテンが今でも文明國で研究されて居るのぢやから、漢字は何處までも必要ぢゃ、此處ぢや、桂月の桂月たる所以は、この男はプライマリイスクールで、グリーキ、ラテンを研究されて居るから文明國と呼ばれるのぢやと、チャンと心得て居られる。其處へいくと

◎高橋作衞　は漢學者の息子だけに、少々話せるわい。彼れのはかうぢや、日本人が若し第二外國語を學ぶ必要があるならば、支那語を學び漢學を研究するのは最大急務ぢや、支那の經營は日本人の天職ぢや。佛語も獨逸語もいったものぢやない、漢學を勉强しろ、奬勵しろと怒鳴って居る。

◎よしでもらひたい　のは帝國文學の美文欄ぢや（序でに雜錄もよしてくれゝば尙よい）あのざまを見ろ、雄島某の何やらちう小說（ぢやか物語ぢやかお珈琲ぢやか明らかでないが）なぞと來た日にやどうも讀めたものぢやないて。堂々たる（竪々たるの誤りぢやないよ）赤門文士がどの面下げて『新聲』や『文庫』の若手連に顏を合せるぞ、これこゝな意氣地なしめが！

◎なんですって　子規と樗牛とは惜しかった？。馬鹿め何が惜しかった事がある、彼等はもう伸びるだけ伸びきった代物ぢやわい。これから百年生きのびたからって何か爲得るものか、古い竹のやうなもので頭から枯れてくる位がまうけものぢや。あゝ時なるかな／＼ぢや、彼等もさすが日本人ぢやて、善い時節に散ったわい。

◎島村抱月　ちう男も卑怯未練な腰拔けぢやわい。あれ程世間がニーチェ騷ぎでワイ／＼する時はうんだともつぶれたとも言はない癖に、今になって、長たらしいニーチェヤンズム攻擊をこくらうにも海外から送ってよこした、向河岸の小僧がにくまれ口をほざくのと同筆法ざや。

◎意氣地なし　は何處まで赤門に緣が切れないぢやらう。動機論が分らないちうて、屁の樣な質問を世間へさらけだしたは、哲學科三年生といふ小僧どもぢや。そないな事は學門の蘊奥とやらを窮むるといふものゝいふべき事ぢやないよ、世間の沒分曉漢に窺って見る要もないぢやないか、先づ君等の腕を見せろ、この頃は赤門がぐらついて來たといって世間の評判がやかましいぞ。

◎長田が椿姬　は公判になつたさうなが、何うなるぢやらうこゝちょっと見物ぢや。椿姬は多分長田がラブぢやらうよ、彼女が死刑になったら、僕は雛を燒いて餓死んでしまうと言って威張って居る？。

◎長田が非文學論　ちうは乃公はあやにく耳を借す暇はなかったが、定めて例に依て不得要領なる事甚だしかったらうよ。彼男ら何處まで小供ぢやらうどいって笑ふ奴もあるが、あの男にしちや善い處へお氣が附かれたわい。もう／＼彼男もこゝいらを機會に心機一轉が善からうて。

◎作家の古手　は厄介物の一つぢや、まだ古鞋がスタになる方が餘ッ程廢物利用の方へ近道ぢやわい。あーあ、取りたくないものは年ぢやわい。先づ古手の月鑑を繰って見ろ、年々に月々に一つ二つ三つ四つ頭數が殖へて來るやうぢや、諸君は暇なら數へて見るも善い。

◎浩々歌客の分身　ぢやといふ噂のあった劍南道士ちう男が、大變あふり立てた事のあった博覽會を當て込んで、文士大會ちうお祭り騷ぎをやらかすと言ひくさったが、ありゃものになりましたかえ。其處でぢや、萬端首尾ようと行たら、乃公が大會へ一策を獻じませう、外ぢゃない、原稿トラストちう會を組立てゝ小説屋に對抗することぢや、一頁二十錢ぢやお互にさ湯も飮めないからね。

◎兒玉花外　ちう男は新體詩人たるに過ぎないぢやらうと思ふたら、熱心な社會主義者ぢやさうな。貧乏と社會主義者、貧乏と文士、何うやら因緣がありさうぢやから、今後詩人文人から陸續社會主義者が出るぢゃらうよ。

▲北米合衆國の家庭

を衰退せしむる原因三あり

上等社會は遊戲の爲め、中等社會は大學教育の爲め、勞働者は工場制度の爲め



雜評

談屑霏々

日曜居士

▲ペストと云ふ字が新らしく出來たと云ふ人があるから見ると癙と云ふ字だ、新しく出來たのではなくッて、詩經にチャントある、憂と同訓の字だ、して見ればペストは支那三代の昔からあッたものだと、或る漢學者が論じたけれど、餘りあてにならない話で、桂湖村先生が、目に一丁字無き者は郵便の配達も勤まらないから、郵便屋の記號に一丁即ちテの字を用ゐると云ッたのと、同一の解釋だらう。

▲某新聞に惡僧と云ふ地名が書いてある、何の事かと思へば波瀾の故都汪脊(ワルッー)の事だ、そこで波瀾を法亂士とすれば、惡僧と實に妙だ。

▲ノルマントン號の船將ドレーキに奴隷鬼の字面を宛てたのと、文化年度に我北邊を騷がせた露西亞人フォストーフに放私盜の字を用ひたのは、孰れも其人物性行を云ひ現はして至極適當だ、併し放私盜を放恣盜とすれば更に妙。

▲外國の地名人名に支那音を使ッて居るのは不便極まる、是は惡僧流が分り易くッて面白い、福澤先生は流石の達見で『世界國盡』を著はした時、滿落花(マラッカ)など丶云ふ字を使ッた、猶一歩進んで、華盛頓は和新頓、倫敦は論鈍、維也納は迂遠耶とすれば好いに。

▲さうすれば隨分滑稽なのが出來るが、滑稽だけに誰にも記憶し易い、文字の都合で堀根男(ボルネオ)と書いて堀の字を假名と同樣に濁り點を打ッても宜しい、劍舞立地、於楠堀土、平出日阿なども差支無いサ。

▲先月の中旬某新聞の雜報に、苟兵也と書いてマモルと讀ませる人名があッたが、判じ物のやうだ、神田には辻詮明廻と云ふ人が居る、辻は苗字で名は詮明廻、まさかセンメイテキと音で呼ぶのでも無からうが、當人に聞かないから、まだ分らんテ。

▲西片町を散歩したら標札に富士川游と云ふのがあつた乾度どこかに富士山登と云ふ人も有るに相違ない。

▲文字に拘泥すると隨分議論が始まる、或漢學者が蚤と虱と元來同じ物だと云ふから、其理由を聞くと、叉も卂も刄と云ふ字の古躰で、共に刄を以て刺すが如く人を傷くるものだと。

▲越後の館柳灣と云ふ學者は、友人と鰻屋へ往ッた處、座敷の扁額に、論語の溫良恭儉讓の五字が書いてあるので、友人が何だ人を馬鹿にした、こんな處に論語の文句とは不釣合だと云へば、柳灣の解釋に曰くサ、蒲燒は冷えないうちに限るから溫、魚は上等だから良、恭はお客樣を大切にする事、儉は價を低くして不當の利を得ない事、是だけはこじつけたが、讓の字に困り、友人から問ひ詰められて、御客樣御こみ合ひの節は前後御容赦下され度候、是が讓だと。

▲野蠻未開の民は貝殼を以て通貨として居たから、金錢に關する文字は多く貝の字の扁旁がある、賄賂の二字も貝扁の處から考へれば、敎科書事件ばかりで無く、歷史以前太古の時代に、最早賄賂と云ふものがあッたと見える。

▲寶と云ふ字は餘程考へたものだ、珍貝が家の中に蔵ふてある、併し家の字の中は豕だから、支那人の先祖は豕であッたらう、ダルヰンの進化論にある猿が人に

なッたとは西洋だけと思はれる。

▲哲學者は世の中に活用しないで、つまらぬ理窟ばかり考へて居る、即ち死學者と云ッても宜い、そこで東京の職人などは、オイ何處へ往ッた、今日は折口で縁起が惡りいや、と云ふが、折れ口は即ち哲の字で、死んだと云ふ事である、だから哲人と云ふ者は歴史に名を留めた昔の人間ばかりで、現在生きて居る者は無い。

小観録

小妖星

●分らぬものは新聞の發行紙數と記者の俸給なり。

●社員に向て發行高を尋ぬるは、紳士に向て借金の有無を問ふと同じ無禮なり。

●記者に向て俸給高の實際を問ふは、貴婦人に向て年齢を問ふと同じ無禮なり。

●都下一千の新聞記者金持ちと呼ばるゝもの只二人あり。

●早稲田出身者に記者の多きは恰も三田出身に實業家多きが如し、各社大抵二三人乃至五六人の稲門出身記者有り、之を全國に見れば餘程の數なるべし、而も未だ一人の卓出せる者を聞かず。

●學堂青萍木堂龍溪等の新聞記者たりし時代より一般に記者の估券下落せしを覺ゆ、蓋し今日の記者は伎倆劣れるに非ず時代の進歩せるが爲め同一伎倆の者が頭を揃へ居る故ならん。

●今日の記者中八大家を撰ぶとすれば、先づ左の如くならんが大部分は其全盛期を十年前に送り了はりし人なれども取て代るの新人物未だ出でず。

徳富猪一郎	朝比奈知泉
島田三郎	陸實
黒岩周六	三宅雄二郎
池邊吉太郎	石川幹明

●單に外交記者として三面記者として或は編輯長として伎倆有るものを數へば中々に多し。

●秋山定輔氏の如きは記者としてより新聞事務家としての人なり、黒岩周六氏の如きは其兩方を兼ぬる人なり、記者としても論文小説有ゆる方面を兼ぬる人なり。

●三宅雪嶺氏の如きは單に思想家なり、記者としては多くの缺點を有す、内村鑑三氏も亦同巧異曲の人なり。

●若し井上哲二郎氏をして新聞記者たらしめば哲學者としての氏より更に數倍の成功有らん。

●日刊新聞たらずして日刊雜誌たるもの日本二六讀賣

●東京便りを取り去りし國民、二行の片々を取り去りし報知、直ちに讀者の一半を減ぜん。

●先月に於ける最も見るに足るべき文は、前後三回萬朝報に顯はれたる「島田三郎を憫む」の文なりき、其の三殊によし、之に激厲せられて島田氏に對する同情の念を强からしめたるもの決して少なからざるべし、文は氣を尙ぶ、此の文の讀むべき所以玆に在り。

海与些談

零翁

△何が辛ひと云て船に醉つた程つらいものは無ひ、飲食物は勿論の事、ツイ今の前まで何とも無かりしペンキの匂ひ、機關の響き、其外見るもの觸るゝものの五感悉く嘔吐の種である。

△船暈を治するには色々の藥も有るが、一向効目のあるものが見當らぬ、海が荒れ出したら進んで運動をするがよしと云ふものもあれば、退ひて平臥するが一番だと云ふ人もある、酒客はブランデーを煽るに限ると云て居る、併し翁自身の治療法は平臥の一方である、勿論短時間ならば眠るに限る。

△曾て佐々木東洋が話した、船て嘔吐を初めたら水を呑まぬといかぬと、吐ひては飮み、飮んでは吐き、何か吐き出すものを胃中に送らねば遂に胃血をも吐き出すに至るからである。

△禪學をやつたものに船に醉ふものが無ひと原坦山が言つた、それはそうでもあろう。

△日淸戰爭中、臺灣へ兵士を送る時、東海丸の船長が其筋の命を受けて、如何なる種類の人間が船に醉はぬかを調査した、其結果は兵士でも人夫でも、監督の位地に居るものは平生船に弱きものでも決して醉はぬ、醉ふものは責任の輕きものに限るとのことであつた。

△有地海軍中將の話しに、自分は大の船嫌ひて商船に乘つた時は橫濱神戶間でも必ず醉ふ、併し自分が指令官として軍艦に乘り込んだ時は決して醉はぬ、いざ難船と云ふ時には一人の船暈者も見當らぬと同じであると。

△右と同じく餘程船に弱ひ男でも妻子を連れて居る時は滅多に醉はぬ、責任が附くからである。

△責任のあるものが醉はぬ計りでない、妙なこともある、曾て仁川に行く時、長崎へ着く前から同室三人へト〳〵になつた、長崎で一人の美人が同室へ便乘した、

それからと云ふものは風浪はます〳〵劇しかつたに拘はらず三人共ケロリと船暈が無くなつた。

△ドーブ、カレーの間は僅か二時間なれど酔はぬものは少い、高楠壽村佛蘭西より龍動に出る時、其豫防策としてワザ〳〵前夜の睡眠を節し置き、船に乘り込むや否眠りに就いた、不圖目を開けば船は最早靜かてある、ヤレ嬉しや最早着たかと、蒼皇手荷物を提げて甲板に出づれば、船は何かの都合で數時間出發を見合せ、マダ元の港に碇泊して居るのであつた。

△文部省屬官の一學士、或日省中て「僕は船が大禁物て命を取らるゝよりもつらい」と云つた、是を聞ひた局長「デハ君の留學命令も取消さねばなるまい」右の學士殿急き込んで「イヤ洋行は例外です」。

Kind-hearted.—"He's a kind-hearted automobilest, isn't he?"

"Exceptionally so I never knew him to run over even a child, unless he was in a hurry."



諷刺之文壇

寫生帖

(一)此人物賣物也

隨觀隨筆生

一日本鄉街頭に於て痴人を見る。背に約半紙大の紙を貼る恰も印半纏の如し。文字あり曰はく「此人物賣物也」

何者の惡戲ぞ、彼が知らざる間に斯くの如く彼を辱めたるものなり。されど之れを一個の諷刺畫とせんか。氣味よくも今の世を嘲罵せるものとやいふべし、今の人物多く賣物なり、黃金を以て殆ど其總てを買ふべし。買收とは明治の新熟語に非ずや。

世傳ふるものあり、岩崎男は政黨の運動費に幾十万金を出せしと、若し眞なりとせば大勳位以上在野大多數の政治家を買ひ得たるものなり。黃金なる哉。然れども見よ島田三郎氏を、横濱に於ける議員候補を三万金にて買はんとする者あり、一言の下に之を斥けて堂々の陣を張れり、吾人は轉た其信念の健强なるを嘆ぜずんばあらず實に曉天の星は其光微なりと雖旅人の目に如何に氣高く映ずるか、然も其對敵たる加藤奧田の二氏は如何に、苟も一度國務大臣及び次官の椅子に在りしものに非ずや。要するに議員選擧とは人物賣買の別名なり。立憲の政治も亦難有哉。

(二)實益を與ふるの小說家は只一人有るのみ

吾人は文學の評論を能くせず、小說の眞價値を知らず。而して弦齋の小說の如き文藝上の價値ありやなしや、敢て吾人の關せざる所なり。されど面白き小說として世に讀者多き事はいふ迄もなき事實なり。故に吾人は社會敎育の良材として弦齋の道樂小說を歡迎するものなり。

弦齋『日の出島』を終りて通俗科學談の筆を擱けり。次に談る所は何ぞ、家庭、感化、要するに通俗敎訓講談の如きもの、『釣道樂』これなり。次に『女道樂』これなり『酒道樂』これなり。而して今出づる所のものは通俗衞生談なり、『食道樂』と名づく。時に胃腑の構造を說き消化の作用を論じ、或は喰合せの怪氣焰を擧ぐ。然もこれを事新らしく、且物珍らしく面白く婦女童幼の耳目に注入するは弦齋を多とせざるべからざる所なり。中等以下の社會に向ひて、かゝる趣味あり實益ある物語を供するもの弦齋を措きて幾人かある。吾人は文學者に非るが故に若き男女の痴話を好まざるなり。唯弦齋の道樂小說をのみ愛讀するものなり。

(三)乞食的慈善事業

慈善事業も殆ど當世の流行となり了んぬ。然れども多く乞食的なり。見世物的なり。殊更らに悲慘を示して人の哀を乞ふ。緣日に於ける乞食を見よ「可愛相なは此兒で御座い」と痛はしき不具兒を見せ物にして人の弱點を刺擊するものあるに非ずや。

慈善事業の幻燈を見る。概ね皆然り。此兒の父は盜賊なりき、此兒の母は姦通せり、此兒は乞食なりき、然るに今は斯くの如しなど其父母を辱しめ其兒を罵り剩

へ一々其名を告げて彼等が過去の罪惡を社會に暴露し以て世の同情を得ん事を思ふ、見たるもの果して如何。且兒の將來を傷けざるか。これ豈慈善家の所業ならんや、廿世紀の慈善事業は果してかゝる乞食的見世物的のものなるか。强いて慈善救濟の必用を語り其功果を知らしめんと欲せば乞ふ不幸不具なる可憐兒の名をいふ勿れ。

一日救世軍の幻燈を見る。唯一人ホップス爺なる大盜賊の名を聞きしのみ、其他幾多の改悔者被護者皆彼等が救濟されたる當時の面影を一閃せしめしのみ。其過去に於ける罪惡醜躰に就て少しも世に語らざりき流石に文明國の慈善事業なる哉。又何かなしに金品を與へず安宿安料理と稱し幾分にても價を拂はずんば之れを救與せず、又勞働保護所などいふものを設けて自活勤勞の習慣を强ゆるが如き多く其救濟法の文明的なるを見たり。乞食を集めて乞食を敎ふるもの豈廿世紀の慈善事業ならんや、

(四)女子と慈善事業

我國に於ける婦人の地位卑きは、女子に敎育なき所以なりと、勿論それに相違なし、相違なしと雖所謂學問のみを以て其位置を買ひ得べき者に非るなり。

抑も女子の能力は先天的に男子に劣る。要するに夫唱婦隨の位置に立つを自然とす。政治、實業はいふ迄もなく敎育文藝宗敎等の各方面に於ても、斯道の偉人達人聖人と稱する者男子に多く、女子は殆ど社會表面に出づること能はざるものなり。

されど女子は社會に於て唯一ツ、男子以上に成功する餘地を所有せり、そは慈善事業なり。婦人の情熱が利他的に開展せらるゝ時は天下の蒼生悉く蘇生す。此點に於て婦人は其家族に灑ぐ同情を押し擴めて社會の悲觀的方面を救ふべき天職を與へられたるものなり。家族間に於ける婦人の位置は家族に對する同情の厚薄に依り、社會に於ける婦人の位置は社會に對する同情如何による。試みに婢僕を苛責するを止めて心より彼等を勞はらば主婦の地位自ら定まらん。

故に婦人が社會に於ける位置は寧ろ民法を學んで妻の權力を主張するよりも、紙屑錢を慈善箱に投ずれば、より速かに其の位地の高まらん事疑はず。婦人が社會の尊重を受けて、男子と同等の位地に置かれん事を思はば須らく女子大學に入るを止めて、傳染病院の看護婦に行くべし、免囚保護院に行け、癩病院に行け感化

院に行け孤兒院に行け。所謂女郎と乳母と下女との外に婦人が爲すべき業ある事を社會に掲示せよ。こゝに初めて男子と共に社會の地平線上に立ちて握手する事を得ん也。然らざれば永劫臺所の鼠と友ならんのみ、歐米に於ける女子の位置は、殆ど慈善事業の成功によりて得たるものなり、聊か女子の爲めに一言す。

(五)衣服改良調査會

男子の改良服として、

(一)既に洋服あり、然れども實用に用ふるよりは禮服シャレ服として用う

(二)又筒袖あり、然れども商人職人の輩之を實用服とし用ふるのみ、國民服として未だ世界に示し難し

要するに先づ此長き袖を斷つ事は動かすべからざる原案なれども一般に洋服を用ふべきか、又今の筒袖を更に美術的に實用すべきか。此等改良の方針を研究し普及の方法を調査せざるべからず。既に國語調査會あり。今日の如き國民の躰面に關する服裝、非實務的にして國民の活動を防害するが如き服裝、是等の改良に就て、衣服改良調査會を起し、公衆共に之れを研究せん事を望む、而して先男子改良服より初めよ。女子は意外に模倣的のものなり。女子改良服の如きは自ら獨り定まらん。

吾人敢へて襟(カラー)に非ずと雖、我筒袖時代の日本を思はずんばあらざるなり。筒袖時代の日本人は活動的にして膨脹的なりき。筒袖時代の日本とは羽織袴を見ず、三枚襲ねを知らざる時代なり。伊弉諾、伊弉冊の尊が天の浮橋に下り立たせ給ひし時代なり。二神は筒袖を着給ひき、而して大八州國を生み給ひき。

(六)袖長き人種

聊か參考の爲めに言はん。世界の地理を繙いて所有人種の風俗を見よ。如何に大膽なる堅忍なる探險家と雖日本を措きては袖長き人種を見出す事能はざるべし。數百年以前に於て支那に長袖の人民ありしと雖今や亡びてなし。我國獨り之を學びて長へに改めず、衣服に於て日本は一千年間活動世界より遲れたり。

(七)新聞紙の挿畫

新紙中には往々挿畫を名として、三面の事實を寫し、或は髪を亂し庖丁を擧げて人を殺すの狀を書き、或は

眼を瞑らし拳を固めて婦女子を脅やかすの狀を寫し、其他強盜、強姦、喧嘩等のあらゆる不倫不德を遠慮もなく描寫して、以て讀者の好奇心に投じ、隱約の間に殺伐の氣を養ひ、鄙猥の情を敎へんとするものあり、吾人は斯る插畫を見る每に、實に不快嫌惡の情禁ずること能はず、新紙の世を賊する甚だしきを憤らずんばあらず、然も斯る新聞は特に表に正義を標榜し、第一面には憶面もなく自家の主義と抱負とを述べ立て、人道を叫び、道德を鼓吹して世に貢献する所あらんなど云ふ空々しき吹聽を爲すに至つては、其面皮の厚さ計り知るべからざるなり。

短文

我國の文學者に就て

▲働を取るの力もなく、算盤を持つの氣力もなく、腰辨にて役所や會社に出勤するの忍耐力もなく、さりとて學問を專攻するの勇氣もなく、云はゞ懶氣もの丶商賣殷ころんでもころんでも、鼻下を糊すること丈は出來るならんとの浮氣根性より、文學者にても成らふかとの大立志、美文や韻文をひねくつたり、くだらぬ小說を書ひたりなぞして、春陽堂や博文館にぺらぺら御辭儀の三百計りもして後、漸く新小說や文藝倶樂部の一端を汚すことを得れば、これて自ら天晴れの文學者と成り濟まし、月桂冠でも得た樣な心持て、碌に讀みもしない僻に、ダンテは何うの、セーキスピーヤは斯ふのと齒の浮く樣な事ばかり云つて、世間が文士を冷遇するとて業を煮やし、文士保護論などを擔ぎ出して、何處までも間氣根性を失せざるは、今日我國の文學者と稱する輩なるぞ是非もなき。

（眞砂夫子）

▲フランクノリスは曰く「小說家は最も多數の聽衆を有する演說家である、幾千万の聽衆は其耳傾けてる間は彼の言を信じ、彼の言に醉ふものである、小說家は社會の大教育家である、彼の責任は至大、彼の勢力や至高である、彼は心の研究者たると同時に事の研究者併せて宇宙の研究者である、彼の目は人間界に注がれ彼の心は天に遊べり……」依て余は日本の小說家に就て曰く「小說家は最も多數の聽衆を有する落語家である、幾十百の聽衆は其耳傾けてる間は彼の言に笑ひ、彼の言に戰へてゐる、小說家は社會の大敗德漢である、彼の責任や至小、彼の勢力や至微である、彼の目は美人界に注がれ、彼の心は生計に懊惱せり……」かくて行く所は小格子か何々

（苦寬）

▲小說家で一番生產的なのは鷗外逍遙弦齋である、彼等は皆本職を有して各々天下に貢献して居る、弦齋に至ては所謂文學者から蔑げすまるゝが、近時報知紙上に載せてある何々道樂を見よ、之等は實に有益至極のものである、もし社會を益するのが小說家の第一義であるならば彼は第一等の小說家である、現に僕の家内は食道樂を讀み出してから甘ひものを食はせる樣になつた、海老茶連が之に注意しないのは實に惜可してある

（玉本）

▲警視廳の某刑事巡査曰く「文學者なんていふ手合が一番いけませんな、チヤント種が上つてるのでも三四つ處か十も二十もありますが、あいつ等は隱すのが上手なので網にや中々かゝりません、一つ二つ言へば東京て馬鹿に元氣がつてる新聞……まあ名は言はなくてもよかろう……

夫に一人居ますよ〇〇〇〇〇つてのが、奴は友人の不在に乘じて其妹を強姦したので、外にも詐欺恐喝二三の犯罪がありますけれど、被害者が秘してるから如何ともならずに沒もれてます、夫から又〇〇〇〇〇てのは友人の洋行旅費を預かつたまゝ費ひ込んで、其儘雲隱れ、被害者は今人力挽きになつて居ます、夫から又一人之も友人の金を使つて終には喧嘩を吹掛けた奴、夫から女の取合に負けて甚く敵手を紙上で攻撃した奴、數へれば濱の砂子どころではありませんよ、まあ人間の屑ですね。

(戰慄生)

▲可笑しいのが獨りよがりの竹風可哀そうなのが四面楚歌の鐵幹、厭なのが多幸の天隨、つまらないのが間抜の桂月、持てそうで持てないのが氣取屋の柳村、どうても持てるのが鷗外、親切そうで不親切が逍遙、其反對が露伴、瓢簞鯰が紅葉、モーパッサンとバルザックが孤蝶、リテラリーダイヂェストが孤島、下り坂が宙外、黴菌浩々温健が抱月鳥水標悍が捫汀海溪其外は後にしませう。

(順風耳)

▲私の好きなのが評論家て鳥水温なしいから、新躰詩家て白星男ましいから、小說家で春葉奇麗だから、嫌ひなのが評論家て天隨威張つてるから、新躰詩家て有明にやけてるから、小說家て天外風葉しつこいから、

(海老茶)

▲文學者其製作品と動物園

猫　紅葉（佞猾）　鵠　芦花（清癯）

鷺　露伴（雌伏）　犬　逍遙（忠實）

燕　逵齋（饒舌）　猿　鷗外（摸擬）

狸　柳浪（陰險）　狒　風葉（多淫）

（ち、か）

▲僕は文學者と云ふ言を聞くとすぐ齒のうく樣な異な感が起る、實際今の文學者は眠つて居る、いや靜に眠つてるばかりならまだしもだが、仰々しく寢言云つたり、鼾かいたりして居るのだ、假々の作物はと云ふと國民の弱點にばかりつけこんで、戀を寫したりなんかばかりして居るのである、それでも堂々たる一個の文學者、いや噴飯に堪えぬてはないか、

(神田紅舌生)



▲高賞主義とか理想主義とかハイカラ主義とかローカラ主義とか、そんな事にばかり文士連の御方々は狂していらッしやる樣だが、そんな暇があつたら、國家とか青年とか社會とかを研究して文學者の價値を知らしてほしいものである。僕の隣のお內儀曰く、「文學者とか實學者とかは、都々一作るには妙を得たものですねー」、と僕は呆然たらざるを得なかつた。

(仝)

▲一體今の文學者には泣き虫が多い、外から見るとドーしてあんなに涙が出るかと思ふ位だ、丈夫有涙不灑襟涎間と云ふわけには、まいらぬと見えるテ。

(仝)

▲歐羅巴や亞米利加の文學雜誌に唯の一行でも紹介された日本の文學者有りや否や。

(波嶺)

▲自惚と拜金の混血兒、厭味と無氣力の化合物

(H·S)

▲德富蘆花君が思想の衝突より國民新聞社を去つたのは正に注目すべき事であろふ、吾人は孰の是非たるかを知らない、又知るの要がない、這

般の背馳は到底今日に於て曲直を決せらるべきのものではなからう、が然し吾人は蘆花君の「星潮第一」巻頭の序文を讀んで蘇峰氏の局量狹きに驚かざるを得ない、請ふかの序文を讀み其一節に曰く「國民新聞は余の告白文(黒潮を揭げざる理由及退社の理由)を揭載するを肯ぜざりき、されば其今日迄不揭載に終り、しは余怠慢の罪にあらず云々」少なくとも社會一部の人士をして愛讀せしめた「黒潮」の再揭の豫告のみ頻りに出てゝ遂に一回も載せられざりしは吾人の等しく訝しめる所であつた、而して裡面の事情正に如此揭載不可能の理由があつたのである、然るに國民新聞紙上又一度も其因由を公にしなかつた、風評もなかつた、如此ものは最も調子の高ひ晰聞として誇れる、「日曜講壇」に人生修身の道を說かるゝ德富峰蘇氏主幹の新聞紙として一點德義に缺けたる邊はなかろうか、蘇峰氏は之をしも正道なりと云ふか、蘆花氏の退社の辭は之を揭げざるも或は可ならん、已に再び揭載せざる事の明々白々たる小說を只不問の程に沒し去りて幾千或は幾万の讀者をして或者には怪訝或者には失望を抱かしめた其責任は何であるか、吾人は敢て之を罪惡とは言ふまい、不道德とは責めまい、只君子を以て深く任せらるゝ蘇峰氏の行としては果して夫如何ぞと問ふのみである。

（錦街の一生）

▲三度も四度も推參仕つて原稿の居催促をてして、編輯發行期日が五日も十日も後れたのは。一夜漬を手渡しすると直に「原稿料を」と來るのだから、文學者などいふ者にも愛想が盡きると雜誌屋の小僧がいつた。

（混線子）

▲紅葉の米の飯、露伴の麥飯、鷗外の西洋料理、逍遙の鳥鍋、柳浪の豕汁、鏡花のふぐ汁、弘齊の暗汁、其他文學者の献立種々鹽梅あり、されど吾人不幸にして食へども其味を知らず

（▲▲生）

▲逍遙は小錦、露伴は常陸山。紅葉は梅ヶ谷。柳浪は大砲(?)鏡花は逆鉾、其他新進文學者とやら新進力士とやらいふもの多かるべし。

（仝　）

▲どうかして我國の文學者を褒めて見たいと思つて、種々頭を惱したが漸く見附かつた。我國の文學者は幸ひにまだ脈がある。學者は曲學といふものを振り廻すけれども、まだ我文學者の曲詩を見た事がない。精々思ひ切た所がお惚語くらゐなもので、世間が受けても受けないでも、一向かまはず手前味噌て獨酌して居らるゝ所は流石に嬉しい。未だ興至ずといつて、釣に行つたり湯治に行つたり呑氣三昧に暮して居らるゝのは如何にも詩人らしい。それでも匠氣とか、街氣とか、それとなく言譯するなどは一寸と愛らし所がある。まだ日本は文學の樂園である。

（パン子）

▲何々先生補と先生の名を傍に置いて田舍新聞の小說を書く樣になると、文學者も漸く高座に上つたので、何がしかの原稿料に在り附ける。それでも時に先生の名代を勸めて看板を借りて打つて出た時にはシタヽカ頭(コンミッション)をはねられる。文學修行もナカ〳〵つらいもので一本になつて自前でかせぐ樣に成る迄は仇や愚かの事でないのだから、子々孫々迄文學者などいふ家業はさせまいとは或る新進作家の愚痴であつた。

（へ　ポ、）

課題

我國の教育家に就て　（三月二十日）

我國の相撲に就いて　（四月十八日）

新刊紹介

▲家庭夜話 二 堺枯川氏編

東京神田南甲賀町八 内外出版協會發行

第二册質素儉約の話、加藤眠柳氏の筆にて、スコットのヴヰーカー、チア、ウエーキフイルトの梗概を書きたるもの、稍々第一册よりは遜色あれども。清新なる家庭に歡迎すべき好讀本なり。原作の面影を傳へて趣味あり教訓あり、雛祭の雛は少し小さい方で我慢して、かういふ本を御讀みなさいと世の御孃樣に勸むと爾云

（定價三拾五錢）

▲詩人親鸞 井上耕丸著

東京本郷四 文明堂發行

宗教家として親鸞は詩人として亦價値あるものなり。殊に其和讃と稱する數篇の新躰詩（漢字交り今様歌）は我日本文學史上に見逃すべからざる珍品なれば、之れを研究して我佛教文學の趣味を世に傳ふる事、吾人の甞てより囑望せし所、本書の如きは大いに我が意を得たるものなり、好著といふべし

（定價貳拾錢）

▲大坂名勝圖會 巻の一

大坂東區南本町心齋橋通東北角 金尾文淵堂發行

博覽會を當て込みての書なるべし。數葉の彩色石版畫は東京の「風俗畫報」に劣らず、大阪土産としては上乘のもの附錄に索引附の地圖を添へたるは誠に便利なり。五册にて一部完結する筈なりと

（定價郵税共四拾錢）

▲人物の理想 リギヨル氏著前田氏譯

東京本郷區湯島一丁目十三番地 昌平館發行

リギヨル先生は佛國人て加特利教の宣教師である。長く我日本に居て日本を教育する爲に間斷なく有益の著書を公にして居らるゝ、本書は日本今日の教育者が知育に偏重して德育に缺けて居るから實利的の淺薄な人間のみの世の中となつたのを慨いて。人物を要求し理想を皷吹せらるゝのである。吾人は謹んで此書を讀んだ、古今の倫理主義にかて理想に於て且つ著者の人物も粗々知られて大に得る所があつた（環批）

（定價十三錢）

▲最新東京繁昌記 上巻 伊藤銀月氏著

東京神田甲賀町八 内外出版協會發行

東京ッ兒、伊藤銀月の文、才華爛發、粹な妙な小氣味の好いアッサリした書き振りである、僕は鏡花と有美と銀月とを東京三人男に見立てたいと思ふ。東京繁昌記、慥かに最新である、上巻は遊樂の東京を寫して活動寫眞のやう、第一如何にして東京人は遊樂するか、第二樂しき一年、此編東京年中行事、字々句々、東京ッ兒が活きて跳れて躍つて飛んで走つて笑つて歌つて怒鳴つて居る。第三演劇、第四花見、第五相撲、第六御參り、第七江戸兒の大學校、第八胃嚢日記。一度水道の水を呑だ者は本書を讀まれば初鰹に笑はれる。褒め過ぎたつて譏られるたつて、かまわない思ひ切つて褒めて置く。

（定價二十五錢）

▲宗教清話 曉烏敏氏輯

京都中珠數屋町烏丸東入　法藏館發行

其前著「吾人の宗教」と同種のもの、精神修養の資料として宗教的信念を求むる人は必讀すべし。京都の出版物としては體裁紙質共に大奮發のつもりならん　（定價十五錢）

▲佛教各宗原理通論　渡邊宗全氏著

東京本郷四ノ五　文明堂發行

現今佛教の各宗派に就きて其大體の教理を知らんと欲するもの未だ良書を得ざりき。本書の如きは聊か其渇を醫するものなり。前田氏の序あり。「從來各宗の宗義を叙述するもの、八宗綱要諸宗綱要等の類二三に止まらずと雖、多くは専門的術語を用ひ、爲めに繁雜に失し或は簡略に失し今六尺君の此著あるは蓋し右の欠點を補ふものといふべしと、半ば當れり　（定價二十五錢）

彙報

●布哇より日本へ流入の利益

過去五年間在布哇同胞移民が本國へ送り返へせし金高及び日本より輸入の商品高左の如し

▲日本送金高

千八百九十六年　六十六万〇九百四十九弗
同　九十七年　七十七万六千五百二十七弗
同　九十八年　八十四万一千六百三十七弗
同　九十九年　百三十八万〇七百〇四弗
千　九　百　年　百八十四万六千〇二十四弗

▲日本より輸入商品高

千八百九十六年　五十一万三千百八十八弗
同　九十七年　五十二万四千百七十九弗
同　九十八年　七十一万七千三百五十六弗
同　九十九年　百三十五万千九百四十九弗
千　九　百　年　百廿九万六千七百八十九弗

●日本殖民會社

名古屋の瀧延四郎（長者議員兵右衛門嗣子）横濱の平沼延次郎、横井時雄等七人にて資本金十万圓を以て日本殖民會社といふを組織し本社を横濱に出張所を東京に置き、川崎巳之太郎を支配人として去月十三日設立許可を得たり、先づ布哇其の他へ移民を送るの外、重もに米大陸に土地を購入して着實なる殖民を爲す目的にて瀧、平沼の兩人よりは更に所要の資本を供給する筈なりといふ。

●韓國の傭外國人

顧問、技師、教師等總て韓國に傭聘せられたる外國人左の如し

日本　拾四人　英國　八人　米國　五人
露國　四人　佛國　五人　獨國　四人
丁抹　二　人　合計　六十三人

●認可公私立學校數

文部省に於て徴兵令第十三條により中學校の學科程度と同等以上と認定せる學校數は一道三府四十二縣下を通じ現在公私立各種學校合計百九十一校にして其内東京府下には私立のみにて四十五校の多きあり。

●遠洋航海練習艦

海軍兵學校卒業の海軍少尉候補生を乘せ遠洋航海を試みたり練習艦、松島、嚴島、橋立の三艦は去月横須賀を拔錨し香港直航の途に上りたり、航海日數は八十日と十八時間碇泊日數は七十五日、航海里程は一万七千〇十海浬、在外總日數は百八十四日即ち香港、新嘉坡バタビヤ、ペルス、アデレート、メルボルン、ホバート、エリントン、オークランド、シドニー、タウンスビル、木曜島、マニラ、厦門、釜山を經て來八月十七日横須賀に歸着の豫定なり。

●臨時總選擧選出議員黨派別

政友會	百八十六人	百八十八人
准會員	二人	
憲政本黨	八十六人	八十七人
准黨員	一人	
帝國黨	十六人	十七人
准黨員	一人	
新潟進步黨	七人	
中立	七十六人	

又前代議士にして再選せられたるものは二百四十二人新に選出せられたるものは四十三人曾て代議士たりしものにして今回當選せしものは三十九人となる

●三十五年中來遊外人數　瑞西の如き佛蘭西の如き將た伊太利の如き來遊外人の其地に散する金額は實に巨大なるものにして瑞西の如き之れを以て國命を維持する第一の材料となす位なるが昨年中外國人の本邦に來遊せし總數は一萬八千八百五十五人、之れを上陸地別とすれば長崎一萬〇二百十三人、橫濱四千八百七十七人、神戶三千八十人、門司三百七十四人、函館七十三人、下關三十一人、大阪十五人、其他の諸港百九十二人、又た之れを國籍別とすれば淸國人九千四百九十七人、英國人二千八百六十一人、合衆國人二千六百六十三人、露西亞人千六百八十七人、獨逸人九百五十二人、佛蘭四人三百三十二人、韓國人三百六人、印度人百五十五人等にして若し來遊外人一人の消費高を平均一千圓とすれば昨年中來遊外人の本邦內に散布せし金額は千八百八十五萬五千圓に達せし勘定なり尙ほ大阪博覽會等の關係よりして本年中に於ける外人の來遊數は更らに之れに倍するなるべし

●青森縣下飢饉の源因　過般岩手青森兩縣下の凶作地を視察して歸京せる岡內務書記官の語る處を聽くに青森縣下にて最も慘狀を極めたるは上北、下北、三戶の三郡にして內下北郡を最とし今日飢饉の狀態に陷れる其原因は

一、不作にして豆麥粟稗等の悉く稔らざりしと
二、昨年冬より一月に亘り非常に暖氣にて炭の價格暴落したると
三、北海道不漁なる爲め漁夫の賃錢低落せしと
四、冬期降雪皆無にして日鐵及官線の雪除け人足を要せざりしと
五、漁業は尤も豐ならず例年に比し三分の一以內の漁獲なりしと
六、他府縣不作の爲め二歲馬の市價案外に低廉なりしと
七、議會解散其他不景氣の結果官私の工作總て中斷されたると

●鑛毒調査の結果　鑛毒調査報告書は既に各委員の連署を以て內閣に提出し目下印刷中の由なるが其紙數は殆んど五百頁の大册にして全部公表する事に決議せんと云ふ內容は要するに現在の足尾銅山よりは更らに鑛毒の流失を認めずとの意見なるを以て尋後鑛意見中にも鑛業停止、除害工事と云ふが如き項目なく單に從來の沈毒を驅除する方法に就てのみ各自の意見を提出したるに過ぎずと

明治三拾六年

公論日誌

其三

公論日誌　自一月廿一日　至二月二十日

一月廿一日　△内務省土木局長田邉輝實氏宮城縣知事に任命有之候　▲敎科書事件ゝ拘引者昨日よりかけて入名其内師範學校々長二人同敎諭主事各一人高等女學校長一人、視學二人、前代議士一人にて候　▲赤十字社看護婦取締高山盈子君死去致され候　△福府會議朝十時より各顧問參集天氣を伺ひて散會致し候　▲各地大寒入大抵晴天の樣子にて候　▲本日后四時麴町日比谷高等女學校の生徒の血まみれ騷有之候いと苦々しきことにて候、

何事ぞ文よむ人の腕まくり

廿二日　▲本日英國公使マクドナル氏は十時半參內英國皇帝エドワード七世陛下の御親書及び寫眞を捧呈致し候　△本日進歩黨總理大隈伯より評議員指名したる由傳へ候　▲本日は回向院角力の九日目にて候、ペスト騷ぎにて中止されんかと恐れ居り候ひしに無事に相濟み候、此度は今勝力士無之土附かずは常陸山梅ノ谷の兩山のみにて候　▲本月農務局技師小野打悦次郎氏死去致され候　▲本日は淺草千束町にて姦夫殺し有之候　尙又吉原にも無理心中有之候、女は小紫無事男は忠吉主家解雇され行處なく硫酸二杯あほりて死に申候

硫酸や二十五年の無理心中

廿三日　●日本漆工協會后一時より常盤木倶樂部にて東京陶器協會總會前九時より外神田福田屋にて有之候、△巡査鼠に嚙まる或は有菌鼠發見などペストの餘燃未だ充分にさめず候へどもまづ〳〵下火になりて漸次おさまり候樣子なるは大慶の事にて候、

春の日やちうすてられて敎科書と成る

廿四日　○本日上野三宜亭にて本派本願寺法主逝去に付き參列員派遣の爲め準備として本派青年大會を開き候　●日本美術協會內にて博覽會出品鑑査會を開き候、本日尙同會にて繪畫研究會も有之候、

廿五日　△ベエチジュラ事件最近の電報により候へば去る十七日に砲台よりの發砲に初まり獨逸軍艦よりの發砲は二十三日まで繼續したりとのことにて候　▲今朝深川にて奉公を厭ひたる爲め乞食となりし小僧徘徊致し居り候生れは滋賀にて姓は永田年十三のよしに候昔しの秀吉は奉公せんとて橋上に野臥りとなりて遂に泥棒を手下と致し候今の小僧は「奉公のはては野臥せり大泥棒」とや申すべくと存じ候

二十六日　▲日本赤十字社理事會前十時より開會のよしに候　●東京彫工總會后一時より上野花月亭に有之候　▲林野整理委員會亦前九時に農商務省に開かれ候　●本日午前文部省にて、奧田義人、津田眞道、志田鉀太郎、杉亨二（以上博士會推薦）水野錬太郎（論文呈出）の五氏は法學博士の授與式有之候、△政友會總務委員會前十時より開かれ候　○尙本日は神戸より電報に同縣御影師範學校長及び高等女學校長は例の敎科書事件にて拘引されたる由傳へ候、

二十七日　▲總武鐵道總會后一時地學協會にて開會　▲例の南米ヴエチジュラ事件も遠からず調停すべきよしの電報有之候　▲又同日の電報には南阿のナタル洲ダーバン港にペスト流行の由傳へ候　▲富山縣凶作地の慘況非常なるよし哀れなることにて候　▲本日は獨逸カイゼル皇帝の誕辰祭の由にて同公使館に賀會有之由に候、

つり騷いかにてるらん今日の春

二十八日　○佛敎大演說會前十時神田錦輝館にて　▲故北白川宮殿下銅像除幕式前九時より　○商船學校學科課程調査委員會前九時より文部省にて以上何れも本日の重もなる會合にて候、▲本日の倫電は恐ろしき珍事を傳へ候そはコルチーハッチの養育院なる猶太婦人部屋

に火災あり五十二人焼死したることにて候、△本日前十時司法大臣は目下上京中の各檢事長檢事正を官邸に招集し總選擧に關する訓示演說をなしたる由に候　△樞密院會議も有之候、▲東武鐵道社長臨府業輔」本日死去致され候、振附の名家たる花柳壽輔も本日死亡致し候、

廿九日　本日の會合は　▲日本興行銀行總會后一時より　△中央衞生會議内務省にて等其他に候　▲今曉三番町に放火有之候も幸に半焼にて鎭まり申候　▲今日四谷にて妾となれと迫まられ身を守りて甲武線の鐵道にて轢死せんとしたる婦人有之候

　槙の葉や秋早くすぎて今枯れんとす、女名は槙に候

三十日　△本日荏原郡大崎村にて鷲口猪一つ發生致し候、尙本日は神聖なるべき孝明天皇祭にて御座候、

今日午后ありし事は拐帶、行倒、(二)チーハ、投身未遂、窒息、等にて候、

三十一日　▲米國大統領は銀貨問題に付き議會に對して銀の價より生ずる國際上商業上の害を論じたる教書を送りたりと倫電は傳へ候　△衆議院議員の臨時選擧は動々色めき立ち候、取りわけ横濱市に於ける平沼專藏候補辭退島田三郎氏排斥の一事は尤も注目すべき出來事にて候、△歌人中島歌子女史死亡致され候　▲第二回捕鼠抽籤の結果は今日發表致され候、▲今日零時より東京は降雪頻りにて客冬には少しも降らざりしに近來稀れなる大雪と相成り候、

　立春や花咲かずして雪頻りなり

二月一日　△本日の倫電は米國が万國幣制會議に出席せしむる爲め三名の老練なる實業家に委任すると云ふこと及び英國の外務卿次官はヴエチシユエラに關し日英同盟のことに付て述べたること及びモロツコの叛亂に關し傳へ候、△内地の政界には別に事なく候

二月二日　△本日の倫電にはモロツコ叛亂にて官軍大に勝つの報有之候　▲又内電には昨年杜國に行きたる松尾等なる者トランスバールへ千名の移民契約したる由門司より傳へ候　△本日政友會總務委員會有之候、東京支部の候補につき進步黨との交涉纏まりたる等の報告有之候　▲今曉谷中天王寺へ强盗押し入り拔刀にて脅かし若干の金子奪ひ去りたる由に候　△一時さわぎと相成り候ペストも殆んど全滅に近く相成り候處本日淺草にて醫師の誤診よりペストなりとて大騷ぎしたる珍談有之候

　ちうや鼠それペストが飛び出した

△本日京城發の電報によれば同國政府は第一銀行仕拂手形を流用するものは嚴律に處するの旨布告したる由に候、

二月三日　△北清會會長天野文雄氏の披露會后三時萬安に有之候　△尙市區改正常務委員會は三十七年度豫算協議會有之候　▲偖て本日故福澤諭吉翁の三週忌の由に候　〇教科書事件は元東京府視學平田汚太郎氏今日拘引され候　又同事件に關係ある川淵檢事正は今朝司法大臣を訪問致し候　△内相以外の閣僚總て登閣朝十時より内閣會議有之候　△本日青森縣凶作救濟委員は内務省に地方局長を訪問せる後臨時の地租免除の法令發布臨時縣會にて縣債募集を請願する等の決議をなしたりと傳へ候　△今日又々東京は大雪にて新春に入ての大雪花まつ迄の慰みにや候はんと存じ候

　咲くまでは花とも見ばや今日の雪

市内の電線電話等大分切斷したるものもあるよしに候

二月四日　△本日はこれと申す程のことも無之候唯外電は英皇の不快とボーア將軍プリンスロー氏の死去の外南米ヴエチシユエラ事件に關

する少しの報道ともたらし候　▲偖て今日は節分にて御座候、
△本日府下雜件に白さく
　營養不充分。(にして)狂人。(となり)靈中演戯。(して)惡戯
　青。(のはては、青山の賭博(となる)とても地ぐるべくや候
　はんかし

二月五日　△倫敦電報によればヴエチジユエラ事件は鎭定したれどもドレフユー事件再燃せんとしバルカン半島にはマセドニヤの委員が同地に向て今春は規律ある侵入を試みんとしつゝありとて列國非常に危惧の念を抱き居れりと傳へ候　△又韓國よりの電報によれば例の第一銀行券禁止に付き本公使より損害賠償の要求せしよしに候　△尚內地電報は門司にて韓國白銅僞造者の捕縛を傳へ候此白銅の僞造は大坂にも有之彼地此地に少からざる樣子に候　△本日午後には政進兩黨の交涉會有之候　▲昨朔より今日とかけて下谷にて九人組の少年泥棒隊捕へられ候皆十四才より十六才までの者のみに候其首長は岡本繁吉(十一)と申す惡者にて候　▲尙雜件には妊娠せる孁の投身、親代々板の間稼の就縛等有之候

二月六日　▲本日英國公使館にて熊本癩病院の慈善音樂會有之候　▲內地電報に日はく北海道滊車は降雪の爲め全部不通なりと　▲本日遞信省は淸韓郵便爲換料を改正發布致し候　▲本日淸韓兩國に醫學普及の目的にて設けられたる同仁會は法人認可に相成候　▲本日の雜件には稍珍奇なる出來事有之候、
　　荒れ馬人を殺す、　　　踏淺み馬荒れて人を踏み殺す
　　女房を盜む明巢狙、　　女房の明巢も狙はんおぼろ月
　　巳が罪は誰が罪ぞ、　　子を思ふ暗に淫賣る女憐れなり
▲本日例の鑛毒王田中正造與島田三郞氏の爲め憤慨して應援に出かけ候

二月七日　▲本日錦輝館にて不良少年感化部同朋園の爲め慈善演藝會有之候　△倫電は英皇の快復を傳へ候　○本日京都にては本願寺派本願寺法主の葬送有之候　▲恐にして憐れなるは酒毒に中てられ發狂したる男の警察に保護願ふとかけ込み卒倒して死したる事に候
　　酒飮や四十五年遂に飮まれけり
▲本日深川にて大消毒法執行せし時巡査の家より鼠發見致し候
　　くや〳〵これ何ぞおやわらが家

二月八日　●學士會院演說會上野美術學校にて后一時半より井上哲次郞氏「過去の宗敎と將來の道德」(反對者の惑を解く)なる題にて講演有之候　●尙ほ他の講演會は歷史地理學習所科外講演は東京文學院(小石川傳通院にて)等にて候外に能樂俱樂部演說會も有之候　▲今曉上野あたり寒風肌を裂くの時錦小路にぼろ下げて卅前后の女徘徊なし候間へば男は廿人も持ち酒は二升も飮む莫連の者の由これ自業自得とや申すべく候はんか、
　　霜ふんで卅年迷路の今朝いかに、　　名は霜にて候

二月九日　▲本日の會合
　日はく日露協會茶話會、日はく伊學協會役員會、日はく同仁會協議會、日はく中央茶話會役員會　これらにて候
▲今日警視廳第三部にてペスト豫防會開かれ今後のペスト豫防に關する會議有之候　▲正金銀行倫敦支店長中井芳楠氏死去致され候
△倫敦電報はマセドニヤ事件に關し土耳古が出師準備せるを傳へ候
△又京城電報は銀券問題に關する日本の要求條件をも傳へ候　▲又倫電の一に南洋の佛領ソサイエチー諸島は海嘯の襲ふ所となりて千名許り溺死せり」日米國のトラス禁止法案は通過せりとの二報を傳

へ候、

二月十日　△本日内地の電報にて尤も多きは各地の候補談に候、少しく異りたる報は下の關へ清國償金廿一萬圓到着のことゝ陋館砲臺の試驗射擊件のみに候　△又外電には倫敦より清國に於ける白耳義國の新權利獲得を傳へ候白國は清國に於て殖民地を設くるつもりの由に候　▲又京城よりの電報は中央銀行設立計畫の道行を傳へ候　△今日横須賀にて水兵の自殺未遂有之候相も變らず遊廓內にてとか　△家國の干城も女との紲討にはいともろき命にて候　▲倘深川にても放蕩者の劇藥自殺有之候、

毒のんで死する命も二十年

二月十一日　△本日は紀元節にて御坐候、朝來の好天氣いと芽出度きことにて候、吾人は此吉日に於て　主上豐明殿の御宴の外哉早不潔なる出來事は傳へ申すまじく候、▲歐米新版朝者演說會后六時神田靑年會館にて法治國民思想涵養の目的にて創立せる會社は本日創立式有之候、●やかましかりし川上音二郎の醜案劇オセロ今日より彌々開場致し候、

▲倘前代議士栗公哉一氏死去致され候

願はくは香ひも殘せ巴里の花

二月十二日　△外電に申さく(一)銀券問題の一段落(京城發)(二)林公使對韓(同上)(三)ッエネッユエラ事件に對して獨逸の要求は過大なり
▲雪口痛又もや盛んとならんとするの徵有之候に付き本日警視廳令にて訓令を發せられ候　▲本日も晝夜盛天夜に入りて又もや甚寒、雪と相成り候、本年は爽明后反て寒く候が今爽明后の平均溫度を申上げべく候　四日二、九。五日一、九。六日二、二。七日一、五。八日二、三。九日四、五。十日三、一。十一日六、一。十二日七、一。

にて御坐候、●圖書調査委員會后四時半より帝國教育會に於て東京友禪組合モスリン友禪の觀覽常盤木俱樂部にて共に本日の會合に候

二月十三日　▲本日海軍大臣は十五日發途すべき遠洋航海者のために常備艦隊司令官上村少將以下嚴島、橋立、松島の三艦乘組員を霞ヶ關官邸に招きて送別會を催し候　▲本日も昨日より續て雪になり申候これにて爽明后三度めにて御坐候　○學術研究旅行の途次本邦に立ちよりたる洪牙利國高僧伯爵ウエード、マウアヤ氏は本日兩陛下に拜謁仰せ附られ午前十時半參內致し候　▲森木の名士高橋泥舟翁今日年六十九才にて死去致され候、

十四日　△外電はあまり見るべきこともなく內電亦各地選擧の狀を暴報するのみにてこれぞと申し申すべきことも無之候　●相變らずの教科書事件彌々深うのみなりゆき候て、師範中學高等女學等の校長の拘引は追々多くなりゆくのみに候　●日本文學會講演會午後六時より靑年會館に　△自由投票同志會演說牛込神樂坂毘沙門寺內に　●工談會演說會午後一時神田明神內開花樓に有之候　○國民英學會創立十五週年祝會午後一時より靑年會館に有之候　▲本日馬鹿者あり本所署へ保護願出てしも取り上げられずとて此度は他にて物品を盜み來りこれて飯を食はして下されますかと貧は人を器械と致し候

雪の日や餌なき鳥ぞあはれなる

十五日　▲上海特電に曰はく呉汝綸先生死亡すと　△本日は俳行社創立紀念會の由にて有之候　▲今日俳優尾上菊五郎橋本國手の宅へ年賀に行き持病再發致したる由に候、
▲本日の會合は次の如くに候、
●日本漆工會靑年會總會後一時美術學校にて

海老名彈正先生編

耶蘇基督傳

上製 六拾五錢 郵稅拾錢
並製 五拾錢 郵稅八錢

大好評 第五版 出來

海老名先生は**日本的基督教**の**驍將**にして基督の人格に於て近來教界の論壇に石火を飛ばしつゝあるは皆人の知る所なり、而して此千古の宗教的天才を傳ふるもの我邦また二三の書なきにあらずと雖、或は單に福音書の切拔に止まり或は主觀的理想的基督の讃評に陥り未だ歴史的考察に基く正確なる叙述なきを憾とす、本書はエスキリストを猶太國の歴史の一時期に生れたる一個**歴史上**の**人物**として主として其時勢と周圍に於ける關係と活動を描けるものなり



發行所 東京本郷四丁目 文明堂